早稲田大学大学院日本語教育研究科

博　士　論　文

「待遇コミュニケーション」における「敬語表現化」の考察
―待遇表現教育の観点から―

金　東奎

２００６年３月

＜目次＞

Ⅰ「待遇コミュニケーション」における「敬語表現化」

1.問題提起……１

1.1 問題提起および研究目的……１

1.2 先行研究……１０

2.「敬語表現化」の概要……１３

2.1「待遇コミュニケーション」における「敬語表現化」の概要……１３

2.2「敬語」と「敬語表現」の概要……２０

2.3「敬語表現化」の概要……２３

3.「敬語表現化過程」……２５

3.1「内言」と「外言」……２５

3.2「内言」としての「言材」―「ゲンザイ」……３０

3.3「内言」としての「通常表現」―「通常表現」……３３

3.4「敬語表現化過程」における「敬語表現化要素」……３７

3.5「敬語表現化過程」と「敬語表現化」……３９

3.5.1「敬語表現化過程」……３９

3.5.2「敬語表現化」の例―「敬語表現化」の実際について……４３

4.「敬語表現化要素」……５５

4.1「敬語表現意識」……５５

4.1.1「敬語表現意識」の規定・性質……５５

4.1.2「敬語表現意識」の問題―「敬語表現意図」……５５

4.1.3「敬語表現意識」の問題―「尊重」の意識……５８

4.1.4「敬語表現意識」の問題―「敬語」「敬語表現」の普遍性における認識……６２

4.2「敬語表現認識」……６４

4.2.1「敬語表現認識」の規定・性質……６４

4.2.2「敬語表現認識」の問題―「人間関係」に対する認識……６６

4.2.3「敬語表現認識」の問題―「場」に対する認識……６８

4.2.4「敬語表現認識」の問題―「題材・内容」に対する認識……６９

4.2.5「敬語表現認識」の問題―ストラテジーに対する認識……７０

4.3「敬語知識」……７４

4.3.1「敬語知識」の規定・性質……７４

4.3.2「敬語知識」の問題―「丁重語」とその周辺……７５

4.3.3「敬語知識」の問題―「オ・ゴ～ダ」とその周辺……７６

4.3.4「敬語知識」の問題―「オ・ゴ～ニナル」と「レル・ラレル」の使用……８３

4.3.4.1「オ・ゴ～ニナル」の性質と使用の制約……８３

4.3.4.2「オ・ゴ～ニナル」の「敬語知識」における問題と「敬語表現」教育への適用の問題……８９

4.3.5「敬語知識」の問題―「オ・ゴ～スル」の使用……９３

4.3.5.1「オ・ゴ～スル」の性質と使用の制約……９３

4.3.5.2「オ・ゴ～スル」の「敬語知識」における問題と「敬語表現」教育への適用の問題……９８

5．まとめ……１０３

II　待遇表現教育における「敬語表現化」の適用と「文話」における「敬語表現化」の諸相

1.実際の教室活動への適用へ向けて……１０５

2.「敬語表現化」から見た表現行為における問題―「手紙文」「スピーチ」から見た敬語接頭辞「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」の使用様相に関する分析・考察……１１３

2.1 問題提起……１１３

2.2 敬語接頭辞「オ・ゴ」……１１５

2.2.1 敬語接頭辞「オ・ゴ」の定義……１１５

2.2.1.1「オ」……１１５

2.2.1.2「ゴ」……１１６

2.2.1.3「オン・ミ・ギョ」……１１６

2.2.2 敬語接頭辞「オ・ゴ」の先行研究……１１６

2.3 テキスト……１１８

2.3.1「手紙文」……１１８

2.3.1.1「手紙文」の定義および性質・特徴……１１８

2.3.1.2「手紙文文例集」の定義および種類……１１９

2.3.2「スピーチ」……１２０

2.3.2.1「スピーチ」の定義および性質・特徴……１２０

2.3.2.2「スピーチ用例集」の定義および種類……１２１

2.3.3 テキストの意義……１２１

2.4 分析の方法……１２３

2.5「手紙文」「スピーチ」における「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」の問題……１２５

2.5.1「手紙文」「スピーチ」の全体の構成に関する分析・考察……•１２５

2.5.2「手紙文」「スピーチ」の「表現形式」に関する分析・考察…•１３２

2.5.2.1 名詞系の「直接尊重表現」と動詞の「間接尊重表現」の「敬語表現化」に関する分析・考察……１３２

2.5.2.2 動詞の「間接尊重表現」としての「敬語表現化」や「敬語表現」の使用様相に関する分析・考察……１３５

2.5.2.3 名詞系の「直接尊重表現」としての「敬語表現化」や「敬語表現」の使用様相に関する分析・考察……１３９

2.5.2.4「手紙文」「スピーチ」における「敬語表現化」の傾向―名詞系における「直接尊重表現」と動詞における「間接尊重表現」……１４６

2.5.3「スピーチ」における「敬語表現化」の問題―「直接尊重表現」の多用……１４７

2.5.4「スピーチ」における「敬語表現化」の問題―「間接尊重表現」の形式……１５２

2.5.5「手紙文」における「敬語表現化」の問題―「敬語表現化認識」の問題１「親疎関係」……１５７

2.5.6「手紙文」における「敬語表現化」の問題―「敬語表現化認識」の問題２「上下関係」……１６１

2.5.7「手紙文」における「敬語表現化」の問題―「敬語表現化認識」の問題３「題材・内容」……１６４

2.6 まとめ……１７１

3.「敬語表現化」から見た表現行為における問題―「敬語表現化」における「オ願イシマス」に関する一考察……１７３

3.1 問題提起……１７３

3.2「敬語表現化」から見た「オ願イシマス」の使用様相……１７３

3.2.1「オ願イシマス」の構造……１７３

3.2.2「オ願イシマス」の使用様相１―「願ウ」の「間接尊重語」としての「敬語表現化」の面……１７４

3.2.3「オ願イシマス」の使用様相 2―「指示表現」と「依頼表現」の中間的性質を持った「敬語表現化」の面……１７５

3.2.4「オ願イシマス」の使用様相 3―「当然性」の高い場合、共通の認識の「確認」としての「敬語表現化」の面……１８２

3.2.5「オ願イシマス」の使用様相 4―「あいさつ」としての性質を持った「敬語表現化」の面……１８５

3.3「オ願イシマス」の「敬語表現化」における性質考察……１８８

3.3.1「オ願イシマス」の「人間関係」に関する意識……１８８

3.3.2「オ願イシマス」の「恩恵」に関する意識……１８９

3.3.3「オ願イシマス」の「敬語形式」における「丁寧な」表現としての意識……１９０

3.3.4「オ願イシマス」と他の表現との関係における意識……１９０

3.3.5「オ願イシマス」の間接的表現としての意識……１９１

3.4 まとめ―「オ願イシマス」の「敬語表現化」における意義……１９２

4.まとめ……１９４

【参考文献】……１９６

Ⅰ「待遇コミュニケーション」における「敬語表現化」

1.問題提起

1.1 問題提起および研究目的

ある言葉や表現[1]を「敬語」や「敬語」を用いた「敬語表現」にするためにはどのような過程を考える必要があるだろうか。本稿ではその問題について考える。

まず、以下のインタビューから考えていきたい。

以下は筆者が 2001 年、日本の大学で日本語を勉強している韓国人留学生 2 名を対象に実施したインタビューである。「敬語」や「敬語表現」に対する意識を調べるための調査であった。

①インタビューの概要・形式

インタビューの対象は韓国人の日本語学習者２名であった。２名ともに日本の大学[2]で日本語を学習していた。

インタビューの際にはできるだけ自然な「敬語表現」および「敬語表現化」における意識や情報を調べるため、また、対象者の負担にならないように、インタビューだということを最初からは知らせなかった。リラックスした雑談のような雰囲気の中での質問と応答という形でインタビューを行った。インタビューの終了後、インタビューであったということを被験者に告げ、インタビューの内容の使用許可を得ている。

インタビューの際には「これはテストなどではない」「普段の私の疑問である」「正解を求めているわけではない。ただ、日本語に関する意識を知りたいだけだ」とインタビューの対象者に伝え、できるだけ質問に対する負担を軽くしようと試みた。

---

[1] 本稿では日本語に限定して考える。本稿における考え方および分析・考察の観点はすべて日本語におけるものである。

[2] 早稲田大学の日本語研究教育センターの語学留学生である。

さらに、インタビューは留学生 A と留学生 B の母語である韓国語で行った。日本語の「敬語表現」の使用様相を調べるためのインタビューではなく、「敬語表現」あるいは「敬語」に対する意識を調べるためだったので、考えや意見を比較的自由に述べることができる母語（韓国語）をインタビューにおける言語として選択した。本節で提示する内容は、被験者 A と B が韓国語で答えた内容を筆者が日本語に翻訳したものである。

②インタビューの対象者

留学生 A）

女性、２２才、大学生（専門は政治学）、日本語学習暦は１年６ヵ月。母語は韓国語。

留学生 B）

女性、２２才、大学生（専門は心理学）、日本語学習暦は２年。母語は韓国語。

インタビューの対象者は二人とも韓国語を母語としている韓国人学習者である。2 名という限られた人数で、出身国も限られている。したがって、インタビューで答えてもらった内容はすべての日本語学習者の意見とは言えないが、日本語学習者の意見を垣間見るひとつの例としての意味はあると思われる。本稿においてもそのような位置づけをしている。

③インタビューの内容（まとめ）[3]

留学生 A と留学生 B、筆者の 3 人でインタビューを行った。

ｉ）留学生 A と留学生 B に「敬語表現」あるいは「敬語」の使用・認識の問題について聞いてみた。問）は筆者からの質問で、答）は留学生 A と B の筆者の質問に対する答えである。

問１）実際の会話で日本語の「敬語表現」あるいは、「敬語」は必要だと思うのか。

答１）もちろん必要だと思う。

問２）どんな時に「敬語表現」あるいは「敬語」が必要なのか。

答２）先生とか先輩などの上位の人物と話す時に「敬語」が必要だ。上位の人物

[3] 留学生 A と留学生 B のインタビューの内容をまとめたものである。

に手紙やメールなどを書く時も必要だ。

問３）もっと詳しい日本語の「敬語表現」あるいは「敬語」の教育が必要だと思っているか。

答３）必要だと思う。しかし、「敬語」を使わなくてもコミュニケーションは何とかできると思う。

問４）どのような「敬語表現」あるいは「敬語」の教育が望ましいと思うのか。

答４）実際に使える表現の教育が必要だ。役に立つ表現の教育が必要だ。

問５）「オ・ゴ」を使った「敬語表現」あるいは「敬語」形式について勉強したことがあるか。

答５）あると思う。よく覚えてはいないが。

問６）「オ・ゴ」を使った「敬語表現」あるいは「敬語」形式は難しいと思うか。

答６）難しいと思う。

ⅱ）留学生 A と留学生 B に出身国である韓国における日本語教育、特に「敬語表現」教育の問題に対する意見ことを話してもらった。

問）A と B、ともに韓国出身で、日本語の学習を始めたのは韓国であると聞いている。今まで日本語教育を受けてきたが、A と B が考える韓国における日本語教育、特に「敬語表現」教育に対する意見があったら自由に話してほしい。

答）学習者が成人（大学生以上、非専門）の場合は短期間に集中した日本語教育、「敬語表現」教育が行われるのが普通である。それはたぶん時間と費用の問題のためだと思われる。それで、多くの場合、日常生活で必要な、つまり、使用頻度の高い「デス、マス」レベルの表現に偏る傾向があると思う。大体「ダ体」の表現を「デス・マス」に変えれば、「敬語」になると思う人が多いと思う。私（たち）もそうだった。しかし、日本に来て、色んな「敬語」があるのを知って、戸惑った経験がある。どのように「敬語」を使えばいいのか、先生にはどのように言えばいいのか、先輩にはどのように言えばいいのか、逆に友達にはどのように言えばいいのか、などが難しかった。特に、日本人の友達との関係で、「デス・マス」を使ったら、「よそよそしいから普通にしゃべってほしい」と言われたことがある。

韓国での「敬語」教育は、基本的に「デス・マス」レベルで、高いレベルの「敬語」は、教科書などで紹介する程度に止まっていると思う。

④インタビューから見えた問題―インタビュー内容の分析・考察

まず、③のｉ）「敬語表現」あるいは「敬語」の使用・認識の問題から見えてきた問題点である。インタビューの対象者は、「敬語」および「敬語表現」の必要性について認識していることが確認できる。特に「人間関係」、おもに「上下関係」における「敬語表現」使用の必要性について考えており、話し言葉だけでなく、書き言葉（メールなど）においても「敬語表現」が必要であると認識している。実際のコミュニケーションの面においても「敬語表現」の使用は必要であると認識しているが、「敬語」や「敬語表現」を使わなくても「日本語を用いた」コミュニケーションは成り立つという認識を持っていることも確認できる。

次に、敬語形式「オ・ゴ」の使用に関する問題であるが、敬語接頭辞「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」の使用について難しいと思っていることが確認できる。第Ⅱ章で「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」および「敬語表現化」の問題について詳しく述べることにするが、筆者はこのインタビューを通じて「敬語表現」および「敬語表現化」における「オ・ゴ」と「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」の問題に注目するようになった。第Ⅱ章で詳しく述べるが、「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」および「敬語表現」は、日本語の「敬語表現」において量的・質的に中核をなしている[4]が、その研究・教育については「オ・ゴ」の付け方や「オ・ゴ」を用いた敬語形式の紹介にとどまっているものが多く、実際のコミュニケーションを視野に入れた「文話」[5]単位における分析・考察は少なかったと思われる。このような問題意識をもとに「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」と「敬語表現」の問題を考えていきたいと思う。

「敬語表現」における意識の問題に戻る。インタビューの対象者は、③のｉ）で確認したように「敬語」および「敬語表現」の実際のコミュニケーションにおける必要性については認識しているもののなぜ「敬語」や「敬語表現」を使わなくてもコミュニケーションはできると考えているのだろうか。実際のコミュニケーションの場合を考えてみると、イ

---

[4] 金（2003a）

[5] 蒲谷・川口・坂本（1998）。「文章」と「談話」の総称。以降で詳しくみていく。

ンタビューの対象者の認識は間違っているとはいえない。複雑で細かい「敬語」や「敬語表現」を使わずに、③のⅱ）で述べているように文末敬語の「デス・マス」を使うだけでも意思の伝達はできる。しかし、実際の日本語を用いる場面を考えてみると、文末の「デス・マス」体だけでは、「円滑な」コミュニケーションが期待できない場面が多く、その場面における表現主体として意識・認識を十分に伝えることができなくなる場合が多いと思われる。このようなことについては、インタビューの対象者も認識しており、「日本に来て、色んな「敬語」があるのを知って、戸惑った経験がある。どのように「敬語」を使えばいいのか、先生にはどのように言えばいいのか、先輩にはどのように言えばいいのか、逆に友達にはどのように言えばいいのか、などが難しかった」と述べている。上記で述べたように、「円滑なコミュニケーション」ができない、その場面における表現主体としての意識・認識を十分に伝えることができないと認識しているのである。

上記のような現状や問題点などを解決するためには、実際のコミュニケーションを視野に入れた「文話」における「敬語表現」の問題について考える必要があると思われる。特に、インタビューから確認できるようにこのような「敬語表現」に対する学習者のニーズは高く、また、敬語形式や語彙（「敬語」の語彙）の提示にとどまらない、実際の使用を視野に入れた「敬語表現」における教育が必要であると考えているのが確認できる。

本稿は、このような問題点から出発している。

「敬語」や「敬語表現」を考える際、語・文単位にとどまらず、「文話」を視野にいれた接近が必要であると思われる。「文話」を視野に入れた観点として本稿で取り入れたのが「待遇コミュニケーション」[6]という観点である。

また、表現をする主体が考えている事柄・内容などを相手や場に相応しく「敬語表現」にするためにはどのような過程が必要などかを考える必要があると思われる。インタビューの③のⅱ）で確認できるように、「敬語表現」の使用のためには、「デス・マス」のような敬語形式に関する知識だけでなく、「色んな敬語」における使用の問題、「先生・先輩」といった相手の問題など様々なことについて考えなければならないと思われる。

本稿では、インタビューを通じて確認した「敬語」「敬語表現」における問題点について見直すことによって「敬語表現」の研究や「敬語表現」の教育―日本語教育における一つ

[6] 蒲谷（2003）。「待遇コミュニケーション」については第Ⅰ章の第 2 節で詳しくみていく。

の指標を提示することを目標としている。

以下からは具体的な例をもとに「敬語」「敬語表現化」の問題である。本稿では、どのような観点から「敬語表現」を考えていくのかについて確認していく。

表現の主体（話し手・書き手）がある事柄・内容を「敬語表現」にするためには、どのような過程を考える必要があるのか。それは、敬語形式の使用だけで十分なのだろうか。

たとえば、「先生、ケーキはもう食べてしまったんですか。」を敬語接頭辞「オ・ゴ」を用いて敬語にするとどうなるのかという問題について考えてみよう。これは、一見、いわゆる「敬語化」の問題（A という語・文を敬語にするためには何を変えればいいのか、のような類の問題）の問題であるが、敬語化のためにはどのようにすればよいのか、またどのようなことについて考えなければならないのだろうか。

敬語化の例としては、まず、「先生、ケーキはもうお食べになってしまったんですか。」が考えられるが、「食ベル」に「オ～ニナル」の形式を用いた敬語化は、あまりなじみがない。また、「食ベル」を「メシアガル」にして「先生、ケーキはもう召し上がってしまったんですか。」のような表現も考えられる。しかし、これもどのような場面で使われるのかが不明であり、また、上位者に対して「～テシマウ」を用いて尋ねることには失礼さを感じざるを得ない。

ある言葉や表現を「敬語」や「敬語表現」にするためには、語句の形を変えるだけでは十分ではない。上の例で確認できるように、ただ機械的に「敬語」に変えるだけでは、何かが不足しているように感じられる場合があると思われる。

それでは、ある言葉や表現を、「敬語」にする―「敬語化」する、「敬語表現」にする―「敬語表現化」（金（2004））するためには、どのようなことを考える必要があるだろうか。

日本語教育（特に待遇表現教育）における「敬語化」や「敬語表現化」を考える際には、まず、コミュニケーションの主体[7]である学習者は何が言いたいのかについて考える必要がある。学習者が言いたいこと、つまり、学習者が「敬語表現」を用いる前の段階の頭の中

[7] 本稿では主に日本語学習者を対象として考える。日本語学習者は以下、「学習者」とする。

にあるもの、相手である先生に「モウケーキヲ食ベテシマッタカ」を尋ねるのはどういうことなのかについて考える必要があると思われる。「敬語表現化」をする前の段階の頭の中にある考えをもとに、先生がケーキを食べたかどうかを聞くというのはどういう事柄の問題なのか、先生に「モウケーキヲ食ベテシマッタカ」を聞く「意図」はどういうものなのか、「先生と自分」はどのような「人間関係」にあるのか、「オ・ゴ」や「メシアガル」などの敬語形式の性質や「〜テシマウ」の表現形式の性質はどのようなものなのか、などの諸条件について考える必要があると思われる。

表現したい内容、事柄および「敬語表現」における意識、「人間関係」および「場」などによって異なるが、「敬語表現化」の一例として考えられるのは、「先生、もうひとついかがでしょうか」のように、さらにケーキを勧めるような形で尋ねる方法、あるいは、「先生、ケーキはもう…」のような形式、つまり、語句の全部を敬語にせず、省略した形で聞くといった「敬語表現化」の方法もあるのではないだろうか。

ある表現を「敬語表現化」するということは、単なる語句の変化の問題ではないということがここで確認できると思われる。

次の例の場合も上の例と同様に考えることができる。

ある講演会が終わり、公演者である著名なA教授に、「A教授、とてもいい内容の講演だった。」ということを伝えたい場合は、どのようにすればよいだろうか。

上記の「先生、ケーキはもう食べてしまったんですか。」の場合と同様に考えることができるが、この場合は、まだ具現化されていない「表現」(「A教授、とてもいい内容の講演だった。」)をどのように具現化―「敬語表現化」するかという問題である。本稿の目的は、コミュニケーション主体(学習者)の頭のなかの事柄を「敬語表現化」する過程はどのようなものなのか、また、その過程においてどのようなことを考える必要があるかにあるため、さらに本題に近づいた例であると言えよう。

A教授の「良い」講演に対する「自分」の気持ち―感謝、感想を伝えたい、あるいは、講演を評価したい―といった意識、A教授と「自分」との「人間関係」、講演が行われた「場」に対する認識について考える必要があると思われる。また、「イイ」の丁寧な形は「ヨロシイ」で、「コウエン」には敬語接頭辞「オ・ゴ」を用いて「ゴコウエン(ご講演)」にするとA教授の講演に対する尊重の気持ちを表すことができるという情報あるいは知識を、主体である「自分」が持っているとしよう。

それで、上記のような意識、認識、知識を適用し、「教授、とてもよろしい内容のご講演でした。」と表現する方法が考えられるのである。これで一連の過程を経た「敬語表現化」が完遂されたと言えるかもしれない。しかし、そのような表現は間違っているとは言えないが、さらに「適切な敬語表現」が存在する場合があるものと思われる。

諸状況に対する意識、および、「人間関係」「場」に対する認識、敬語形式に関する知識などを働かせて「敬語表現化」を行ったが、さらに、それに加えて、「内言」[8]、「内言」としての「通常表現」を「敬語表現化」する―具現化する方法について考える必要がある。

具現化するためには、まず、いいたいことを確認し、それに「敬語表現」に対する意識や諸状況における認識、敬語に関する知識などを働かせて、「敬語表現化」を行う必要がある。具現化、つまり、「敬語表現化」のやり方としては、上の例で確認した通り、ただ、語・句の形を変えるだけでなく、様々なやり方（いわゆるストラテジーなど）を駆使し、「敬語表現化」を遂行することもあるだろう。

その結果、「キョウジュ」は役職の名前であり、尊重、あるいは尊敬の意味は少ないという敬語知識や自分に役に立つ内容の講演だったということを伝えるために「ベンキョウニナッタ」とい表現を用いて「A先生、今日のご講演はとても勉強になりました。ありがとうございました。」のように「敬語表現化」を完遂させる、といった方法も考えられるのではないだろうか。

このように「敬語」でない表現を「敬語表現化」にするためには、主体の頭の中の事柄を出発点としてどのような過程が必要なのかを考える必要があると思われる。

本稿はコミュニケーションを「適切な」ものにするために必要だと考えられる「敬語表現」の生成過程としての「敬語表現化」の問題について考察を行う。また、日本語における「敬語表現」「敬語表現化」の問題を考えることにより、日本語教育、特に待遇表現教育におけるひとつの考え方―指標を提示することを目標とする。特に、「表現主体」の表現行為―「敬語表現化」の問題に焦点を当て、どのように「敬語表現化」をすればいいのか、「敬語表現化」のために「表現主体」は、どのようなことを考えなければならないのか、

[8] 主体の頭のなかにあると考えられるまだ具現化（音声化・文字化）されていない状態のコトバあるいは表現。以降で詳しく見ていく。

といった問題を中心に考えていく。コミュニケーションは本来、相互的な性質を持っており、「表現」や「表現過程」だけでなく、「理解」や「理解過程」についても考えなければならないが、本稿では視野・観点はコミュニケーションにおくが、そのなかでの「表現」や「表現行為」、また「表現」のために考えなければならない問題の部分に焦点を当てて考えていくことにする。

従来の敬語教育および待遇表現教育は、「敬語」の語レベルとしての形式や語彙としての教育に焦点を当てた場合が多かった。特に、学習者が「敬語」「敬語表現」に触れるきっかけとなる日本語教科書の場合、初級段階の後半に「敬語」の語形をまとめて提示する方法や授受表現の導入の一環として「敬語」「敬語表現」を提示する場合が多い。また、「敬語」および待遇表現教育の研究においても、語形の提示順序やロールプレイなどの役割ゲームを通じた敬語の使い方に関する考察・報告が多かったと思われる。

しかし、実際に「敬語表現」を用いたコミュニケーション場面では、必ずしも「敬語」の語形の習得や語彙の獲得だけで「敬語表現」が使用できるようになるとは限らないであろう。単なる語形の指導、学習だけでは、「敬語表現」を表現、理解する過程で考慮しなければいけない様々な、また、複雑な項目に対する認識が不足しやすくなり、「場」や「人間関係」などに対して適切に対応できなくなるおそれがある。

上述したような学習者における「敬語表現化」の問題を解決するためのひとつの方法として、「敬語表現」の生成過程および表現行為という側面からみた「敬語表現化」の問題を明確にする必要があると思われる。しかし、「敬語表現」を生成する過程は、「主体」である学習者の頭の中で行われることであり、また、個人的な考えや性格など、個別性の問題も絡んでいるため、一言ですべてを明確にすることは困難であると思われる。しかし、本稿では、表現主体の立場から「敬語表現化」を考える際のひとつの過程を提示することによって、「敬語表現」研究および待遇表現教育を考えるためのひとつの考え方―指標を提示したいと思う。

1.2 先行研究

「敬語表現」および「待遇表現」における先行研究は数多く、成果をあげているが、本節では、「敬語表現化」において参考にした主な先行研究について確認しておく。

蒲谷（2003）は＜言語における「待遇表現」の場合＞という前提で、「待遇表現」を、ある「表現主体」（話し手・書き手）がある場面（「人間関係」「場」）において、何らかの「表現意図」を実現するために、「表現形態」（「音声表現形態」「文字表現形態」）を考慮した上で、「題材」「内容」を選択し、「言材」（コトバ）を用いることによって、「文話」（文章・談話）を構成し、「媒材化」（「音声化」「文字化」）するといった一連の「表現行為」であると規定している。

コミュニケーションにおける「待遇表現」について規定である。語・文レベルにおける観点だけでなく、待遇表現の「敬語表現」の発生過程についても考えた規定である。

「敬語表現化」において考えなければいけない様々な要素について分析・考察を行うといった本稿のスタンスから考えた場合、蒲谷（2003）の規定は重要な指標のひとつとなる。

さらに、蒲谷・川口・坂本（1998）では、「敬語表現」について次のように規定している。

> 「敬語表現」とは、ある「表現意図」を持った「表現主体」（「話し手」「書き手」）が、「自分」「相手」「話題の人物」相互のある「人間関係」や「場」の状況を認識し、「表現形態」（「音声表現形態」あるいは「文字表現形態」）を考慮した上で、その「表現意図」をかなえるために、適切な「題材」「内容」を選択し、適切な「敬語」を用いることによって「文話」（「文章」あるいは「談話」）を構成し、「媒材化」するといった一連の「表現行為」である。

蒲谷（2003）の「待遇表現」の規定と関連した「敬語表現」における規定[9]であるが、本

[9] 蒲谷・川口・坂本（1998）のほうが先に「敬語表現」の規定を行っている。形式および内容から考えると、蒲谷（2003）による「待遇表現」の規定は「敬語表現」の規定をもとに行ったものとして推測されるが、本節では、規定の順番より規定の範囲に注目している

稿においては、「敬語表現」および「敬語表現化」における「表現主体」の明確な設定（規定)、「人間関係」「場」(「場面」）における認識の問題、「敬語表現」および「敬語表現化」の理由（あるいは「動機」）にあたる「意図」の問題、それから「敬語表現化」に必要な要素における指摘―「題材」「内容」「言材」「文話の構成」に注目した。「敬語表現化」を考える際、考慮しなければならない様々な項目を明らかにしていると思われる。

菊地（1994、1997）は、敬語使用における要因を社会的ファクター、心理的ファクターにわけ、「敬語」の使用および「敬語表現化」において考えなければならない諸要因を指摘している。

（1）社会的ファクター

A　場および話題

①その場の構成者

②場面の性質など

③話題

B　人間関係

①上下の関係

②立場の関係

③親疎の関係

④内／外の関係

（2）心理的ファクター

A　待遇意識：どのように待遇したいか

①ごく一般的な待遇意識

②「恩恵」の捉え方

③「親疎」の距離の捉え方

④「内／外」の捉え方

⑤特殊な待遇意識

B　背景的なファクター

ため、「待遇表現」の規定について先に述べている。

・その人物に対する心情

・人間関係を円滑なものにしようとする意図（の有無）

・人柄・言語生活暦など

C　表現技術・伝達効果の観点からの考慮

さらに菊地（1994、1997）はこのような諸要因を指摘した上で＜話し手はまず（１）のような社会的なファクターを把握・計算し、これに（２）のような心理的ファクターが加わって、最終的に敬語行動が決定される（待遇表現が選択される）＞といったモデルを提示している。敬語、敬語行動において考慮しなければならない項目について体系的に整理・分析した点に先行研究としての意味があると思われる。

しかし、菊地の先行研究は、「人間関係」と「場」を中心に考えたものであるが、社会的ファクターが先で、その後、心理的ファクターを働かせるといった規定や社会的ファクターと心理的ファクターの主体（話し手・書き手。主に「表現主体」）における混在・混乱についての記述が不足しているといった問題点があると思われる。主体の頭のなかのこと、特に、学習者をその対象とした場合、すべての要因を明確に社会的ファクターと心理的ファクターに分けることは困難であると思われる。本稿ではそのような主体の頭のなかのことである不明確な部分まで考慮し、分析・考察を行いたいと思う。

蒲谷・川口・坂本（1998）、蒲谷（2003）、菊地（1994、1997）における敬語、および「敬語表現化」に対するこのような接近は、敬語、「敬語表現」をコトバの材料を文法に従って組み立てることで構成されたものとして見るのでなく、人間の行為として（蒲谷・川口・坂本（1998）、蒲谷（1997、1999、2000））、また、言語を用いる社会におけるひとつの言語現象として捉えていると思われる。

蒲谷（2004）は、＜言語は主体の表現行為、理解行為である＞として＜言語＝行為＞観における規定を行っている。これは、言語は、形式たる音声と内容たる概念の結合（ラング的抽象概念）ではなく、人間行動のひとつとして話し手と聞き手の間に行われる伝達行為であると規定している時枝（1941、1955）の言語過程説をもとにした考えであるが、さらに、時枝（1941、1955）は、言語は、3 次⇒事物→概念→聴覚映像にわたる表現（遂行）過程と空間伝達過程（音声・文字）と 3 次⇒視聴映像→概念→事物にわたる受容概念の言語伝達過程の総合それ自体を指すとしている。

しかし、このような時枝の言語過程説について、蒲谷（2004）は、言語は過程そのものとしても、「表現」をするためには、その文・文章を構成する語彙を習得しなければならない（知っておかなければならない）。つまり、表現行為以前に、その表現行為を支える言葉の存在がなければならないと「行為」としての言語の捉え方以前に考えなければいけない「コトバ」の問題についても指摘している。さらに、これは、極めて常識的な考え方であり、また、ラングを支持する立場からの批判になるとしている。この部分は「敬語表現化」の過程を考える際も有効な考えであり、「コトバの存在」なくして、言語は成立しないといった本稿の考えを支えるものになっている。

日本語教育の面から言語行為を考えた場合、母語でない言語を学習、活用する際、「コトバ」の存在は欠かせないものになると考えられる。

しかし、このように言語（本稿においては「敬語表現」に限定して考える）を単にコトバの材料を組み立てたものとして考えるのではなく、その言語（日本語）を用いる社会（あるいは生活共同体）の一員としての主体によって行われるひとつの行為、言語現象として捉える考え方は本稿における重要な指標になっている。

2.「敬語表現化」の概要

2.1「待遇コミュニケーション」における「敬語表現化」の概要

本節では、「待遇コミュニケーション」における「敬語表現化」の規定や意義などについて論ずる。まず、「待遇コミュニケーション」の規定である。

「待遇コミュニケーション」は、ある「意図」を持った「コミュニケーション主体」がある「場面」[10]において「文話」単位で行う「表現」「理解」の「行為」のことである（蒲谷（2003））。「待遇コミュニケーション」は、コミュニケーションにおける主体を明確にし、その主体における「意図」や「場面」などの主体を取り囲む諸状況における認識などに注目した考え方であり、さらに、実際の使用を念頭においた「文話」単位での「表現」「理解」行為を前提としている。このような規定および考え方は「敬語表現化」を考える

[10] 「人間関係」と「場」の総称。蒲谷・川口・坂本（1998）

のにも有効であると判断し、「敬語表現化」における主な理論的概念として取り入れた。

具体的には、「意図」の存在、「コミュニケーション主体」の想定、「場面」における認識、「文話」を単位として設定、「表現」行為における認識などの点が「敬語表現化」における理論的な背景となる。

以降では、「待遇コミュニケーション」（の規定）における「敬語表現化」の範囲および意義について確認しておく。

①「ある「意図」を持った」：自覚的「意図」の存在

コミュニケーション主体が行うすべての言語行為には何らかの「意図」が存在していると思われる。しかし、その「意図」は明確な場合もあれば明確ではない場合もあり、自覚的であれば自覚的でない場合もある[11]。「独り言」や「感動詞」などの「自己表出表現」[12]のように、その「意図」を主体が明確には認識していない場合もあるが、「相手」の存在を意識しなくてもいい「自己表出表現」とは違って、常に「相手」の存在を認識し、さらに、「相手」の存在を認識しなければならない「敬語表現化」の場合は、「相手」との関係を念頭においた「意図」が不可欠なものになると思われる。特にその「意図」は「相手」との関係を念頭においた自発的なもの―自発的な「意図」でなければならない。もちろん、「人間関係」「場」によっては、「無意識的」に「敬語表現化」を行う場合があるという意見も

---

[11] 「意図研究会（2001）「『意図』とは何か―『意図』はどのように捉えられてきたか―」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』14
蒲谷宏（2002）「『意図』とは何か―『意図』をどのように捉えるか―」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』15
すべての言語行為に「意図」が存在するという規定は本稿の記述全体にかかる規定である。しかし、上記の参考文献は、実際の言語行為の場合、主体は必ずしも「明確な『意図』」が存在する、あるいは「明確な『意図』を認識」しているとは言えない部分があると指摘しており、本稿も同様に認識している。

[12] 蒲谷・川口・坂本（1998）。「文話」を「表現意図」との関連で整理すると、三種類に分けて考えることができ、「自己表出表現」「理解要請表現」「行動展開表現」の三つであるとしている。その中で、「自己表出表現」は「自己表出」を「表現意図」とする「文話」で、特に「相手」を意識することなく、自己の感情・認識などを表出すること自体が「表現意図」となる「文話」であると規定している。たとえば、風呂に入って「ああ、いい湯だ。気持ちいいなあ。」などというような独り言があるとしている。

あるが[13]、それに関してもある程度は「意図」―「敬語表現化」に対する「意図」が存在していると思われる。「表現形式」―「敬語形式」が発せられるためには（言い換えれば、「敬語表現化」が行われるためには）いくら「無意識的」に（あるいは「習慣的」に）「敬語表現化」を行うとしても、ある程度「人間関係」「場」などの諸状況に対して認識し、その認識に基づいて「敬語表現化」を行うといった「意図」を持たなければならないからである。つまり、何の理由も、何の状況もないのに、「敬語表現」が発せられることはないと思われるからである[14]。「無意識的」に（「習慣的」に）「敬語表現」が用いられる場面を「言語形式」だけの観点からみると「語形」の変化もなく、「反射的」に使われているように見えるため、「無意識的」に「敬語表現化」が行われるように見えるかもしれない。

しかし、従来の語・文レベルの「敬語」の分析・考察、つまり、「材料」としての言語研究ではなく、実際の使用場面である「文話」を視野に入れた研究の場合、つまり、「行為」としての言語研究を前提とした場合は、コミュニケーヨンを成立させる諸要素―「意図」「主体」「人間関係」「場」「題材・内容」などについて考えなければならないと思われる。「材料」ではなく「行為」を研究の対象としているので、さらに幅広い観点から見る必要があると思われるのである。

このような考え方は「敬語」「敬語表現」を社会現象としての言語行為として捉える所謂「社会言語学」的な考え方であるが、本稿においても同様な観点から考えていく場合がある。

---

[13] 筆者の 2005 年 3 月の研究発表で受けた質問である。たとえば、接客をする店員などの場合は、意識せずに「敬語表現」を使う場合があるのではないか、つまり「習慣的・反射的に敬語表現」を使うのではないかという質問（意見）であった。

[14] たとえば、「自己表出表現」のひとつである「独り言」において「敬語表現化」を行うことはないと思われる。注 12 の例である「ああ、いい湯だ。気持ちいいなあ。」のような独り言を「ああ、よろしいお湯ですね。気持ちがいいです。」のような「敬語表現」で発する日本語母語話者はまずいないだろう。実際いるとしても後者は「かなり不自然な独り言」になり、何か（あるいは誰か）を意識しているように見える、あるいは感じられる。したがって、「敬語表現化」は何かを意識している、また「自分」と「相手」といった言語行為における「主体」が存在している、ということが前提になると思われる。

注 13 の「店員」の場合も同様に「材料」としての「敬語」「敬語表現」は「習慣的・反射的」に使用しているかもしれないが、その「習慣的・反射的」な判断（あるいは認識、意識など）の背景には、「店員」としての「自分」という「主体」に関する認識や接客といった「意図」、などが存在していると言えよう。そのような「意識」「認識」をもとに「敬語表現化」が行われると思われる。「敬語表現化」がそのような観点から「敬語」および「敬語表現」を分析・考察していく。

上記のような観点から考えた場合、「敬語表現化」における自発的な「意図」の存在、およびそのような「意図」の前提は、「敬語表現化」を考える際、重要な指標のひとつとなる。また、その「意図」は「相手」との関係を前提とした明確なもの、また自発的なものでなければならないと思われる。

②「「コミュニケーション主体」が」：主体の設定

ある言語（本稿の場合は日本語）を用いたコミュニケーションを考える場合、「主体」の設定は、コミュニケーション（あるいは言語行為）における「行為者」を明確にする同時に、そのコミュニケーションの目的に関係する指標になる。ある言語を用いる主体が存在し、所期の目的のためにコミュニケーションを行うといった観点から言語行為を考えた場合、主体の設定はだれがだれのためにコミュニケーションを行うかという点に関係する項目になるのである。また、言語や表現行為を実際の場面という観点から考えた場合、主体の設定はさらに重要な項目になると思われる。コミュニケーションを行う主体なしでは、言語行為は存在しないからである。

主体の存在を常に意識することによって、主体や「意図」などの問題は考えず、言語行為における材料の分析・考察を行う（語・文レベルの）言語研究の接近法とは違って、実際の言語行為を視野に入れた分析・考察ができるのではないかと考えている。

本稿では、例を提示する場合、特に文話を例とする場合、「主体」（「主体」同士の関係を含めて）における設定を行っている。主体の設定は、その設定内容がテキストに明記されている場合、あるいは、テキストから推測ができる場合は、テキストの規定（設定内容）に沿って行っているが、テキストにおける主体の設定が明確でない場合は、筆者がテキストの内容から推測して、主体や意図などについて設定し、テキストの性質や範囲における規定を行っている。

「敬語表現化」だけでなく、言語行為における分析・考察を行う際は、テキストとしての「文話」に対する主体や意図などに対する設定が必要なのではないかと思われる。特に、上に述べた通り、言語を材料としてではなく、行為として捉える場合、主体の設定、あるいは、主体の存在の前提は分析・考察に必要不可欠なものになるのではないだろうか。

③「ある「場面」において」:「人間関係」と「場」の総称である「場面」の設定

上記の①と②で確認した通り、ある言語行為における「自分」と「相手」との関係を考える場合、念頭においておかなければならない点のひとつとして、主体同士[15]を取り囲む「場面」の問題が考えられる。

語・文レベルの研究では、そのような「場面」に対する認識が不足している部分があり、「どのような人間関係でその表現（語・文）を使うのか」「どのような場でその表現（語・文）を使うのか」といった点が明確でない場合もあった。また、待遇表現教育に面では、「敬語表現」が用いられる「場面」を設定しない指導では、学習者の実際の使用（活用）が円滑に行われないということが指摘されてきた。

本稿における「敬語表現化」の考え方では、このような問題点を解決するひとつの方法として、「場面」をはじめとする「敬語表現化」における「敬語表現化要素」の問題について考えた。後半で詳しく述べるが、「敬語表現化」における「敬語表現化要素」とは、主体がある「意図」を持って、自分の頭のなかにある「内言」を「敬語表現」として具現化する（「外言化」する）際、考えることになる（考える必要のある）諸要素のことである。大きくわけて「敬語表現意図」「尊重の意識」などの「敬語表現意識」、「人間関係」「場」に対する認識の問題である「敬語表現認識」、敬語形式に対する知識・情報の問題である「敬語知識」の三つが考えられる。その中でも「人間関係」「場」における認識は「敬語表現化要素」における中枢的な部分で、この部分における認識が「敬語表現化」の使用に影響を与えると思われる。

この「場面」の問題について細川（2004）は、コミュニケーションにおける「言語行為」（「メッセージ」）の出現の場としての「場面」は、「表現主体」（話し手）と「理解主体」（聞き手）の認識によってぞれぞれ異なり、決して同じものとはいえないとし、さらに、「表現主体」（話し手）と「理解主体」（聞き手）がつねに共通の「場面」にいると考えるのはいわば「つくられた幻想」であると指摘している。このような「場面」に対する細川

[15] コミュニケーション（「文話」）には話し手・聞き手、あるいは「表現主体」「理解主体」といった「二人」以上の主体の存在が前提として考えられる。「主体同士」は、コミュニケーションにおける複数の主体の存在を表している。以下同様。

（2004）の指摘は、「敬語表現化」における「場面」を考えるにも有効なものである。上記で述べたように、「場面」の認識の問題は、「敬語表現化」を考える過程において重要な概念のひとつであるが、その「場面」は、「主体」の認識、個人的な、また個別的な認識によって異なるものであることを忘れてはいけないといえるのである。この「場面」の個別性の問題については、以降の「敬語表現認識」の節で詳しく述べることにするが、「敬語表現化」における「場面」の認識の問題は、主体の個別的な「人間関係」と個別的な「場」に対する認識をもとにしているということについては本節でひとまず明確にしておきたいと思う。

「敬語表現」の使用や「敬語表現化」の根本的な目的から考えた場合、「人間関係」への配慮、「場」における使い分けなどに関わる「場面」の認識の問題は、「敬語表現化」の過程における必要不可欠な要素になると言えよう。しかし、「敬語表現」および「敬語表現化」の問題は、「場面」における設定や認識だけでは、不足している部分、あるいは、説明できない部分も多いので、本稿においては、「人間関係」「場」（「場面」）以外の「敬語表現化要素」についても分析・考察を行っている。

実際の使用を前提にして言語行為を分析・考察する場合、「場面」の設定、認識は重要な項目になると言えよう。

④「「文話」単位で行う」：文章・談話の総称である「文話」単位での考え方

実際のコミュニケーションを言語研究の前提とした場合、主体同士の「やり取り」とその「やり取り」の「繰り返し」を考えなければならない。もちろん、「やり取り」とその「やり取り」の「繰り返し」が必ずしもすべての「文話」に現れるとは限らないが、研究対象である「敬語表現」を言語の材料ではなく言語行為として捉える、つまり語・文単位でなく、「文話」単位で捉える場合、「文話」単位で言語行為（本稿においては「敬語表現」）を考えることは、必要不可欠であると思われる。

特に「敬語表現化」においては「相手」との関係―「やり取り」とその「繰り返し」をはじめとする諸状況―について考え、それに基づいた「適切な敬語表現化」を行うと思われるので、主体同士を取り囲む諸状況に対する認識が反映されている「文話」を前提にし、さらに「文話」を基本単位として考えることは重要な設定のひとつになると思われる。

しかし、本稿においては、コミュニケーションにおける「やり取り」の面ではなく、「表現」の面、特に、主体の「頭のなか」から始まる「敬語表現化」の過程を主な研究対象としているため、「敬語表現」と「表現」の過程の面にポイントを当てている。つまり、前提としては「文話」における使用―コミュニケーションを視野に入れているが、分析・考察の対象は「表現」(「敬語表現」)と「表現の過程」(「敬語表現化」と「敬語表現化」の過程)に限定させている。

本稿では、「敬語表現化」の問題について「文話」における使用を前提にして考えていく。

⑤「「表現」「理解」の行為である」:「表現行為」における認識

言語行為(本稿では「敬語表現」)をコミュニケーションの観点から考えた場合、「表現」と「理解」の両面から考えなければならない。「表現」だけでも、「理解」だけでもコミュニケーションは成り立たないからである。また、上記で述べた通り、言語行為は言語の材料を並べるものではなく、「表現」と「理解」の両面から成り立つ行為として考えられるからである。

「敬語表現化」においてもそのような認識は有効で、さらに「敬語表現化」においては重要な位置を占めていると言えよう。しかし、本稿においては、「敬語表現化」の過程や「敬語表現化」の生成過程で考えなければならない点を主な分析・考察の対象としているため、「表現」に重点をおいている[16]。

本稿は、「理解」の面については、「相手」の言語行為に対する「理解」の面よりは、「表現主体」の周辺状況―「場面」や表現形式における理解、つまり、諸状況に対する「意識」や「認識」などの面に注目している。

今まで確認してきた通り、「待遇コミュニケーション」の観点から「敬語表現化」を考え

[16] 「表現」と「理解」の両面に注目するならば、「表現」と「理解」の両面を合わせた「敬語コミュニケーション」あるいは「待遇コミュニケーション」という用語が適切である。しかし、本稿は「表現」の部分―生成過程や表現行為において考えなければならない項目などに分析・考察のポイントを当てているため「敬語表現」「敬語表現化」といった用語を用いている。

る場合、「自分」という主体があり、「相手」という主体との関係や「場面」との関係などのために「敬語表現化」を行うという観点から考えることができるため、「待遇コミュニケーション」からの観点は本稿における「敬語表現化」において重要な意味をなしていると言えよう。特に、「相手」を「高く」待遇する、「相手」に丁寧にする、「相手」との関係を適切なものにする、といった「敬語」「敬語表現」の基本的な性質から考えた場合、「相手」の存在を意識した主体の設定や「場面」に対する認識、「文話」単位での分析・考察は必要不可欠なものとなるだろう。さらに、「待遇コミュニケーション」からの観点は、「敬語表現」(「敬語表現化」) を言語行為における材料としての面ではなく、行為のひとつとして捉えることができるため、「敬語表現化」における諸状況や諸要素に対する分析・考察のための足掛かりができると言えよう。

本稿では、「敬語表現化」を単なる語彙・形式の問題ではなく、「主体」の「意図」「場面」「行為」といった観点からの「敬語表現化」の過程の問題として認識し、考察していく。

2.2「敬語」と「敬語表現」の概要

本節では「敬語表現化」における「敬語」「敬語表現」の規定について論ずる。

待遇表現には、「相手」を高くする、あるいは、「場」を改まったものにする方向もあれば、「相手」を貶める、あるいは「場」をくだけたものにするような方向もある。それらをまとめて「待遇表現」というのが一般的な呼び方であるが、「敬語」「敬語表現」は、「待遇表現」の一部で、「相手」(あるいは「話題の人物」) に「尊重」の気持ち (あるいは「敬意」など) を丁寧な言い方によって示すものであるとしている[17]。

本稿でも上の規定をもとに「敬語表現」について考えていく。ただし、「敬語表現化」の過程については、語や語彙レベルではなく、「文話」レベルでの使用を前提に考えるという点から、「敬語」ではなく「敬語表現」という用語を用いた。

「敬語」については、様々な先行研究により規定が行われているが、その中で菊地 (1994、1997) は、同じ事柄を表すのに、異なるやり方を使う (表現する) ことを「敬語」として

[17] 窪田・池尾 (1971)

規定している。つまり、「ケーキを食え。」も「どうぞケーキを召し上がってください。」も「ケーキヲタベロ」という意味を伝える（「内言」の具現化）面では同様になるのであろう。意味伝達の面では、「敬語」でも「非敬語」でも同じであるが、異なるやり方―「丁寧に」「改めて」―で表現することが「敬語」であるというのである。

しかし、本稿においては、「敬語」「敬語表現」について規定する際は、「意味伝達」の面をさらに広く捉える必要があるのではないかと考えている。確かに「ケーキを食え。」でも「どうぞケーキを召し上がってください。」でも「ケーキヲタベロ」といったことを伝える「意味伝達」の面、「内言」の具現化といった面では共通する部分もあるが、必ずしもすべてにおいて同じであるとは言えないと思われる[18]。つまり、「意味伝達」の範囲をどのように捉えるかの問題である。行動を展開させる言語行為の実質的な影響の部分を「意味伝達」として見るか、行動の展開を含めた表現主体の気持ちやその「文話」における「意図」や「意識」「認識」の伝達までを「意味伝達」として見るかが問題になるのである。もちろん、言語行為全般を範囲として「意味伝達」という述語について考えた場合、その意味および範囲が前者に該当することは明確であるが、他の言語行為（表現行為）における「意味伝達」の面はさて置き、本稿における分析・考察の対象である「敬語表現」および「敬語表現化」を対象に考えた場合、「意味伝達」の範囲は広く捉える必要があるのではないかと考えられる。

上記の「敬語」「敬語表現」の規定で確認できたが、「相手」（あるいは「話題の人物」）に「尊重」の気持ち（あるいは「敬意」など）を丁寧な言い方によって示すものを「敬語」として考えた場合、定義の記述でも確認できる通り、「尊重」の気持ち（「敬意」など）を表すことは、「敬語」「敬語表現」における中枢である。また、そのような意識を事柄（内容）に「乗せて」伝える（伝達する）ことが「敬語」「敬語表現」の本質であると考えた場合、「敬語」「敬語表現」は「敬語表現化」の過程を経ることによって、「丁寧さ」や「尊重」などの「意味」が付加されると考えることができるのではないだろうか。

つまり、「敬語表現」における「意味」の部分を大きく捉えると、「敬語」「敬語表現」を用いた表現（「敬語表現」を用いた「表現行為」）と「非敬語」（「敬語表現」用いない「表現行為」）との間には「丁寧な気持ち」や「尊重の意識」などといった部分で差が出るので

---

[18] まったく同じではないという面では菊地（1994、1997）も同様の記述をしている部分があるが、「敬語」の基本的な性質について解説する際、意味伝達の面では「同じ」といった記述は多く確認できる。

はないかと思われる。その差を「意味伝達」の部分に入れて考えることができるとしたら、「敬語」「敬語表現」は、ただの「意味伝達」を超えた働きを持つものとして考えることができるのではないかと思われる。

「ケーキを食え。」のような「非敬語表現」が「内言」としての「ケーキヲタベロ」＋「卑下」あるいは「親密な気持ち」の「意味」を表すとしたら、「どうぞケーキを召し上がってください。」のような「敬語表現」は「ケーキヲタベロ」＋「尊重」あるいは「丁寧な気持ち」の「意味」を表しているのではないだろうか。

このように、「敬語表現」は「事柄（内容）の伝達」に「丁寧な気持ち」「尊重の意識」などの「敬語的な要素」を加えた「意味を伝達するもの」として考えることができるのではないかと考えている。

問題提起で確認した通り、「敬語」からアプローチした研究・指導は多く行われており、ある程度成果をあげているが、実際の使用や運用における点では不足した部分もあった。そのような問題点を解決するためには語・文レベルからの接近である「敬語」より、「文話」を単位として考える「敬語表現」といった観点からの接近が必要であると考えられる。

しかし、コミュニケーション、あるいは、「文話」という観点から考えた場合、「表現行為」に焦点をあてている「敬語表現」だけでなく、「理解」の面を考慮に入れた「敬語理解」の問題についても考えなければいけないと思われる。つまり、「待遇コミュニケーション」あるいは「敬語コミュニケーション」の観点から考えなければならいないが、本稿では、「理解」の部分より「表現」の部分、「敬語表現」をするための過程に焦点をあてているため、「敬語理解」の部分の積極的な導入を避けた「敬語表現」「敬語表現化」を主な考察の対象としている。

さらに、本稿における「敬語表現」は、「敬語表現」でない表現を「通常表現」と呼ぶと、「通常表現」に対する概念でもある。「敬語表現」「敬語表現化」を考える場合、何が「敬語表現」で、何が「敬語表現」でないかという点を明確にする必要がある。「敬語表現」でない表現については「非敬語表現」などの用語で表すこともできるが、本稿においては「通常表現」という用語を用いた。「通常」は普段使われているという意味ではなく、「敬語」に対する概念および用語であり、「敬語表現」との区別をつけるための述語としての性質を持っているのである。「通常表現」については「敬語表現化過程」の概念の部分で詳しくみ

ていく。

本稿における「敬語表現」は、「文話」を単位としているもので、「意味伝達」の面では、広く捉えられており、さらに、「通常表現」に対する概念、述語でもある。

2.3「敬語表現化」の概要

本節では、「敬語表現化」の概念と範囲について論ずる。

「敬語表現化」は、主体の頭の中に存在する「内言」としての「言材」（以下、「内言」としての「言材」のことを「ゲンザイ」とする。）[19]と「ゲンザイ」によって構成された「内言」としての「通常表現」に（以下、「内言」としての「通常表現」のことを「通常表現」とする）「敬語表現意識」「敬語表現認識」「敬語知識」の「敬語表現化要素」を総合的に働かせ、「敬語表現」として「外言化」させる一連の過程である、と規定しておく。

「ゲンザイ」「通常表現」および「敬語表現化」の過程については 3.「敬語表現化過程」の節で詳しくみていくことにするが、「敬語表現化」の過程を簡単に図で示すと次のようである。

図１）「敬語表現化過程」（「ゲンザイ」「通常表現」を適用したモデル）

「ゲンザイ」 → 「通常表現」 ―（「敬語表現化要素」）→ 「敬語表現」

図１）はすべての「敬語表現化」を表しているのではなく、主体を学習者として限定させた場合、また、表現の過程（「敬語表現化過程」）の一部を簡単に表したものである。実際の場合は、様々な「敬語表現化過程」が存在していると考えられるが、図１）で示して

[19] 「内言」とは、コミュニケーションの主体の中（主体の頭の中）のもので、まだ音声化・文字化されていない概念のことである。「内言」は概念としても、概念より比較的具現化された形である語、文、「文話」としても存在し得るものとして考える。「外言」は「内言」に対する用語で、主体が「内言」をある過程によって音声化・文字化したものである。主体が相手に自分の「考え」を伝えるために具現化したものとして考える。「内言」と「外言」の区別のため、例をあげる際、あるいは用語の規定を行う際、「内言」に属すると考えるものはカタカナで、「外言」に属すると考えるものはひらがな、漢字で表記している。「内言」と「外言」については細川（2004）の規定・概念を取り入れ、本稿―「敬語表現化」の概念にあわせて調整・アレンジしたのもである。

いるのは、その中の一部である。しかし、図１）のような過程を本稿における主な「敬語表現化」における過程として考えているのである。さらに、「敬語表現」における学習者の使用様相や使用意識は、「敬語表現化」の過程に影響を受けていると思われる。

「敬語表現化」は、「語」「文」レベルの「敬語化」だけでなく、常に「文話」レベルにおける主体の意識、言語行動を視野にいれているが、プロソディー関連の音声的な面とジェスチャー、しぐさなどの「待遇行動」は、考察の対象にしない。言語とその言語を表現するための諸要素の働きに焦点を絞るためである。しかし、「言いさし」「言いよどみ」などの部分については、言語内のものだと思われるため、考察の対象にしている。それは、蒲谷（1999）の＜音声・文字を「媒材」とした「表現行為」および「理解行為」そのものが言語である＞といった「＜言語＝行為＞観」を「敬語表現化」を考える概念として取り入れているからである[20]。「敬語表現」を考える際は、単なる語形の変化だけでなく、様々な項目―「意図」「人間関係」「場」「形式における知識」など―を考慮しなければならないといった点に、「敬語表現化」研究の意義があると思われる。

「敬語表現化」は、主に言語を行為として捉える「＜言語＝行為＞観」（蒲谷（1999））とその「＜言語＝行為＞観」に基づいた「待遇コミュニケーション」（蒲谷（2003））をもとにしているが、「表現行為」と「理解行為」の両方ではなく、主に「表現行為」にポイントを当てた考え方である。上述した通り、「表現」の過程、つまり（学習者における）「敬語表現」の生成過程を問題としているため、発せられた「（敬語）表現」を理解する「理解行為」、つまり「敬語理解」の部分については分析・考察の対象にしないことにしている。

[20] プロソディー処理は、「音声」だけでなく「音」に関連したものとして認識し、さらに、ジェスチャー、しぐさなどは「音声・文字」を「媒材」としていないものとして認識している。しかし、「言いさし」「言いよどみ」などは、言語における「省略」「迂回」「回避」として、また、音声・文字を「媒材」にした＜言語＝行為＞のひとつとして考えているからである。

3.「敬語表現化過程」

本節では、「敬語表現化」の過程について論ずる。「敬語表現化」の過程における概念について確認し、「敬語表現化」の例について述べる。

3.1「内言」と「外言」

本節では、主体が「敬語表現化」を行う過程における頭の中の「考え」としての「内言」と「内言」を具現化したものとしての「外言」について論ずる。

「内言」とはコミュニケーション主体（本稿では「学習者」を主体として考える）の頭のなかのもので、まだ音声化・文字化されていない段階の概念のこととして規定しておく。「内言」はある事柄に対して言語化する前の段階で、主体の頭のなかに存在する言語化における概念のことで、概念として、あるいは、概念より具体的な形である語、文、「文話」で存在する場合もあると思われる。

一方、「外言」は「内言」に対する述語で、主体が「内言」をある過程によって具体的にしたもの、つまり、音声化・文字化したものとして規定しておく。「外言」は主体が「内言」をある過程―たとえば、主体の個人的な意識、「敬語表現化」における認識、「文法」[21]体系の適用など―を通じて具現化したものとして考える。

「内言」と「外言」、「内言」の具現化の問題について細川（2004）は、「内言」は、「個人的な思考」で、人間の精神的内部の言語活動を指すが、音声・文字によって表出された「外言」に対立させて用いることが多いと規定を行っている。さらに、「内言」はいわば思考として人が頭のなかで「考えていること」であり、表現・理解の内容としての「思想内

[21] 「内言」の「外言化」の過程における「文法」の問題について、細川（2004）は「個人的な文法」や表現主体における「文法」の個別性について述べている。本稿においてもそのような「文法」の個別性の問題は「敬語表現化」における重要な要素のひとつになると思われる。しかし、比較的規範的である「敬語形式」の問題を考えた場合、「個別性」をどこまで認めるかという問題があるが、本稿における「敬語表現化」の概念は、従来の「言語形式の置き換え」のような「敬語」「敬語表現」の認識という問題点に対する指摘から出発しているため、決められた「敬語形式」以外の「文法」の個別性や「創造的な」表現の「敬語表現化」における働きを重視している部分がある。

容」と呼ばれるのもであると指摘している。本稿における「内言」と「外言」、「内言」の具現化の問題は、上記の細川の規定と同様の立場にある。

さらに、細川（2004）は、思考言語としての「内言」は、いわば人間の頭脳のなかで生じる現象であるため、これを明確に把握したり、取り出したり、あるいは計測したりすることはできないと指摘している。また、そのような面では「内言」の性質は理解という行為に似ているところがあるとしている。細川の指摘通り、「内言」は「主体」の個人的な且つ個別的ななものとしての性質をもとに、「主体」の「意図」や諸状況に対する意識・認識としての面を持っているので、「内言」の実態を明確にする、特に「外言」としての具現化の前の段階における「内言」の規定・把握は極めて困難なものであると言える。したがって、本稿では、そのような「内言」の性質・特徴を踏まえた上で「敬語表現化」の過程における「内言」の存在（「外言」の問題と「内言」の具現化の問題を含めて）を考えている。さらに、本稿では「敬語表現化」の過程を考えるためのひとつの指標として「内言」の問題を（「外言」の問題と「内言」の具現化の問題を含めて）定義しているが、それは、できあがったもの、「外言」としての「通常表現」に言語形式（敬語形式）を置き換えるだけの「敬語表現化」ではなく、主体の頭のなかの「考え」から「敬語表現化」の過程は始まっているというスタンスで「敬語表現」の問題に接近することを本稿の目的としているからである。

次は、「内言」と「外言」の関係、「内言」の具現化の問題について具体的な例をあげて確認したいと思う。「内言」の具現化の問題については、上記で述べた通り、その把握・計測は困難なことではあるが、以下では、本稿における「敬語表現化」の過程を理解するため、ひとつの例をあげている[22]。

たとえば、「内言」は、「道（郵便局の場所）を聞く」といった事柄について主体が持っている頭のなかの「道（郵便局の場所）を尋ねる」といった（ひとつの）概念に対し、「道（郵便局の場所）を尋ねる」ことを具体的に言語化（あるいは、具現化）する前の段階のもので、「ユウビンキョクノバショガシリタイ」のような「考え」や「ユウビンキョクハドコデスカ」「ユウビンキョクノバショヲオシエテクダサイ」などのようなもの、つまり、具

[22] 筆者の実際の「言語行為」―「敬語表現化」の過程を内省によって吟味し、再構成した例である。

現化する前に頭のなかで生成させた（あるいは組み立てた）「フレーズ」のようなものとして考える。一方、そのような「内言」を主体が直面するコミュニケーションにおける諸状況に応じて適切な形で具現化させた「あの、すみません。近くに郵便局はありますか？」のようなもの（表現）を「外言」として考えるのである。

上の例のように、「内言」が「そのまま具現化」されない場合もあるが、「外言化」（具現化）した形が「郵便局の場所を教えてください。」のように「内言」が「そのまま外言化」される場合も有り得ると思われる。

「内言」の具現化の問題についてさらに詳しくみていこう。

「内言」の具現化の問題について細川（2004）は日本語教育の側面から次のような指摘をしている。「内言」の把握や測定は難しいが、理解の度合いが表現によってたしかめられることは、日本語教育の現場でもほぼ実証されているように「外言化活動」によって表出される「外言化」の行為がその「内言」の充実につながるからである、と述べている。このように「外言化」行為、あるいは「外言化」されたものから、「内言」（の充実さ）を探っていくということは、本稿においても有効な概念で、同様の立場で論を進めている。特に、「外言化」されたものから「さかのぼって敬語表現化の過程を考える」という考え方は、本稿の第Ⅱ章の部分、つまり「敬語表現化」をどのように実際の「敬語表現」研究に適用させるかといった試みにおける基本的なスタンスになっているのである。

「内言」と「外言」の関係、「内言」の具現化の問題で考えておかなければならないのが、「内言・外言の往還関係」の問題である。「内言・外言の往還関係」について、細川（2004）は日本語教育の立場から次のように述べている。

> （日本語教育において）自分の考えていることを人前で話す発表や議論、あるいは文章化やそれにともなう推敲が、単に話すこと、書くことの技術としてではなく、内言の充実化に資する…もちろんこうした内言・外言の関係は、一回かぎりのものではなく、絶えず繰り返される往還関係として存在することになる。この内言・外言の往還関係こそ、言語コミュニケーション活動の基本であると言ってもさしつかえない。

上記の通り、実際のコミュニケーションの場合を考えると、「内言」と「外言」は一回

かぎりの関係・過程ではなく、「内言」から「外言」へ、また、「外言」から「内言」へ、といった過程を絶えず繰り返しているといえる。これは、実際のコミュニケーションが「表現」と「理解」の両面から成り立つといった前提からも推測できることである。「内言」と「外言」の関係を考える際には、このような「往還関係」という前提から考えなければならないが、本章（第Ⅰ章）の「敬語表現化」の概念・過程の節では、「表現行為」にポイントを置いているため、「表現」の過程、つまり「内言」から「外言」への過程に注目している。しかし、「敬語表現化」の日本語教育への適用の問題を考える場合は、「内言」から「外言」への過程だけでなく、「外言」から「内言」への過程についても考える必要があると思われる。

「内言」をどのような方法で、また、どのような形に具現化―「外言化」させるかは、主体の直面する諸状況や主体の個別的な言語に関する意識など影響されると思われる。本稿における主な分析・考察の対象である学習者の場合、「内言」の「外言化」は、学習の時間、学習の内容、母語などに影響されることがあると思われる。また、学習者の場合は、ある表現における「内言」を自分の母語で生成させる場合も考えられる。自分の母語で一旦、ある事柄に対する「内言」を生成し、それに諸状況に対する認識や学習言語における情報などを適用させ、「翻訳」のような形で「外言化」させることも考えられる。そのような学習者の「敬語表現化」における過程を追跡する際に「内言」と「外言」の概念は意味を持つようになるのではないだろうか。

このような学習者における「内言」の「外言化」の過程について細川（2004）は、第２言語習得の観点から、「内言」の「外言化」の問題を「内言」としてあるコードから異言語のコードへの変換に関する問題として捉えている。細川によると、基本的に「内言」は母語によって構成されており、たとえば、翻訳の場合は、一度「外言化」された言語をもう一度対象言語に置き換える作業となるが、第２言語習得の場合は、もう少し前の段階、すなわち、「内言」の「外言化」のプロセスにおいてその作業がなされると考えられるとしている。さらに、この場合、（「外言化」は）その「場面」・状況と不可分の形で変換は行われるわけであるから、むしろ「場面」・状況の解釈の上にコード変換の作業であり、しかも、そのコードの変換は、「場面」・状況に即応したものでなければ効果がないので、「外言化」した母語の置き換えではなく、「場面」・状況の認識と解釈そして「内言」としての母語から「外言化」の過程において行われることが必要となると指摘している。

本稿における学習者の「内言」の「外言化」における「内言」のカタチ―母語として構成されていることを認めた面とその「内言」を「外言化」させる過程（「敬語表現化過程」、プロセス）において目標言語、あるいは、第２言語（本稿の場合は、日本語）に置き換えることを認めた面で考え方が共通している。さらに、細川は「内言」の「外言化」の過程における「場面」・状況の解釈の必要性について論じているが、それらの指摘は、本稿で提示している「敬語表現化」過程における「敬語表現化要素」―「敬語表現意識」「敬語表現認識」「敬語知識」の適用の問題と共通している。本稿では「内言」の「外言化」の過程のおける「場面」・状況の解釈の問題を「敬語表現化」過程における「敬語表現化要素」として認識し、さらにその「敬語表現化要素」を「敬語表現意識」「敬語表現認識」「敬語知識」の三つの項目に細かく分類し、精密な分析・考察を行っている。

「内言」と「外言」の存在は「敬語表現化」の過程だけでなく、言語行為全般において認められるものとして考えられる。しかし、必ずしもすべての言語行為に「明確な内言」が存在し、主体はそれを認識し、ある過程を経て「内言」を「外言」にするという意味ではない。主体は「内言」と「外言」の存在や「内言」の具現化の過程を認識している場合もあれば、そうでない場合もあると思われる。しかし、言語行為を考える過程において、特にある表現の生成過程を考えるにおいて、その生成過程の「始発点」を明確にし、そこからの具現化の過程について分析・考察していく言語研究の接近方法の面では、主体の言語行為における「内言」の存在と「外言」への具現化の過程は意味を持つようになるのではないだろうか。

特に「敬語表現化」の過程における「内言」と「外言」、「内言」の具現化の問題は、「敬語」「敬語表現」でない「非敬語」「非敬語表現」をどのようにして「敬語」「敬語表現」にするか、さらに、「敬語」「敬語表現」はどのような過程を経て生成させるのか、を考える際の重要な意味を持っているのではないだろうか。

「内言」と「外言」の概念について考えることによって、特に、学習者を主体とした「敬語」「敬語表現化」を考える際、日本語学習者には、母語話者とは違う学習者特有の「母語」による「内言」の生成と日本語への翻訳といった形をとる「外言」への移行―具現化の場合があり、その過程に対する認識によって「敬語」「敬語表現」の指導・学習における学習者および指導側における問題点を解決するための手がかりになるのではないだろうか。

本稿および「敬語表現化」の過程における「内言」と「外言」の概念はこのような意義

を持っているのである。

3.2「内言」としての「言材」―「ゲンザイ」

本節では前節で確認した「内言」と「外言」の概念をもとに「内言」の具現化の面について見ていく。特に「内言」としての「言材」について考えることによって、「内言」の具現化―「敬語表現化」の過程を考える際の「内言」の材料となる「言材」について見ていく。

まず。「内言」としての「言材」の規定である。

蒲谷（2003）は、「言材」は、＜個々の主体における、音概念・文字概念と表象・概念との回路＞で、簡潔には＜抽象的なレベルでの「言葉」（ことば）＞のことであるとしている。また、「主体」がその「言材」をどのようなものとして捉え、選択するのか、その結果、どのような「言材」によって「語」から「文話」までが成り立っているのかが、重要な点となると指摘している。

「敬語表現化」における「内言」としての「言材」―「ゲンザイ」[23]は、上記の規定をもとに考えている。「ゲンザイ」は、言語行為（特に「敬語表現化」）におけるすべての主体個人が「内言」として持っており、さらに、「ゲンザイ」は、言語（あるいは言語行為）における情報として、また「内言」の「外言化」におけるコトバの材料としての性質を持っていると考えている。

つまり、主体の「敬語表現化」における「考え」「意図」、意識などが反映された言語概念の回路として存在する「ゲンザイ」は、言語行為における主体の「内なる材料」としての性質を持っていると考えているのである。さらに、「ゲンザイ」はまだ具現化されていないので、「内言」として抽象的な性質を持っていると思われる。

このような「ゲンザイ」をより具現化させたもの、より具体的なものにしたのが、次節

---

[23] 「内言」としての「言材」のことを以降「ゲンザイ」で表記する。蒲谷（2003）の「言材」と「敬語表現化」における「言材」を区別するためである。また、「内言」としての性質を強調する場合は「内言」としての「ゲンザイ」として表記する。

でくわしく論ずることになる「内言」としての「通常表現」である。「通常表現」は、「非敬語表現」のように具現化されたもの、あるいは、具体的なものではないが、「敬語表現化」のために、「敬語表現化」において考えなければならない諸状況の適用をよりスムーズにするために組み立てたものとして考えられる。この「通常表現」を組み立てる際のモトになるものとして、材料として、回路として働くものを「ゲンザイ」として考えているのである。

「敬語表現化」における「ゲンザイ」には、「主体」の「敬語表現」に対する個人的な判断・認識がある程度働いており、さらに、「ゲンザイ」は、学習者の場合、様々な形式の学習によって獲得、形成される（された）ものであると思われる。

「敬語表現化」における言語的な材料および抽象的な回路である「ゲンザイ」は、比較的簡単な形としての語・句の形で主体（の頭のなか）に存在する場合もあるが、比較的複雑な形（あるいは、すでに組み立てられた形）の文や「文話」の形で存在する場合もあると思われる[24]。たとえば、「先生のお考えはいかがですか。」といった「敬語表現」を発する際、主体の頭のなかに「ゲンザイ」として「センセイノオカンガエハイカガデスカ」（のようなもの）が存在し、それがそのまま具現化され、「先生のお考えはいかがですか。」の「敬語表現化」が行われるということである。

つまり、「敬語表現化」においては（「敬語表現化」だけでなくすべての言語行為を対象にして考えても）主体の頭のなかに「ゲンザイ」が「比較的複雑な形」ですでに存在している場合があるということである。いわゆる「習慣的な敬語表現」「慣用的な敬語表現」のことがそれにあたると思われる。このような「習慣的・慣用的敬語表現」は、「内言」としての「ゲンザイ」の組み立てにより「通常表現」および「敬語表現」を作る（「敬語表現化」を達成させる）といった自覚的な意識がほとんどなく、すでに「敬語表現」が「内言」として、「内言」としての「ゲンザイ」の段階で存在しているように認識している場合のこと

24「敬語表現化」の概念・過程を内容とした筆者の研究発表（2005 年 3 月。研究業績一覧を参照）における質問・コメントである。研究発表会に参加した日本語母語話者と上級以上の（と思われる）学習者から、次の二つの質問・コメントがあった。
①「内言」とは何かもっと詳しく説明してほしい。「ゲンザイ」についても追加説明をしてほしい。
②すでに「内言」として「敬語」「敬語表現」が存在し、それがそのまま具現化される（音声化・文字化される）場合もあるのではないだろうか、特にそのような過程は日本語母語話者および上級以上の日本語学習者によく見られるのではないだろうか。

であると考えられる。また、このような「習慣的・慣用的敬語表現」は、比較的「敬語表現」になれている日本語母語話者や上級以上の学習者に良く見られるのではないかと思われる。

しかし、「習慣的・慣用的敬語表現」における「ゲンザイ」がすでに「組み立てられた・完成された」形で、実際主体の頭のなかに存在するとしても「敬語表現化」における「ゲンザイ」の存在や回路を否定することにはならないと思われる。それは、まず、どのような形であれ、つまり、語・句としても、語・句より小さい単位である音節などの形としても、あるいは、それより大きい単位である文・「文話」としても、主体の頭のなかには、「内言」としての「ゲンザイ」が存在しているということは動かせない前提になっていると思うからである。脚注 24 の質問・コメントと上記の「先生のお考えはいかがですか。」の例でも確認できるが、前提としては「内言」としての「ゲンザイ」の存在を明確にしているのである。

さらに、「習慣的・慣用的敬語表現」の本質の問題であるが、「習慣的・慣用的」といってもその「度合い」は主体によって異なるものであると思われる。「習慣的・慣用的」といってもその範囲は明確なものではなく曖昧であるため、性質および範囲の究明は困難であると思われる。

また、そのような「習慣的・慣用的敬語表現」が「すでに内言として存在している」としても、それができあがった時点から「内言」として主体が認識し始めた場合もあると考えられる。つまり、「センセイノオカンガエはイカガデスカ」のような「内言」を「組み立てる」までの過程について主体自信が認識していない場合があっても、実は、主体の頭のなかでは、「センセイ」「ノ」「オカンガエ」「ハ」「イカガデスカ」のような「ゲンザイ」を組み立てる過程が無意識に行われていたかもしれないということである。

「敬語表現化」と「ゲンザイ」の問題を待遇表現教育の観点から考えた場合、学習者に「習慣的・慣用的敬語表現」を増やすことは、目標言語における母語的な感覚を養うという側面から考えた場合、指導・学習上の一つの目標になり得ると思われる。しかし、学習者が急に「習慣的・慣用的敬語表現」が使えるようになることはなく、また、急に使えるようにする指導方法・学習方法も考えにくいものである。「敬語表現化」の過程やそのやり方について初歩的な部分から考え、より複雑な過程へ、また、より「自然」な、あるいは

「習慣的・慣用的」[25]な「敬語表現」へと進めていくことが必要ではないかと思われる。

したがって、本稿では、「ゲンザイ」を「敬語表現化」におけるコトバの材料として、また、「通常表現」を構成する材料として認識しているため、すでに「敬語表現」としての形や性質を持っている「ゲンザイ」については、今回は考察の範囲に入れないことにした。しかし、上記で確認した通り、その存在は事実で、その存在もごく自然なものあり、待遇表現および「敬語表現化」の研究おいても意味のあるものであると考えている。「内言」としての「ゲンザイ」における「習慣的・慣用的敬語表現」の問題については、本稿では考察の範囲からはずしているが、今後の研究課題として継続して考えていきたい。

本稿では「ゲンザイ」の「敬語表現化」におけるコトバの材料・回路としての面に着目しているため、すでに組み立てが終了していると考えられる文・「文話」レベルの「ゲンザイ」は「通常表現」の一部として考え、「ゲンザイ」には入れないことにした。

「敬語表現化」における「ゲンザイ」は、「主体」が「敬語表現化」を行う際、どのような過程を経ていくのかを考えるひとつの指標として、また、「敬語表現化」の過程における始発点として位置づけられる。

「敬語表現化」における「ゲンザイ」の具体的な例については「敬語表現化過程」の節で確認する。

3.3「内言」としての「通常表現」―「通常表現」

本節では、「内言」としての「通常表現」について論ずる。「内言」としての「通常表現」の「ゲンザイ」との関係をはじめ、「敬語表現」との関係や「敬語表現化」の過程における意義などについて述べる。

主体の表現したい（あるいは、理解する）内容について「ゲンザイ」を組み立てることによって具現化された（あるいは、具現化した）ものを「内言」としての「通常表現」（金

[25] 学習言語における「慣れ」や「習慣的」な部分、「慣用的」な部分を増やすことを言語（日本語）指導・学習のひとつの目標とした場合。

（2004））―「通常表現」[26]として考える。

「通常表現」は、「先生のお考えはいかがでしょうか。」といった「敬語表現」に対し、「先生の考えはどうか。」といった「外言」としての通常表現（あるいは、「非敬語表現」）のように具現化された「具体的なもの」ではなく、「センセイノカンガエハドウカ」のように、「内言」として主体の頭のなかに存在する抽象的なもの、まだ具現化されていない中間的な性質のものとして考える。コトバの材料・回路である「ゲンザイ」よりは具体的なものであるが、具現化されたものではなく、まだ「内言」として存在しているものとして考える。

主体の表現したい内容の具体化といった点で「通常表現」は、「ゲンザイ」よりは具体的なものであるが、本稿における考察の主な対象となる「敬語表現」に比べると、まだ具現化されていない、まだ「内言」として存在している、さらに、まだ抽象的な性質を持っているものとして考えるのである[27]。

「通常表現」は本稿における一つの概念を表す用語である。

「通常表現」は、敬語化される前の段階の「内言」としての概念で、具現化された「文話」のなかで「通常表現」が独立して実際に存在しているという意味ではない。主体の頭の中にあるもので、「敬語表現」にする前の段階の、敬語化されていない段階の概念としての表現を「内言」としての「通常表現」―「通常表現」として考えるのである。

「敬語表現化」および「敬語表現化」の過程を考えるためには、何が「敬語表現」で、何が「敬語表現」でないといった点、つまり基準を考える必要がある。基準を考える際の概念として「通常表現」を立てることにした。前節で確認したが、本稿における「敬語表現化」の過程は、主体の言語行為（特に「敬語表現化」）における「内言」と「外言」の存在や「内言」を具現化していく過程が実際の言語行為（本稿では「敬語表現」を表現する行為）につながるということを前提にしている。

---

[26] 「内言」としての「通常表現」のことを以降「通常表現」で表記する。ただし、「内言」としての性質を強調する場合は、「内言」としての「通常表現」のもとの形で表記する。

[27] 「具現化」されていないため、「抽象的」であると考えるのである。さらに、頭のなか―概念として存在する場合もあると思われるので、「抽象的」という表現を使っている。

このような前提をもとにした「敬語表現化」の概念は、「内言」の具現化の過程に注目した考え方で、「敬語表現化」における「内言」がどのような形で存在し、どのような働きをするのかといった問題について分析・考察している。このような「内言」の具現化における過程や段階を考える際、前節で述べたコトバの材料・回路である「ゲンザイ」を主体の「意図」や主体を取り囲む諸状況への認識をもとに、「敬語表現化」のために、また、「敬語表現」のもとになるものとして主体が頭の中で組み立てたものを「通常表現」として考えるのである。

「通常表現」は、「敬語表現化」の過程では、上記のように「敬語表現化」のために組み立てられたものとして、「敬語表現化」においては、「意味伝達」の面で中枢になるものとして考えている。

「通常表現」の「意味伝達」としての性質であるが、「通常表現」と比べると、「ゲンザイ」はコトバの材料・回路として存在しているため、「ゲンザイ」(「ゲンザイ」の具現化)だけでは、意味を伝えることはできないと思われる[28]。「ゲンザイ」(「ゲンザイ」の具現化)だけでは、「意味伝達」が適切なものにならない場合が多いため、「敬語表現化」では、言語行為における材料である「ゲンザイ」を「意味伝達」のために組み立てたものを「通常表現」として考えるのである。「敬語表現化」の「意味伝達」の面で中枢をなす「通常表現」に「敬語表現化要素」を適用させて「敬語表現化」を達成させるのである。

「ゲンザイ」から「通常表現」への過程には、その言語の「文法体系」[29]が影響を与えていると思われる。また、その言語の「文法」が「通常表現」の組み立てに機能すること(あるいは、影響すること)が言語教育におけるひとつの「目標」「理想」であるが、学習

---

[28] もし、「水が飲みたい」という考えを表現するのに「ゲンザイ」だけで、つまり、「ゲンザイ」を「ある形」に組み立てずに具現化させた(音声化・文字化)形で表現するなら、次のようなものになるのではないだろうか。
「飲む…水…飲みたい、が、お願いします…お水。」
言語行為が行われる状況に対する認識が共通している場合は、理解できるかもしれないが、そえでない場合を始め、「意味伝達」の面では「適切な」ものとは言えないであろう。
(上の例は、あくまでも「例」で、予想してみたものである。実際は、ただの音声・音声の連続、あるいはただの文字・文字の連続になることも考えられる。また、このように具現化が可能かどうかという点も筆者としては疑問が残る問題のひとつである)

[29] 文法体系。その言語のルール、文法、などを含めて考える。「文法体系」はその言語におきてはある程度規範的な性質を持っているものとして考えられる。「文法体系」は、以降「文法」で表記する。

者の場合は学習言語の「文法」が「通常表現」の組み立てに機能しない場合もあると思われる。

「内言」と「外言」の節で述べたが、学習者は、ある事柄について表現する際、一旦母語で自分の思考回路の中にその事柄を表し、それを日本語に「訳す」場合が有り得る。そのような過程を参考にし、「敬語表現化」する際にも同様な過程―「敬語表現」でない概念を思考回路の中に「内言」として生成させ、それに様々な「敬語表現化要素」を働かせて、「敬語表現化」を行うのではないかと考え、「通常表現」という概念を導入したのである。もちろん、一部の学習者におけるそのような一連の過程―母語で「通常表現」を組み立てて、それに日本語における「敬語表現化要素」を働かせる、母語での「通常表現」を翻訳するような形で「敬語表現化」を達成する過程を批判するために「通常表現」の概念を立てたのではない。外国語学習においてよく確認されるそのような「内言」の具現化方法[30]を参考にし、その過程を明確にすることによって、「内言」の具現化―特に「敬語表現化」の過程を明らかにするためである。

一方、このような学習者の母語による「内言」としての「通常表現」の組み立て（あるいは、生成）がすべての学習者とすべての学習時期・学習レベルで現れることはないと思われる。おそらく目標言語（本稿の場合は日本語）の文法や語彙などの全般的な体系が完成されていない初級・中級前半などのレベルで現れると予測される[31]。つまり、このような「敬語表現化」のための「母語」による「通常表現」の組み立ては、学習が進むにつれなくならなければならないものでもあるが、このような現象について認識し、さらに、学

---

30 「外国語学習においてよく確認される「内言」の具現化方法」は、本稿における主な考察対象である日本語の使用・日本語の学習だけでなく、母語でない言語を学習する過程、いわゆる外国語の使用･外国語の学習においては幅広く確認できることではないだろうか。たとえば、日本語母語話者が学習言語としての英語で何か表現する際、まず母語である日本語で言いたいこと（「内言」としての「通常表現」）を考えて、それを学習言語である英語で翻訳・通訳する形で表現行為を行うことの例が考えられる。

31 実際の学習者の場合、どのようなレベルまで、母語で「内言」を生成させるかといった内容の先行研究・実際の調査は数少ない。学習者の個人的な能力、学習期間、学習の質などの様々で、また、個別的な要素が多いため、一律には言えないが、筆者の印象としては、本文で述べた通り、初級・中級前半までは、「母語」による「通常表現」が認められるのではないだろうかと考えている。さらに、上級以上（超上級を含めた）の学習者の話しによると学習が進むにつれ（学習時間が長くなる、あるいは、取得レベルが上がるなど）、「母語」による「内言」は少なくなっていくという。しかし、これも筆者の知る範囲では確認された事実ではない。

習者が困難している部分について認識することによって、学習者における「敬語表現化」の問題点や「敬語表現化」の過程の問題点などを考えるきっかけになると考えているのである。

「敬語表現化」における「内言」の具体化、意図している事柄の具体化、「意味伝達」の中枢としての意義を持っている「通常表現」は、「敬語表現化」の過程を考える際、注目したい概念である。

3.4「敬語表現化過程」における「敬語表現化要素」

本節では、「ゲンザイ」を組み立てることによって生成された「通常表現」を「外言化」する―「敬語表現化」する過程に必要な「敬語表現化要素」について論ずる。「敬語表現化要素」に対する詳しい分析・考察は以降の 4.「敬語表現化要素」の節で述べることにするため、本節では「敬語表現化要素」の概要について触れておきたい。

「通常表現」が主体の頭のなかに「内言」として存在しており、それを「外言」にする過程を「敬語表現化」の過程として考えるということについては前節で述べた通りである。このような「通常表現」を「外言化」する―「敬語表現化」するためにはどのようにすればいいだろうか。

単に「通常表現」を具現化―音声化・文字化するたけでは「適切な敬語表現」にならない場合が多いため、主体は、自分が直面している諸状況に対して「適切な」認識・判断をする必要があるのである。

このように「適切な敬語表現化」のために考えなければならない諸項目のことを「敬語表現化要素」として規定している。

本稿における「敬語表現化要素」は大きく三つの項目に分けられる。「敬語表現意識」「敬語表現認識」「敬語知識」の三つがそれである。

まず、「敬語表現意識」である。

「敬語表現意識」は、「内言」としての「通常表現」を「敬語表現化」する過程において主体が意識する、また、意識しなければならない諸状況に対する意識の問題である。「意識」という述語を用いているが、それは、この「敬語表現意識」の項目では、主に主体の内なる問題について考えているからである。「敬語表現意識」では、「敬語表現化」における主体の個別的な問題・心理的な問題を中心に考えている。

具体的には、「敬語表現化」や「敬語表現」の使用における主体の「意図」の問題を考える「敬語表現意図」の問題、現代日本語における「敬意」にことについて考える「尊重」の意識の問題、「敬語表現」および「敬語表現化」の普遍性について考える普遍性の問題などを「敬語表現意識」で考えていく。

次は、「敬語表現認識」である。

「敬語表現認識」は、「敬語表現意識」と同じく、「内言」としての「通常表現」を「敬語表現化」する過程において主体が認識する、また、認識しなければならない諸状況に対する認識の問題である。「認識」という述語を用いているが、それは、この「敬語表現認識」の項目では、主に主体の外にある問題について考えているからである。「敬語表現認識」では、主体が「敬語表現化」を行う際、直面する（直面し得る）状況の問題を中心に、日本語を用いる生活共同体におけるルールや規範に関係する問題について考えている。

具体的には、「上下」「親疎」「立場・役割」の三つの軸で考える「人間関係」の問題、「あらたまり・くだけ」「時空」の二つの軸で考える「場」の問題、何を・何について「敬語表現化」するかといった問題に関連する「題材・内容」の問題、どのように「敬語表現化」を行うかといった問題に関連する「ストラテジー」の問題などを「敬語表現認識」で考えていく。

最後に「敬語知識」である。

「敬語知識」は、上の「敬語表現意識」「敬語表現認識」と同じく、「内言」としての「通常表現」を「敬語表現化」する過程において主体が持っていなければならない、または、理解しておく必要のある「敬語形式」に関する知識・情報の問題である。

「敬語知識」では、「敬語表現意識」「敬語表現認識」と違って「敬語表現」ではなく「敬語」という述語を用いているが、それは、「敬語知識」の項目で扱う内容が「敬語形式」に

関する情報・知識などに近いからである。つまり、言語形式に関する問題が主な分析・考察の内容であるため、「文話」を単位とする「表現」という述語で表すことは、適切ではないと判断し、「敬語知識」を用いるようにしたのである。「敬語表現知識」に関する内容は、「敬語表現認識」の節で考えることにした。

上の「敬語表現意識」と「敬語表現認識」が主体の内―心理・考え・意図などと外―状況に対する認識・判断および表現のやり方などに関わることについて考えるに対し、「敬語知識」では、主体が理解しなければならない、知識・情報として持っていなければならないことを中心とした言語形式、特に敬語形式の問題を中心に考えていくのである。

具体的には、「丁重語」とその周辺の問題、「オ・ゴ～ダ」形式の問題、「オ・ゴ～ニナル」と「レル・ラレル」形式の問題、「オ・ゴ～スル」形式の問題などについて考えていく。

上記の「敬語表現意識」「敬語表現認識」「敬語知識」の三つの項目を「内言」としての「通常表現」を「敬語表現化」する過程である「敬語表現化過程」に適用させ、「敬語表現化」を完遂するのである。

3.5「敬語表現化過程」と「敬語表現化」

本節では、前節で確認してきた「内言」「外言」「ゲンザイ」「通常表現」などの概念の理解をもとに「敬語表現化」の過程について確認する。また、様々な「敬語表現化」について例をあげて考える。

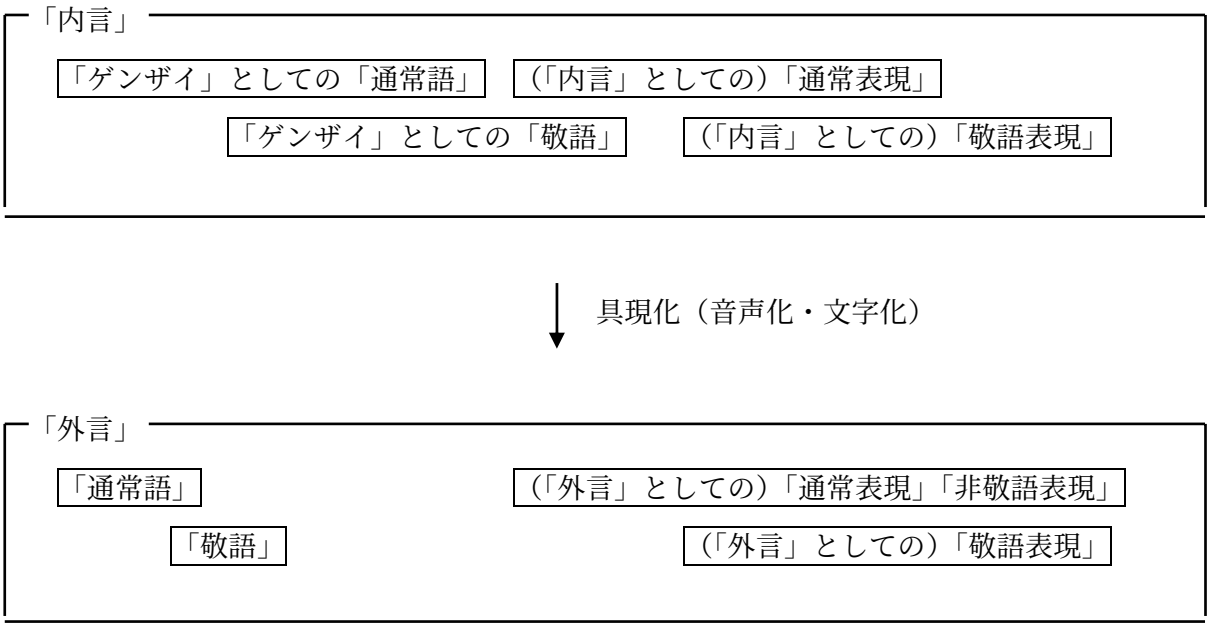
3.5.1「敬語表現化過程」

「敬語表現化過程」のモデルについて考える。

「敬語表現化」の過程を考える際、まず、主体の「内言」と「外言」という観点から見ると、「敬語表現」と「ゲンザイ」「通常表現」の関係は、「内言」の具現化といった面で、図２）のようなモデルで提示できる。

図２）「敬語表現化過程」モデル図

「内言」と「外言」の関係について―「内言」の具現化のモデル



「内言」として、「ゲンザイとしての通常語」「ゲンザイとして敬語」が存在し、その「ゲンザイとしての通常語・敬語」を組み立てた形の「内言としての通常表現」「内言としての敬語表現」が存在していると思われる。

これは、「内言」を、コトバと「考え」の材料・回路としての「ゲンザイ」と「ゲンザイ」を組み立てる形で、主体の「考え」を具体的なものにした「通常表現」と、さらに「ゲンザイ」を組み立てた形をしているが、すでに「敬語表現」の形をしている「敬語表現」（「内言」としての「敬語表現」）に分けて考えたモデルである。前節で述べた「内言」の段階ですでに「敬語」「敬語表現」が存在するということを反映したモデルである。

この「内言」と「外言」のモデルの意義は、「内言」における「ゲンザイ」レベルの「通常語」と「敬語」の存在、特に「内言」における「ゲンザイ」レベルの「敬語」の存在と「内言」における「表現」レベルの「敬語表現」の存在を明確にした点にある。前節で述べた通り、本稿における主な考察対象は「内言」における「ゲンザイ」レベルの「通常語」とそれを組み立てた形の「通常表現」であるが、実際の「敬語表現化」における主体の頭のなか―「敬語表現化過程」を考えてみると、「敬語表現」がすでに「敬語」「敬語表現」の形で「内言」に存在する場合も有り得ると思われる。

「内言」を具現化（音声化・文字化）した「外言」としては、「通常語」「敬語」、また、それを組み立てた形として「通常表現」「非敬語表現」「敬語表現」が存在すると思われる。これは、具現化された「外言」を語（・文）レベルの「～語」と「文話」レベルの「～表現」に分けたモデルである。語（・文）レベルと「文話」レベルにわけたのは、「内言」における「ゲンザイ」としての「通常語」「敬語」と「表現」としての「通常表現」と「敬語表現」にわけたのに対応している。つまり、「通常表現」「非敬語表現」「敬語表現」を、「通常語」「敬語」を組み立てた形のものとして考えているのである。また、「敬語表現」でない「表現」を「敬語表現」にする前の段階のものがそのまま「外言化」された「通常表現」と、「外言化」されたが、「敬語表現」ではない「非敬語表現」の二つにわけて考えた。「通常表現」を「敬語表現化過程」における「敬語表現化要素」が何らかの理由で「適用されなかった表現」として考えるに対して、「非敬語表現」は「敬語表現化過程」を経ていない「表現」、「敬語表現化要素」を何らかの理由で「適用しなかった表現」として考えているのである。さらに、「表現」ではい「外言」の存在についても注目し、「敬語」や「通常語」のことについても考えた。

上記で確認できた通り、図２）は「内言」を「外言」にする過程を網羅したものであるが、次は、本稿における主な考察対象である「敬語表現化」の観点から考えた図２）について述べる。

「内言」を「外言」にする観点から「敬語表現化」の過程を考えた場合、「ゲンザイとしての通常語・内言としての通常表現」「ゲンザイとしての敬語」から「敬語表現」への過程が考えられ、「外言」から「外言」への「敬語表現化」を考えた場合は、「通常語」「外言としての通常表現・非敬語表現」「敬語」から「敬語表現」への過程が考えられる[32]。

上記で確認できた通り、「敬語表現化」の過程は、複数の過程が存在し、さらに各過程には様々な方式があると考えられる。しかし、本稿では、上記および前節で述べた通り、「敬語表現化」における「内言」の存在や「内言」における「ゲンザイ」と「通常表現」の存在を想定し、それらを経ていく過程を本稿における「敬語表現化過程」として考えている。つまり、「内言」としての「ゲンザイ」である「通常語」を組み立てた形の「内言としての

[32] 「外言」から「外言」への「敬語表現化」の問題は、いわゆる「できたもの」「出たもの」を修正する、「敬語表現」にする問題で、主体の「内言」にまでは視点が届いていないと思われる。敬語の語・語彙レベルでの「敬語化」「敬語表現化」がこの過程の例として考えられる。

通常表現」に「敬語表現化要素」を働かせ、「敬語表現化」を行う一連の過程に注目しているため、「内言としてのゲンザイ・通常表現」から「敬語表現化」を行う過程を考察の主な対象とする。

図２）は「内言」の具現化といった観点から見た「内言」と「外言」の関係を表すモデルで、特に「敬語表現化」の過程を中心に現している。本稿における「敬語表現化」および「敬語表現化過程」は、「内言」における「ゲンザイ」が存在し、「ゲンザイ」を組み立てた形の「内言」としての「通常表現」を具現化（音声化・文字化）して「外言」としての「敬語表現」を作る―「敬語表現化」を達成するといった一連の過程である。

次の図３）は、図２）をもとに上記で確認した本稿における「敬語表現化」の過程を示したものである。

「内言」としてのコトバの材料である「ゲンザイ」と「ゲンザイ」を組み立てることによって形成された（した）「内言」としての「通常表現」に「敬語表現化要素」を総合的に働かせ、「外言」としての「敬語表現」を完遂させるという一連の過程を簡略化したモデルである。

図３）「敬語表現化」の過程

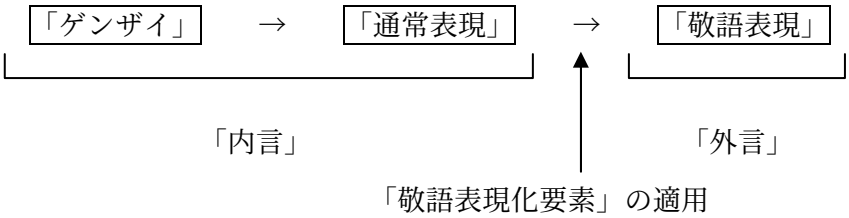


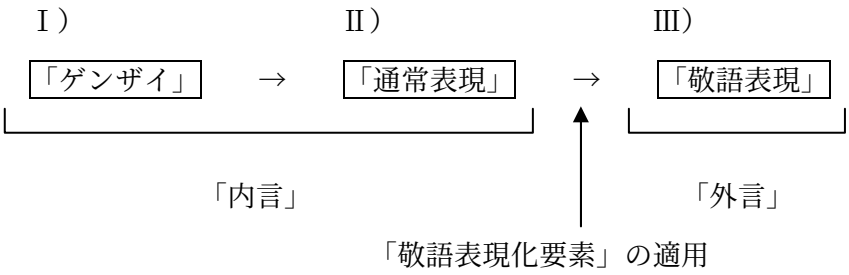
図３）は本稿における主な分析・考察の対象になる「敬語表現化」の過程を簡略に表している。

3.5.2「敬語表現化」の例―「敬語表現化」の実際について

本節では前節で確認した「敬語表現化過程」をもとに実際の「敬語表現化」について例をあげて考える。

まず、「敬語表現化」の過程における例をあげる。
「敬語表現化過程」の理解のために図３）とともに確認していく。

図３）「敬語表現化」の過程



ある主体が存在しているとする。主体は、言語行為における「意図」を持っている。主体の存在と言語行為（「敬語表現化」）における「意図」の存在については図２、３）ともに表していない。それは、「敬語表現化」といった一連の言語行為を考える際、主体と「意図」の存在なしでは、その過程は成立しないといった前提から考えているからである。表は言語行為におけるある「意図」を持った「主体」の中にすでに入り、そこから「表現化」の過程を追っていくのである。

例のために、まず、「主体Ａ」を設定しておく。「主体Ａ」は、日本語学習者で、現在、大学に在籍している。大学では３年生で、田中一郎教授の研究室に所属していると設定しておく。さらに、今回の「敬語表現化」における「主体Ａ」の「意図」としては、自分の指導教授である田中一郎の（ある事柄に対する）意見を聞くことを設定する。

まず、「主体Ａ」の「内言」としての「ゲンザイ」の状況であるが、「指導教授の意見を聞く」といった「意図」を実現するための言語的な材料である「ゲンザイ」について「主

体Ａ」は認識する。

Ⅰ)「ゲンザイ」[33]

タナカセンセイ、センセイ、イケン、ハ、ガ、カンガエ、オカンガエ、ドウ、ドウカ、ドウダ、ドノヨウニ、デス、カ、デスカ、マス、マスカ、イカガ、イカガカ、イカガデスカ、イカガデゴザイマス、イカガデゴザイマスカ、ドウデショウカ、イカガデショウカ、キク、キカセル、キカセテクレル、キカセテクダサイ、キカセテモラウ、モラウ、クレル、モライマスカ、コンナコト、アンアコト、イイカドウカ、…　など

→「内言」として様々な「ゲンザイ」が存在する。ある「敬語表現化」において「主体Ａ」が認識している「ゲンザイ」は、「意図」や事柄に関係するものだけでなく関係のないものもあると思われる。しかし、その中でも目標としている「敬語表現化」に関係する「ゲンザイ」を中心に認識することになると思われる。

また、例で確認できるように「内言」としての「ゲンザイ」は、「通常語」としても「敬語」としても、あるいはもう組み立てられた形（句・文など）としても存在する場合がある。しかし、本稿では主に「通常語」としての「ゲンザイ」に注目をしており、以後における分析・考察における前提になっている。

Ⅱ)「通常表現」

・「タナカノカンガエヲキク」
・「センセイノゴイケンヲキク」
・「タナカキョウジュノカンガエヲキカセテモラウ」
…　など

→「内言」としての「ゲンザイ」を様々な形で組み立て、「内言」としての「通常表現」を作る。「通常表現」は、「ゲンザイ」に比べ、具体的な性質を持っている。前で確認した通り、「内言」としての「ゲンザイ」を組み立てて、「内言」としての「通常表現」にする

[33] 以下、「敬語表現化」の例におけるⅠ）Ⅱ）Ⅲ）のローマ字数字は、図３）のローマ字数字と対応する。各段階における具体的な例を確認しやすくするために任意につけた数字であり、「敬語表現化」における順番を表しているのもではない。実際の「敬語表現化」の過程を考えた場合、必ずしもⅠ）からⅢ）の順に「敬語表現化」が行われるとは限らない。

過程には、その言語の「文法」が適用されると思われる。「文法」は「敬語」「敬語表現」に関する内容も含めていると思われる。また、学習者の場合、「通常表現」を「表現言語」である日本語ではなく、母語で組み立てる場合もあると思われる。しかしながら、いずれにせよ、「通常表現」は、主体の表現行為における「内言」(「考え」「意図」などを含む)が比較的具体的な形になったものであると考えられる。この「通常表現」に主体を取り囲む諸状況に対する意識・認識を適用させ、「通常表現」を具現化していくと思われる。

ただし、「内言」としての「通常表現」は不安定なもので、抽象的なものとして考えられる。それは例で確認できるように複数の「通常表現」を組み立て、そこからひとつを選ぶ場合もあれば、ひとつの「通常表現」があるとしても、具現化の過程―「敬語表現意識」「敬語表現認識」「敬語知識」の「敬語表現化要素」を適用させる過程で「通常表現」の「形」(表現形式)を変えることもあるからである。「敬語表現化」は、語・句レベルの変化における「敬語化」ではなく「文話」レベルにおける「表現」の生成の問題に注目している「敬語表現化」を中心に考えている。

「主体Ａ」は、「内言」としての「通常表現」に「敬語表現化要素」―「敬語表現意識」「敬語表現認識」「敬語知識」を適用させ、適切な判断を下す。

「敬語表現化要素」の適用

○「敬語表現意識」

・この場合は「敬語表現」を使う必要がある

・普通の表現ではなく、丁寧な表現を使う必要があると思う

・目上である先生との関係や今の場を考えると普通の表現ではまずい、敬語を使おう

…　など

→「敬語表現化」における「意図」―「敬語表現意図」を中心に「敬語表現化」の必要性や「尊重」の意識、「敬語表現化」の意義などの問題について考えて、「敬語表現化」のための適切な判断を下す。

○「敬語表現認識」

・相手をどのように呼べばいいのか

・普段の呼び方である「田中先生」で今まで特に問題なかったので「田中先生」でいいだろう

・田中先生との「人間関係」は、指導教授と学生の関係、つまり、「上下」では、田中先生が「上」で、私は「下」であろう。また、「立場・役割」では、田中先生の私の指導教授、私は、田中先生の研究室の所属している学生、だから、何かを質問する、指導を仰ぐことに、特に問題はないだろう

・田中先生は私（「主体 A」）との「人間関係」をどのように認識しているだろうか

・先生は、私にとって「相手レベル＋１」以上の人物だと思う

・今、田中先生と私がいる研究室という「場」では「あらたまり・くだけ」ではどのように考えればいいのか、また、「時空」としてはどのような位置にあるのか

・私と田中先生以外のほかの人に対しても配慮が必要なのか

・先生との心的距離は近いのか、また、先生はどのように考えているのか

・目上の先生に先生の考えを聞く場合、丁寧に聞くためにはどのようなやり方がいいのか

… など

→「主体Ａ」を取り囲む諸状況に対して認識する。「敬語表現化」のために、「人間関係」「場」「題材・内容」「ストラテジー」などの項目について考えて、「敬語表現化」のための適切な判断を下す。

○「敬語知識」

・目上の人物である自分の指導教授に対する呼称としては「センセイ（先生）」「名前センセイ（先生）」などがある

・「カンガエ（考え）」「イケン（意見）」の「敬語」としては「ゴイケン（ご意見）」「オカンガエ（お考え）」などがある

・目上の人物に意見などを聞く場合、「ドウデスカ」「イカガデスカ」などの表現が使える、また「ドウデスカ」よりは「イカガデスカ」のほうが（比較的）丁寧である

・「デス・マス」の部分を「デショウカ、マショウカ」に変えるとさらに丁寧になるという

・目上の人物に意見・考えなどを聞く場合、「～ヲキカセテクダサイ（～を聞かせてください)」のような「命令」の形式を用いた表現もあるが、「～オキカセイタダケマスカ（～をお聞かせていただけますか)」のような「依頼」の形式を使った表現もある

… など

→「主体Ａ」が持っている「敬語」「敬語表現」の表現形式に関する知識・情報などを「敬語表現化」の過程における要素として適用させる。表現形式における知識・情報は、「主体Ａ」の学習、経験などによって習得されたものとして考える。それらの知識・情報について考えて、「敬語表現化」のための適切な判断を下す。

Ⅲ)「敬語表現」

・「田中先生のお考えをお聞きしたいのですが…」[34]

→上記のような「敬語表現化」過程を通じて「外言」としての「敬語表現」を完成させ、表現行為を行う（音声化あるいは文字化させる)。

以上のような段階を経て、一連の「敬語表現化」が完遂されると思われる。

ただし、上にあげた「田中先生のお考えをお聞きしたいのですが…」における「敬語表現化過程」がすべての「敬語表現化過程」を代表するものではない。また、「敬語表現化過程」の例をあげた際、ローマ数字のⅠ、Ⅱ、Ⅲをつけて説明しているが、ローマ数字は「敬語表現化」の順番を表しているものではない。過程を説明する際の目印としてつけたもの

[34] 「ゲンザイ」と「通常表現」の場合とは違って「敬語表現」は例を一つしかあげていない。それは、「敬語表現化」の過程を経て具現化された「敬語表現」は人間のコミュニケーション上、一つの形式にしかならないと考えられるからである。複数のことを同時に考えることのできる人間は存在するかもしれないが、言語による複数の表現（表現行為）を同時に行うことのできる人間は存在しない。二つの表現を同時に発することは不可能だからである。

である。

主体の頭のなかで行われる実際の「敬語表現化過程」について考えてみると、必ずしもⅠ～Ⅲの順で「考え」が進行し、ⅡとⅢの間で「敬語表現化要素」が適用されるとは限らない。ⅠからⅢに「飛ぶ」こともあれば、ⅡからⅠに「逆に動く」、あるいはⅡからⅠへ「戻る」、またはⅠからⅢの間の「ある区間を反復する」ことも有り得ると思われる。

しかし、上記で確認した図３）と「田中先生のお考えは…」の例は学習者における「敬語表現化」「敬語表現化過程」を考える際の典型的なもの、分析・考察における基準となるものとしての意味を持っているのである。また、本稿における「敬語表現化」を考える際、「敬語表現化」と「敬語表現化過程」の見本としての意味を持っているのである。

以降では、上記で確認した「典型的」な「敬語表現化」をはじめとする様々な「敬語表現化」の例を確認しておきたいと思う。

ある主体が「意図」として「指導教授に大学院入試のための推薦状を書いてもらう」ということを考えているとしよう。「推薦状を書いてもらう」ことに対する「内言」としての「通常表現」としては、まず、「センセイ、ダイガクインニュウシノタメノスイセンジョウヲカイテクダサイ」あるいは、「センセイ、ダイガクインニュウシノタメノスイセンジョウヲカイテイタダケマスカ」などのような「依頼表現」を用いたものが考えられる。そのような「依頼表現」としての「内言」に「敬語表現意図」「人間関係」「場」および敬語形式などの項目を考慮した「敬語表現化要素」を適切に適用させ、「先生、大学院入試のための推薦状をお書きいただけないでしょうか。」のような「敬語表現」にする―「敬語表現化」を行うことが考えられる。このように「依頼表現」としての「内言」を「そのまま敬語表現化」することは「内言」の具現化の面から考えた場合、もっともなことであり、特に問題はない。しかし、本稿における「敬語表現化」では、「依頼表現」としての「内言」をそのまま具現化させる「敬語表現化」より、さらに主体を取り囲む様々な状況に対する意識、認識、知識などを考慮し、「敬語表現化」を行うことを考えている。

たとえば、上のような事柄について「敬語表現化」を行う際、「依頼表現」としての「内言」に「行動展開表現」における「丁寧さ」の原理（蒲谷・川口・坂本（1998））を適用させることが考えられる。

「行動展開表現」は、「行動展開」を「表現意図」とする「文話」のことで、すなわち、自己の感情・認識などに基づく「表現内容」が「相手」に理解されるだけでなく、それによって「表現内容」が実現されることを「表現意図」とする「文話」のことである。「行動展開表現」は「行動」―だれが動くか、「決定権」―だれが決めるか、だれが決定の権利を持つか、「利益」―だれに利益・恩恵があるか、といった三つの指標を持っているが、「自分」が「行動」し、「相手」が「決定権」を持ち、「自分」が「利益」を受ける構造を持つ「行動展開表現」がもっとも「丁寧」である―そのような構造が「丁寧さ」の原理を持っているとしている。この場合、様々な「行動展開表現」のなかで、「自分」が「行動」し、「相手」が「決定権」を持ち、「自分」に「利益」がある構造の「許可求め表現」（典型的な表現：「～シテモイイデスカ」）がもっとも「敬語表現」的表現で「丁寧さ」の原理に充実な表現である一方、「相手」が「行動」し、「自分」が「決定権」を持ち、「相手」が「利益」を受ける構造の「許可与え表現」（典型的な表現：「～シテモイイデス」）がもっとも「敬語表現」的でない表現で「丁寧さ」の原理に遠い表現であるとしている。

したがって、「相手」が「行動」し、「相手」に「決定権」があり、「自分」が「利益」を受ける構造の「依頼表現」より、「自分」が「行動」し、「相手」が「決定権」を持ち、「自分」に「利益」がある構造の「許可求め表現」を用いて、「内言」としての「通常表現」を具現化―「敬語表現化」したほうが、より「丁寧」で、より「敬語表現」的な「敬語表現化」を行うことになると言えよう。このような「丁寧さ」の原理を「敬語表現化」に適用することが考えられるのである。

他にも、唐突に用件を切り出すよりは、相手の注意を引いてから用件を話すほうが丁寧であるといった点や、何かを「依頼」する際（「依頼」だけではないと思われるが）、断定的な語尾を使うより、語尾を「濁す」ことによってより丁寧な感覚を与えることができるといった点などを「内言」の具現化―「敬語表現化」の過程に適用させ、「敬語表現化」を行うことが考えられる。

したがって、「センセイ、ダイガクインニュウシノタメノスイセンジョウヲカイテクダサイ」あるいは、「センセイ、ダイガクインニュウシノタメノスイセンジョウヲカイテイタダケマスカ」のような「内言」を具現化―「敬語表現化」する際、「内言」をそのまま具現化した形ではなく、上の確認した様々な「敬語表現化」における意識、認識、知識を適用させ、「あの…先生、お忙しいところ、申し訳ありませんが、大学院入試のための推薦状をお書きいただいてもよろしいでしょうか…」のように「敬語表現化」することが考えられ

るのである。

このように、「内言」の具現化―「敬語表現化」の過程において様々な「敬語表現化」の過程における要素について考慮する、また、「内言」をそのまま具現化する―「敬語表現化」するのではなく、主体の直面する諸状況に合わせて「内言」の具現化の形を変化させることが本稿における「敬語表現化」に基づいた考え方である。

次も「敬語表現化」の例である。

ある主体が「意図」として「本日の講演会の公演者である著名なＡ教授を午後の懇親会に誘う」ことを考えている（持っている）としよう。「主体」は「内言」としての「通常表現」として、「Ａキョウジュ、ゴゴノコンシンカイニサンカシマセンカ」や「Ａセンセイ、ゴゴノコンシンカイニサンカシテクダサイ」などのような「勧誘表現」「指示・命令表現」の形で「内言」を考えていることが考えられる。このような「内言」を具現化して、「先生、よろしかったら午後の懇親会に参加してください。」のように「敬語表現」にすることが考えられる。これも上記の例と同様、意味伝達、意思伝達、あるいは、「行動展開表現」の観点から見れば特に問題のない表現―「敬語表現化」かもしれないが、講演会の公演者、著名な教授、懇親会に誘うという事柄（特に、「誘い」という事柄）などを考えた場合、さらに「敬語表現」的な、さらに「丁寧」な「敬語表現化」は可能であると思われる。

したがって、「Ａキョウジュ、ゴゴノコンシンカイニサンカシマセンカ」や「Ａセンセイ、ゴゴノコンシンカイニサンカシテクダサイ」のような「内言」を、「相手」に「決定権」があり、「相手」に「利益」がある構造の「勧誘表現」、あるいは、「自分」に「決定権」があり、「自分」または「相手」に「利益」がある構造の「指示・命令表現」で「そのまま敬語表現化」するのではなく、「自分」に「利益」がある構造の「依頼表現」として「敬語表現化」を行うことが考えられる。さらに、「教授」は職名であり、「尊重」の意識を表す呼び方ではないといったこと、「オリマス」などの「丁重語」を用いることによって表現に対する「あらたまり」が増すといったことなどの「敬語知識」を「敬語表現化」に適用させることも考えられる。

すなわち、「Ａキョウジュ、ゴゴノコンシンカイニサンカシマセンカ」や「Ａセンセイ、ゴゴノコンシンカイニサンカシテクダサイ」のような「内言」を「敬語表現化」する際、「Ａ先生、本日の講演は勉強になりました。ところで、午後に懇親会を予定しております

が、よろしかったらご参加いただけないでしょうか。」のように「敬語表現化」することが考えられるのである[35]。

上記のような「敬語表現化」は様々な場面で確認できる。

駅のフラットホームで、乗客の安全のために床にかかれている白線の外側で電車を待つ乗客に対し、駅員が白線の内側に下がることを指示・命令する際[36]、「指示・命令」の形で表現―「敬語表現化」する[37]のではなく、「依頼」の形をとった表現をすることがある。

駅員の「意図」に基づいた「内言」としては、「アブナイカラハクセンノウチガワにサガリナサイ」あるいは「ハクセンノウチガワニサガッテクダサイ」のようなものが考えられるが、駅員としての「自分」と乗客としての「相手」との「人間関係」や「指示・命令表現」の構造―「相手」が「行動」し、「自分」に「利益」と「決定権」がある構造などを考慮した上、「あぶないから白線の内側に下がりなさい」ではなく「すみませんが危険ですので、白線の内側に下がっていただけませんか」として「敬語表現化」を行うことがあるのである。上記で確認したような「敬語表現化」はこのように様々な場面で確認できると思われる。

さらに、本稿における「敬語表現化」は、ある表現に対する応答（リアクッション）としても行われるものでもある。

実際のコミュニケーションを考えた場合、主体同士の言語行為における「表現」と「理解」は単発的なものである場合もある。しかし、多くの場合は、「会話」「対話」などで表現されるように、主体同士の言語行為における「表現」と「理解」は、主体同士の言語行為の「やり取り」と、その「やり取り」の「繰り返し」で構成、あるいは成立される場合が多い。したがって、本来は、コミュニケーションにおける主体同士の「やり取り」と「繰り返し」を分析、考察の対象としたほうが、広くは「言語行為」の、狭くは「待遇コミュニケーション」(「敬語コミュニケーション」）の全貌を明らかにすることにつながるが、その主体同士の「やり取り」と「繰り返し」を全面的に分析・考察することは、きわめて困難であり、実際の研究もそのような「やり取り」と「繰り返し」の一部を研究対象にして

---

35 蒲谷・川口・坂本（1998)。「あたかも表現」の仕組み・構造を参考にしている。
36 蒲谷・川口・坂本（1998)。「あたかも表現」における用例から引用した。
37 乗客と駅員といった「人間関係」の面から考えた場合、駅員が客である乗客に「敬語」で対応することは常識の範囲内のことであると考えられる。

いる場合が多い。本稿は、特に、主体の「敬語表現化」における生成過程に注目しているため、主体同士の「やり取り」と「繰り返し」の部分は考察の対象にしていないが、そのようなコミュニケーションにおける「基本構造」については、分析・考察における基本的な前提にする必要がある。

ある表現に対する応答―リアクション、理解をもとにした表現行為―における「敬語表現化」の問題にもどるが、上の駅員の乗客に対する「敬語表現」に対し、駅員の「敬語表現化」における「意図」や「敬語表現」の意味を理解した客ならば、「はい、下がってもいいですよ。」のように「許可与え表現」を用いた応答ではなく、「あ、すみません。（白線の内側に下がる）」[38]あるいは、「わかりました（白線の内側に下がる）」のように応答―これも広い意味での「敬語表現化」であると考えることができると思われる―することが考えられるのである。

駅員と乗客の場合における乗客の応答からみた「敬語表現化」の問題、つまり、言語行為のひとつとして、ある応答における「敬語表現化」がより鮮明になるのが、「オ願イシマス」（を用いた応答）の問題である[39]。

たとえば、携帯電話におけるある手続きをする場面で、携帯電話会社の事務所の職員が、手続きに必要な書類として、客の身分証明書をコピーする場合を例として考えてみよう[40]。店員は携帯電話における手続きとして身分証明書のコピーをすることを客に告げる。この場合、「表現行為」における「内言」としては「キャクデアルアナタノミブンショウメイショヲコピーシマス」のようなもの考えられ、その「内言」の具現化―「敬語表現化」としては、「お客様の身分証明書を手続きのためにコピーさせていただきます。」のようなものが考えられるが、客との「人間関係」、「宣言表現」と「許可求め表現」における「丁寧さ」の原理などを考慮し、「お客様の身分証明書をコピーしてもよろしいでしょうか。」のような「許可求め表現」として「敬語表現化」を行う。このような「敬語表現化」については上記の例で確認した通りであり、また、このような「敬語表現」は、本稿において考えている「敬語表現化」の概念に符合するものであると考えられる。

このような店員の「敬語表現」に対し、客は「ミブンショウメイショノコピーヲキョカ

---

38 この場合、（　）のなかは「表現主体」の行動を表す。

39 「オ願イシマス」の「敬語表現」上の問題および「敬語表現化」上の問題についてはⅡ章で詳しくみていく。

40 筆者の実際の経験に基づいた例である。筆者の実際の経験を、内省を通じて再構成した。

スル（あるいは、ユルス）」のような現在行われている事柄に対する応答（リアクション）としての「内言」を頭のなかに持つことが考えられる。このような身分証明書のコピーに対する許可の表現（あるいは「敬語表現」）として、「はい、いいですよ。」あるいは、「はい、コピーをしてもいいですよ。」のような「許可与え表現」を応答として具現化―「敬語表現化」することが考えられる。このような「許可与え表現」を用いた「内言」の具現化―「敬語表現化」は意味伝達の面においては、間違ってはいないが、さらに丁寧に、あるいは、さらに「敬語表現」的な表現（リアクション）をするためには、他の方法もあると思われる。

「はい、お願いします。」のような応答がその例であるが、身分証明書のコピーを許可するといった「内言」を具現化する―「敬語表現化」を行う際、「許可与え表現」の構造を「依頼表現」の構造に変えて、「敬語表現化」を行うことによって、より丁寧に「内言」を具現化することができるのである。このような「敬語表現化」の過程には、「行動展開表現」における「丁寧さ」の意識や初対面の「人間関係」に対する配慮、「敬語表現化」に関する「意識」、「オ願イシマス」といった「敬語」（「敬語表現」）に関する知識などの様々なことが適用されていると思われる。

このように本稿における「敬語表現化」は、主体における「敬語表現化」の様々な過程で確認できるものとして考えられる。

最後に、「敬語表現化」の様々な形について考える。

必要に応じて、あるいは、主体を取り囲む諸状況に応じて、「内言」を「そのまま敬語表現化」するのではなく、様々な「敬語表現化要素」を「敬語表現化過程」に適用させ、「内言」の具現化―「敬語表現化」を達成する一連の言語行為が本稿における「敬語表現化」であると今まで論じてきたが、「敬語表現化」には、「内言」を具現化する際、「内言」の具体的な具現化を回避したり、省略したりする場合もあると思われる。

たとえば、一定の業務が終わった後、目上の人物である社長に社員である「自分」が社長の本日の夜の予定を聞く場合を例として考えてみよう。一定の業務の終了後はおそらくプライベートな時間になる。このような事柄における社員の表現（質問）に対する「内言」としては「シャチョウ、コンヤノヨテイハナンデスカ」のようなものが考えられるが、それをそのまま、「社長、今夜の予定は何でしょうか。」のように「敬語表現化」するのでは

なく、「社長、今夜の予定は…」のように、具体的な質問の部分を具現化―「敬語表現化」することを回避する、あるいは、省略することが考えられる。このような「敬語表現化」の過程には、目上の人物にプライベートな事柄について尋ねるのは失礼になる場合があるという認識、社長である「相手」と社員である「自分」の「人間関係」、プライベートな事柄について尋ねるといった「題材・内容」など様々な「敬語表現化過程」における「敬語表現化要素」を適用させた結果ではないかと考えられる。

このように本稿における「敬語表現化」は、様々な形で「内言」を具現化していくと思われる。

以上では、主に「行動展開表現」における「敬語表現化」を中心に例をあげて考えてみたが、それは、「文話」における「相手」（話題の人物を含む）に対する「配慮」「敬意」あるいは「尊重の意識」などを表す役割をする「敬語表現」の本質と「行動展開表現」の構造、本質が密接な関係を持っているからであると思われる。しかし、「敬語表現化」は必ずしも「行動展開表現」に限定して行われるものではないと思われる。

また、実際の「敬語表現化」を考えた場合、「文話」における主体同士の今までの「人間関係」「場」に対する認識とその認識の差、個人的な「言語習慣」などの様々な「個別性」に関連する問題が絡むため、上記であげた例が「絶対的」なもの―「敬語表現化」における見本であるとは言えない。

さらに、実際のコミュニケーション、特に音声を媒体としたコミュニケーション、あるいは、音声を媒体とした「敬語表現化」を考えた場合、音声の大きさ、音調、イントネーション、プロミネンスなど音声的な要素は「敬語表現化」における重要な指標になると思われる。音声関連の問題を分析・考察の対象からはずしている本稿の場合、上記であげた例にはある程度、「敬語表現」「敬語表現化」の本質を究明するには限界があるのも事実である。

しかし、語・句を「そのままに」形を変える「敬語化」「敬語表現化」ではなく、「文話」を単位に「文話」における主体の頭のなかの「内言」と「内言」の具現化の過程の問題、および、主体を取り囲む「文話」が行われる「場面」における諸状況の「敬語表現化過程」への適用の問題について考える「敬語表現化」は、「敬語表現」を考えるひとつのモデル、あるいは、観点としての意義を持っていると考えている。

上記では、様々な「敬語表現化」の例をあげて本稿における「敬語表現化」の概念や過程について確認した。言語行為における主体の「内言」を始発点に、主体が直面する諸状況に対する意識、認識、情報・知識を「内言」の具現化に適用させ、「敬語表現化」を達成するといった本稿における「敬語表現化」の概念、過程について確認したのである。

4.「敬語表現化要素」

4.1「敬語表現意識」

4.1.1「敬語表現意識」の規定・性質

本節では、「敬語表現化要素」のひとつである「敬語表現意識」について論ずる。

「敬語表現意識」は、ある事柄を「敬語表現化」することに関する主体の自覚的意識のこととして規定する。「敬語表現意識」は「敬語表現化過程」における「内言」としての「通常表現」を「敬語表現」にする過程で「通常表現」を「敬語表現化」するために働く（働かせる）ひとつの概念として考えられる。「敬語表現意識」は、コミュニケーション主体―学習者が直面して得る諸状況における「意識」のことで、本節では、適切な「敬語表現化」を達成するためにはどのような「意識」を持つ必要があるのか、また、主体―学習者にどのような「意識」を持たせる（あるいは、意識させる）必要があるかについて考える。

「敬語表現意識」は、「敬語表現化」に関して主体が意識する（あるいは、感じる）「必要性」と主体が意識する「意図」と密接な関係があると思われる。たとえば、ある事項について表現（理解）する際、これは丁寧に言う必要がある、敬語にする必要がある、のような主体の自覚的な意識の部分を「敬語表現意識」の節で考えていくことにする。

4.1.2　「敬語表現意識」の問題―「敬語表現意図」

本節では、「敬語表現意識」における「意図」の問題、「敬語表現意図」の問題を中心に考えていく。

「主体」の「意図」について、蒲谷（2003）では、「意図」というのは＜「コミュニケーション主体」が何らかの行為（特に、その「表現行為」「理解行為」）によって何らか実現しようとする、自覚的な意識のこと＞であると規定している。

上の規定に基づき、「敬語表現意識」における「意図」―「敬語表現意図」は、ある事柄について所期の「意図」を達成する、その「意図」を達成させるひとつの手段として「敬語表現」でない表現について「敬語表現化」を行うことを目標としている自覚的な意識として規定しておく。つまり、「敬語表現意図」は、「敬語表現化」の必要性における自覚的な、また、積極的な意識のことであると定義できる。

さらに、蒲谷（2003）は、「意図」自体は、見えないものであり、そのため、「意図」の重要性は理解されつつも、非常に扱いにくいものであると指摘している。「敬語表現意図」も、「敬語表現意識」における重要な一面を占めているが、外からは見えにくいものであるという性質を持っていると言えよう。また、「意図」は明確な場合もあるが明確でない場合もあり（意図研究会（2001））、その実態を明確にすることは、困難であると言えよう。しかし、表現行為における「意図」の存在について意識し、それについて考えることは、外国語教育(日本語教育)の面から考えた場合、重要な意味を持つことになると思われる。

待遇表現教育だけでなく日本語教育全般にわたることであるが、表現をする際に「意図」を持って表現する、といった点がかけてしまうと、結局は「練習のための練習」になりがちである。しかし、「意図」は教師側から与えられるものではなく、主体である学習者が自らの意思によって「意図」を持つことが大切であると蒲谷（2003）は指摘している。「敬語表現化」における意識として、自覚的な「意図」を持ち、さらに、それに伴った様々な「敬語表現意図」が存在するという点について考えておく必要があると思われる。

待遇表現教育における効果的な練習のためには、自覚的な「敬語表現意図」を意識させる必要があると思われるが、自覚的、自発的な「敬語表現意図」を持たせるためにはどのようにすればいいだろうか。

まず、具体的な場面を提示し、「敬語表現」の必要性を意識させる必要がある。練習の際、学習者が実際の生活で直面し得ると考えられる場面を提示することによって、学習者の自覚的な意識を高めることができると思われる。例としては、アルバイトの場面を練習

の際に設定することが考えられる。学習者が直面し得る具体的な場面を類型化して提示することによって学習者に「敬語表現化」における必要性と積極的、かつ明確な「意図」を意識させることは可能になるのではないだろうか。具体的なやり方としては、学習者が店員となり、客としての教師との「人間関係」における「敬語表現」を練習するということが考えられる。

また、クラスでの活動としては、発表会（報告会など）における司会としての役割を与えるなども考えられる。上記のアルバイトの場面の設定が店員と客といった「人間関係」に注目した練習であるとすれば、発表会の設定は、「場」に注目した「敬語表現」の練習につながるのではないかと考えられる。必然的に「敬語表現」が必要な場面や役割を与え、学習者自身に「敬語表現」の使用の必要性を自覚的に意識させる必要がある。

次に学習者から離れた役割を与えないという点である。たとえば、従来の教科書や教室の練習における設定として「医者と患者」という役割を学習者に与える場合があった。患者としての「敬語表現」の練習はできるかもしれないが、医者としての役割とそれに伴う「敬語表現」は実現性が極めて低く、学習者に自覚的な「敬語表現化」の必要性を意識させることは難しいことであると思われる。同じ例としては「社長と部下」「駅員と鉄道の利用者」などもある。学習者の立場からあまり離れない役割や場面を設定することは、待遇表現教育における重要な点であると考えられる。

その他にも、内容（事柄）の適切性について考慮する必要があると思われる。内容（事柄）の適切さを考慮した例としては、「道案内」が考えられる。「道案内」は、実際の生活で直面し得る具体的な場面で、一般成人同士といった面で学習者から離れた役割ではない[41]。その上、情報を求めてきた初対面の人に情報を与える（あるいは、与えない）といった設定は無理のない適切な内容であるため、学習者に容易に「敬語表現化意識」を持たせることができると思われる。このように、役割だけでなく、事柄、内容の設定の面においても必然性を確保する必要があると思われる。

このように学習者が直面し得ると考えられる具体的な「人間関係」「場」「内容（事柄）」

[41] 川口（2002a）

を練習の際、設定することによって学習者に「敬語表現化」の必要性について意識させ、自覚的かつ明確な「敬語表現意識」を持たせることができるのではないだろうか。

4.1.3「敬語表現意識」の問題―「尊重」の意識

本節では、「敬語表現意識」における「尊重」の問題について論ずる。

従来の敬語および敬語表現の研究、指導のおいて主な指標になっていたのは、「尊敬」という概念や用語であった。「尊敬」の概念、用語は敬語の分類―「尊敬語」―だけでなく、敬語および「敬語表現」の性質や機能などを説明する場合にも用いられている。日本語教育、特に待遇表現教育の場合でも例外ではなく、敬語の分類や性質などを指導する際にも頻繁に使われていると言えよう。

しかし、この「尊敬」という用語、概念が、現代日本語における敬語、「敬語表現」を適切に表すのかについては、今まで様々な問題提起があった。

蒲谷・川口・坂本（1998）では、次のように「尊敬」と「尊重」について指摘している。

> （「いらっしゃる」「めしあがる」などの敬語（いわゆる「尊敬語」は）そうした「敬語的機能」を果たす、という点で最も「敬語らしい敬語」と言えるかもしれない。その意味で「尊敬語」という名称もよいのだが、現在の「敬語表現」においては、「尊敬」という言葉が必ずしも適切ではない場合も多いため、「尊敬」ではなく、すべての人の人格を「尊重」するという意味で、「尊重語」という述語で呼びたいと思う。

相手を「敬う」ことは敬語、「敬語表現」における最も基本的なことである。相手を「敬う」ことは、相手に対する待遇のひとつであり、敬語における基本意識のひとつとして位置づけられると言えよう。しかし、上記の蒲谷・川口・坂本（1998）による指摘通り、身分制度が存在しない「平等な」現代社会において「尊敬」は必ずしも適切ではないことは明確である。コミュニケーションに関わるすべての人の人格を「尊重」するといった概念で敬語、「敬語表現」をと捉えることは、待遇表現教育の面から考えても重要な指標のひとつになると思われる。

杉山（2003）の外国人 51 名（アジア系、38 人と非アジア系 13 人）に対するアンケート調査によると、「尊敬していない人には尊敬語を使いたくないと思ったことがありますか」といった設問に対し、「ある」の答えが 45.1%、「今もそう思っている」が２%で、47.1%の調査対象者が「尊敬していない人には尊敬語を使いたくないと思っている」としている。つまり、外国人―学習者は、「尊敬」「尊敬語」に対して何らかの「違和感」を覚えているということであり[42]、ある程度の学習者は「尊敬」という概念、用語について疑問を覚えていることが確認できるのではないだろうか。

先行研究で確認した通り、学習者に「敬語表現」および「敬語表現化」について指導を行う際、「尊敬」、相手に対して「尊敬」の気持ちを表すために「敬語」を使いましょう、「尊敬語」を使って「敬語表現化」を行いましょう、のような意識を持たせることは適切でない部分があると思われる。

「敬語表現化」における「敬語表現意識」を学習者に意識させる際は、「相手」を「尊敬」するといった概念より、すべての人の人格を「尊重」するといった「尊重」の概念を中心に指導し、学習させることによって「敬語表現化」における意識をより効果的に高めることができるのではないかと考えられる。

それでは適切な「敬語表現意識」を意識させる指導の一環として学習者に「敬語表現化」における「尊重」の意識を持たせる、理解させるためにはどのようにすればいいだろうか。以下で「敬語」「敬語表現」の理論的な導入および指導の面について考えた。

筆者が担当している日本語の授業[43]で学習者に「敬語はどのような場面で、どのような

---

[42] 杉山（2003）によると、「ない」の答えは 52.9%があったとしている。杉山の調査は、アンケートの形式で行われたとしている。アンケートの設問に対する答えは「実際の言語実態」というより、「意識調査」としての面があると指摘し、アンケートによる「言語使用の実際」の究明には疑問を持つ先行研究も多い。筆者も同様に考えており、杉山の調査結果は「尊敬」「尊敬語」における「言語使用の実態」というより、「意識の調査結果」として捉えるべきであると考えており、本稿においても外国人―学習者の意識を窺うひとつの資料として考えている。また、設問自体にある程度答えを誘導している部分があると感じられる。「敬語」＝「尊敬」、「尊敬語を使う」＝「尊敬する」のように誘導している部分があると思われる。

[43] 早稲田大学の日本語研究教育センターにおける授業（2005 年 4 月現在）。8 段階のレベルのなかの 4 段階の学習者で、初級段階の学習を終え、中級段階に入ったレベルであると判断される。基本的な敬語の形式や授受動詞を使った「敬語表現」ができるレベルで、ある程度「敬語表現化」に対しても理解しており、基本的な「敬語表現化」ができる状態で

関係で使うのか」という質問をしたことがある。どのような意識で、どのような必要性で「敬語表現化」を行うかについて、学習者の意識を把握するためであった。学習者の答え（意見）としては、先輩・先生などの目上の人物と会話で敬語を使う、初めて会った人に敬語を使う、アルバイト・仕事などの場面で敬語を使う、などがあった。「人間関係」と「立場・役割」関係で「敬語表現化」における必要性を感じていると解釈できる。

そのような学習者の意識のなかで、特に本稿で注目したいのは、敬語の使用、つまり、「敬語表現化」を「上下」の「人間関係」だけでなく、「親疎」や「立場・役割」における適切なコミュニケーションの手段として意識している部分である。初対面の人物との関係とアルバイト・仕事関係での使用に対する意識がそれにあたると思われる。しかし、筆者が確認したことがすべての学習者に共通しているかどうかは不明であるが、ある程度学習者にも「敬語表現化」は、「尊敬」する、「尊敬」の気持ちを表すために行うのではなく、コミュニケーションにおける「尊重」の気持ちを表すために行うといった点について認識している部分があると思われる。このように、敬語、「敬語表現化」の導入の際は、実際の使用にあたる学習者の意識の部分にも注意しながら導入を行う必要があると思われる。

「敬語表現教育」における具体的な導入の方法としては、まず、学習者に実際どのような「人間関係」「場面」で「敬語表現化」を行っているのか、「敬語表現化」に対する意識はどのようなものなのかについてブレーンストーミングなどの方法を用いて、実際の使用について思い出させることが考えられる。学習者に実際の経験や使用について思い出させることによって、「敬語表現化」における意識を高めることが期待できる。自分の経験に基づいた問題意識を意識させることによって、教師側からの一方的な導入よりスムーズに自覚させることができると思われる。次は、そのような実際の使用をもとに「敬語表現化」が行われる「人間関係」「場面」などについて類型化させ、その類型化の内容をもとに「敬語表現化」の必要性を意識させることが考えられる。類型化の内容はクラスのレベルや学習者の構成などによって様々なものになると思われるが、必ずしも「尊敬」だけが「敬語表現化」における指標ではないことを学習者に意識させることは可能であると思われる。上記の筆者の実際の経験で確認できた通り、学習者には実際の使用について「尊敬」という概念よりは「人間関係」「場面」における「尊重」の意識について自覚している部分があると思われる。そのような部分を明確にさせることによって、「敬語表現化」における「敬

ある。

語表現意識」、特に「尊重」の意識について理解できることになり、それらは、後の敬語、「敬語表現」の理解や学習だけでなく実際の使用（活用）にも影響してくるのではないかと考えられる。

次は敬語の理論的な指導における部分であるが、特に敬語の分類における指導の際、考えておきたいことである。

従来の敬語の分類としては「尊敬語」「謙譲語」「丁寧語」[44]の 3 分類の敬語を提示する場合が多かった。しかし、上述した通り、必ずしも「尊敬」という概念は現代の日本語（の使用）に適切であるといえない部分があるため、敬語の分類などの理論的な内容の提示の際、それらについて再考する必要があると思われる。述語として、また用語として用いられるので、実際の使用とはあまり関係がないように見えるかもしれないが、学習者の立場から考えた場合、述語および用語は、その対象となるものの性質と結びつけて認識することもあると思われる。したがって、「敬語表現化」における適切な意識―特に「尊重」の意識を持たせるためには、敬語の理論的な指導の面においても工夫をする必要があるのではないかと考えられる。

具体的な指導の例としては、蒲谷・川口・坂本（1998）の敬語の分類と述語の適用が考えられる。蒲谷・川口・坂本（1998）は、敬語の分類において「尊重」の概念を積極的に導入し、従来の「尊敬語」「謙譲語」「丁寧語」の 3 分類に対して、「直接尊重語」「恩恵直接尊重語」「相手尊重語」（以上、いわゆる「尊重語」）「間接尊重語」「恩恵間接尊重語」「丁重語」「尊重丁重語」「自己卑下語」（以上、いわゆる「謙譲語」）「美化語」「丁寧文体語」「丁重文体語」（以上、いわゆる「丁寧語」）のような 11 分類を行っている。

そのなかで、特に本稿で注目しているのは「尊重」の概念を用いた「尊敬語」と「謙譲語」の分類―そのなかでも「直接尊重語」「恩恵直接尊重語」「間接尊重語」「恩恵間接尊重語」の四つの設定である。「敬語表現化」における「尊重」の概念とその意識の問題については記述しているが、「謙譲」という用語とその意識について再検討した部分も「敬語表現化」の意識の面で意味を持っていると思われる。

---

[44] 「美化語」を追加することもある。一般的に敬語の分類については辻村（1991 他）の説に従う場合が多い。

水谷修・水谷信子（1988～1991）は、外国人[45]のなかには「謙譲」、つまり「へりくだる」ということ（概念）に拒否感を覚える場合も多いと指摘している。上述した通り、身分制度の存在しない「平等な」現代社会において「へりくだる」「自分を低くする」といった概念は、必ずしも適切であるとは言えない。蒲谷・川口・坂本（1998）においても、（申し上げる、お聞きするといった敬語の）「言う」「聞く」の「概念」部分に直接関わる動作主体は＜高くしない＞で、その動作に間接的に関わる人物を＜高くする＞という「敬語的性質」や「敬語的機能」があり、＜高くする＞対象となる人物を「間接的に高くする」という点で、「間接尊重語」という述語を用いたとしている。「自分を低くする」という概念ではなく、「自分の動作」に敬語を用いる、つまり、自分のことについて「敬語表現化」を行うことによって「尊重」の意識を表すといった「敬語表現化」が達成できると言えよう。このような概念と用語を用いることによってより効果的に敬語、「敬語表現」における「尊重」の概念を意識させることができるのではないだろうか。

「尊敬」「謙譲」といった述語とそれにともなう概念からくる「敬語表現化」における誤解などを防ぐために、また、「敬語表現化」における「尊重」の意識を明確にするためには、このような敬語の理論的導入における工夫、試みが必要ではないかと考えられる。

4.1.4「敬語表現意識」の問題―「敬語」「敬語表現」の普遍性における認識

本節では、「敬語表現意識」の問題のひとつとして「敬語」や「敬語表現」の普遍性における認識の問題について考える。

敬語、「敬語表現」を難しく考える学習者は多い。また、学習者だけでなく母語話者においても難しいという意見が多いという。それに加えて、敬語、「敬語表現」を日本語における「特殊」な現象として捉えている先行研究および教材も多く、それらが融合し、さらに敬語、「敬語表現」の日本語の使用だけでなく日本語の学習における困難な問題として提示している例も多い。

しかし、日本語の敬語は日本語における「特徴」ではあるが、「敬意」は日本語だけのも

[45] 特に欧米系の外国人。水谷修・水谷信子（1988～1991）は外国人の疑問に答えるといった形をとっているので、本稿においては外国人のことを「学習者」として理解、認識している。学習者という前提で考えている。

のではない（杉山（2003））点は明確なことである。そのような観点から始まったのが近年の（日本語における）ポライトネス研究であるが、「敬語表現化」における意識の問題として考えなければならないのが、「敬意」の問題、つまり、「敬意」を表すための手段としての敬語、「敬語表現」の普遍性の問題である。

「相手」に対する「尊重」の気持ち（「敬意」）は誰でも、どの言語でも存在しているもので、それを表す方法は国や地域によって異なると杉山（2003）は指摘している。したがって、学習者が自分の「敬意」を表そうと、つまり「敬語表現化」しようとした場合、自分の言語（母語）でそれを行うとかえって失礼になる場合がある。たとえば、韓国語を母語にしている学習者は「申し出表現」[46]をする場合、「～シテアゲマショウカ」「～シテサシアゲマショウカ」のような表現を用いることがある。これは意味伝達の面では間違っているとは言えないが、日本語における「敬語表現化」の観点から見ると「恩着せがましさ」を感じざるを得ないため、失礼になる場合、つまり適切な「敬語表現化」が行われたと認定できない場合がある。これは韓国語における「敬意」の伝達方法をそのまま日本語に用いた結果であると思われる[47]。韓国語では、「申し出表現」をする際、「～シテアゲマス（シテアゲル）」を用いるのが一般的である。特に目上の人物に対しては「～シテサシアゲマス（シテサシアゲル）」を用いて表現することによって相手に対する「敬意」を表すことができる。「～シマショウカ（シマス）」を用いた場合は、「無礼」あるいは「無愛想」に捉えられることもある。

このように「尊重の気持ち」、「敬意」を表す方法は学習者の母語によってことなるものであり、母語における方法でそれを行った場合、かえって失礼になる場合もあるが、「尊重の気持ち」や「敬意」を表すといった点においては共通している部分がある。そのような学習者の「尊重の気持ち」や「敬意」の面を考慮せず、言語形式における問題点ばかりを指摘したり、外国人だからそれぐらい大丈夫だといったスタンスで指導を行ったりすると、かえって学習者の「敬語嫌い」「敬語回避」を起こすことにつながることになると思われる。共通している部分、つまり、敬語、「敬語表現」の普遍性を「敬語表現化」における意識と

---

[46] 蒲谷・川口・坂本（1998）。「行動展開表現」のひとつで、「行動」は「自分」が、「決定権」と「利益」は「相手」にある構造を持つ表現で、典型的な表現としては、「～シテアゲマショウカ」「～シマショウカ」などがあるという。

[47] 韓国語は筆者の母語である。筆者のネイティブスピーカーとしての感覚で判断している。

して学習者に意識させることによって学習者の「敬語嫌い」や「敬語回避」を減少させ、「敬語表現化」の必要性における意識を高めることができるのではないだろうか。しかし、韓国語の例で確認した通り、ある程度「敬語表現化」における違い、相違点については明確にしておく必要があると思われる。このような違い、相違点については、「敬語表現化要素」における「敬語知識」として提示することが考えられる。

日本語における敬語、「敬語表現」を「特殊」なもの、難しいものとして提示することを避け、コミュニケーションにおける普遍的なものとして提示、意識させることによってより効果的な指導ができるのではないかと考えられる。

つまり、「敬語表現化」は特殊なものだという印象を与えないために、学習者の母語や生活共同体における「敬意」を表す要素や失礼と認められる行為などについて意識させることによって学習者の「敬語表現化」に対する心理的な距離を縮ませ、「敬語表現化」に対する意識を高めることを目指す必要があると考えられる。

4.2「敬語表現認識」

4.2.1「敬語表現認識」の規定・性質

本節では「敬語表現化要素」のひとつである「敬語表現認識」について論ずる。

「敬語表現認識」は、ある事柄を「敬語表現化」する過程において、主体に（が）かかわる諸状況に対する認識の問題である。「敬語表現化」における「人間関係」「場」「内容」などに対する具体的な認識の問題がこの部分で考えられる。

「敬語表現認識」の問題は、主体の（諸状況における）個別的な、相対的な認識としての性質を持っている。蒲谷（2003）は、「人間関係」と「場」の認識は、個別的なものであって、極めて相対的な、動態的なものであり、常に動く主体の時間的・空間的な位置に対する位置づけとして捉えられるものであると指摘している。さらに細川（2004）は、「人間関係」や「場」などに対する「主体」の認識の問題について、「場面」は、話し手と聞き手の認識によってそれぞれ異なり、決して同じものよはいえないと指摘し、さらに、話し

手と聞き手がつねに共通の「場面」にいると考えるのは、いわば「つくられた幻想」であると述べている。

「人間関係」「場」および主体の諸状況における認識の問題は、このような前提をもとにして考えていかなければならない。ある「主体」の「人間関係」「場」などに対する認識は時間的・空間的・文脈的[48]要素と「主体」の個人的・個別的な、また、相対的な要素によって異なるものである。「敬語表現化」における「人間関係」「場」などの「場面」に対する認識においてもそのような点を前提にしなければならないのである。

しかし、そのような個別的な、相対的な認識のなかでも、主体の認識である「敬語表現認識」には、日本語を使う「社会」「生活共同体」に共通して影響される部分があり、日本語を用いる諸状況のなかでは共通する認識があると思われる。特に、そのような「共通の認識」は「敬語表現」を用いなければいけない場面―「敬語表現化」が要求される「場面」で明確になるのではないかと考えられる。このような考え方は「敬語表現」および「敬語表現化」を社会的な現象として捉えた場合のものであると思われるが、本稿では、このような社会科学的な考え方も視野に入れ、論を進めていくことにする。

また、日本語では主体が「場面」(「人間関係」・「場」)をどのように認識し、それに基づいて、どう表現し、どう理解するかが、特にコミュニケーション上の大きな問題になることが多いと蒲谷(2003)は指摘している。このように「敬語表現化」における状況把握の問題は、「敬語表現化」の問題を考えるのに最も重要な部分で、主体である学習者の「敬語表現」「敬語表現化」における問題点の要因になっているのではないかと思われる。さらに、語・文単位の「敬語」でなく、実際の場面で使用される「文話」単位の「敬語表現」および「敬語表現化」を考える際、「敬語表現化」において適切な「敬語表現認識」を行う、つまり、主体が「敬語表現認識」について適切な判断を下すことは、適切な「敬語表現」の表現と理解に欠かせない重要な部分であると言えよう。

[48] 時間の流れによる経緯のことを「文脈」という述語を用いて表した。

4.2.2「敬語表現認識」の問題―「人間関係」に対する認識

本節では「敬語表現認識」の問題におけるひとつの項目として「人間関係」について論ずる。

「敬語表現認識」における「人間関係」の問題であるが、「人間関係」を認識するには大きくわけて次の三つの軸を中心に考える必要があると思われる。

まず、「上下関係」の問題である。

「人間関係」における「上下」、つまり「人間関係」上の上位・下位に対する認識の問題は、今までの「敬語」（あるいは「敬語表現」）指導における主な指標であった。「上下関係」に対する認識は「敬語」「敬語表現」の根本的な存在理由および機能に関係する重要な項目であると言えよう。

「上下」に対する認識の問題は、客観的な認識、主観的な認識の両面があると思われる。客観的な認識は「誰が見ても（認識しても）」明確な「人間関係」に対する認識も問題で、たとえば、「教師と生徒」「上司と部下」などが考えられる。「上下」における客観的な認識には、主体が属する「生活共同体」における決まりやルールなどが働いており、比較的に明確であると思われる。一方、主観的な認識は、主体の個人が認識する「上下関係」のことで、個人的な認識が大きく働いている面があると思われる。主観的な「上下関係」の場合は、現在までの経緯や「親疎関係」などの様々な個別性の問題が絡んでいるため、一律に類型化することは極めて困難であると思われる。

次は、「親疎関係」の問題であるが、この「親疎」という軸も「上下」と同様、「敬語」（「敬語表現」）を考える際、重要な位置を占めている。しかし、「親」と「疎」に対する認識は比較的個人的な判断に左右される場合が多く、また、主体同士の認識が一致しない場合も多い。そのような実態の把握が困難なため、指導であまり扱われないこともあったが、「敬語表現化」および「敬語表現」の使用には、「上下関係」における認識だけでなく、「親疎関係」における認識も必要であると思われる。「親」の関係については、学習者が自らそれを認識し、その認識を「敬語表現化」に反映させる、つまり、かしこまった「敬語表現化」を避ける場合もあるが、「疎」の関係における認識は不足し、適切な「敬語表現化」が

行われない場合もあるため、「敬語表現」教育における「親疎」の認識の項目では、「疎」の関係における認識の問題について考える必要があるのではないだろうかと思う。

「上下関係」に対する認識では、「客観的な認識」と「主観的な認識」の両面があって、「敬語表現化」の際、「主体」はその二つの面を同時に考慮しなければならないが、この「親疎」の関係に対する認識の問題には、いわゆる「主観的な認識」の面や「文脈における認識」の面が大きく作用していると思われる。

「相手」との「人間関係」が「親」か「疎」かを判断する（あるいは、認識する）には、その「相手」との今までの経緯である「文脈」だけでなく、その「相手」に対する「自分」（「表現主体」）の感情的な面―「気持ち」と「相手」の「自分」（「表現主体」）に対する「気持ち」を「自分」がどのように認識しているかを基準としなければならないのである。しかし、そのような「文脈」「気持ち」などは個人的且つ個別的なものであり、それらを明確にすることは困難である。「親疎関係」における「認識」の問題の記述を困難にするのは、このような要因が絡んでいるからだと思われるが、実際の指導においては「親疎関係」における個人的且つ個別的な面を踏まえた上で、「敬語表現化」における「主体」である学習者には、「敬語表現化」のためのひとつのファクターとして提示する必要があるのではないかと考えられる。

最後に、今までは全面的には扱われることが少なかった項目だが、「役割・立場関係」における認識の問題である。日本語を用いる生活共同体における一員―サラリーマン、教員、通訳者としての学習者―としての役割と立場に関する認識の問題である。各「役割・立場」における日本語の使用は異なる部分があり、さらに、日本語を用いる生活共同体では、その「役割・立場」に合った認識、および日本語の表現・理解が要求される。近年の日本語教育における学習者のニーズは様々であるが、学習の目標が日本語を用いる生活共同体の一員としての活動にある場合、「役割・立場関係」における認識は欠かせないものであると言えよう。

以上のように「敬語表現化」における「人間関係」について認識する際は、「上下」だけでなく、「上下」「親疎」「立場・役割」の三つの軸を中心に考えていく必要があり、それを学習者が認識するように指導を行う必要があると思われる。

次は、実際の教室活動への適用について論ずる。

上で述べた通り、「人間関係」に対する認識は、日本語を用いる生活共同体のルールなどによって明確になる場合もあるが、個人の認識、また、コミュニケーションにおける主体同士の今までの経緯（「文脈」）によって「築かれた人間関係」における認識も影響しているため、「人間関係」を一律に類型化し、それを学習者に提示することは極めて困難であろう。しかし、個別の「場面」を提示し、その「場面」における「人間関係」を教師が任意に設定し、それに沿った「敬語表現化」を導入・指導することは可能であると思われる。たとえば、「敬語表現」の練習のためのロールプレイを実施する場合、各自の役割が書かれたロールカードに「相手」との「人間関係」について「上下」「親疎」「立場・役割」の 3 項目を中心に具体的に設定、提示することによって、「敬語表現化」における「人間関係」について意識化させることがより容易になるのではないだろうか。無理な設定や「型にはまった人間関係」を押し付けるのではなく、「敬語表現化」における「人間関係」を考える際のひとつのファクターとして提示する必要があると考えられる。

4.2.3「敬語表現認識」の問題―「場」に対する認識

本節では「敬語表現認識」における「場」に対する認識の問題について論ずる。

「場」における「敬語表現認識」の問題では、まず、「改まり・くだけ」における認識の問題が考えられる。これは、学習者が関わる「場」が「改まった、公的な場」なのか、「くだけた、私的な場」なのかという問題に関する認識の問題であり、「改まり・くだけ」は、「場」を認識するキーワードとして働く有効な項目であると言えよう。

さらに「敬語表現認識」における「場」における認識の部分では、「あらたまり・くだけ」に加えて、「時空」という軸を加えて考える必要があると思われる。

「場」における「時間的」な認識の問題であるが、物理的な時間とその「場」に関わる主体同士の今までの経緯のことについて認識する必要があると思われる。「場」における物理的な時間の認識の例としては、現在は何時何分なのかに対する認識の問題や事務所における勤務時間、時間における訪問先の都合などに対する認識などがあげられる。

物理的な時間に対する認識の問題が、「場」における時間の横断的な認識であるとする

と、その「場」に関わる主体同士の経緯（時間）に対する認識の問題は、「場」における時間の縦断的な認識であると言えよう。これは、その「場」で今までどのような経緯を経てきたのか、これからどのような経緯を辿っていくのかに対する認識の問題である[49]。

次は「場」における「空間的」な認識であるが、これは「場所」としての「場」に対する認識の問題である。「敬語表現」を行う「場所」はどのようなところなのか、たとえば、会議室なのか、居酒屋なのかなどに関する認識がこの部分に属すると言えよう。

「敬語表現化」における「場」の認識の際は、「改まり・くだけ」と「時空」といった二つの軸を中心に考えていく必要があり、それを学習者が認識するように指導を行う必要があるのではないだろうか。

4.2.4「敬語表現認識」の問題―「題材・内容」に対する認識

本節では、「敬語表現認識」の問題のひとつとして考えられる「題材・内容」の問題について論ずる。

蒲谷・川口・坂本（1998）によると、「題材」は「表現主体」は「何について」表現するかということであり、「敬語表現」との関わりで言うと、「相手」に対する配慮から、表現することが好ましい「題材」とそうでないものがある、ということなどが問題になるとしている。さらに「内容」については、「内容」というのは「表現主体」が「何を」表現するかということであり、「敬語表現」との関わりで言うと「題材」と同様に「相手」に対する配慮から、表現することが好ましい「内容」とそうでないものがある、ということなどが問題になると指摘している。

上記のような規定をもとに考えると、主体の配慮による「何について、何を」ということが「題材」「内容」に関する問題になると思われる。それらは、コミュニケーションにおける主体による配慮という点で共通しており、また、「敬語表現」を行う、「敬語表現化」を行うといった一連の過程における内容の点で共通していると考えられる。したがって、

49　経緯のことは「文脈」という用語で表している。

「題材」と「内容」をひとつにまとめて、「題材・内容」として「敬語表現認識」におけるひとつの指標として設定した。何を「敬語表現化」にするかに対する認識、何を「敬語表現化」にしたいかという積極的な意識の両方に関わる問題であると考えられる。

4.2.5「敬語表現認識」の問題―ストラテジーに対する認識

ストラテジーにおける「敬語表現認識」の問題については、学習者の身の回りの諸状況における認識だけでなく、「どのようなやり方」で「敬語表現化」を行うのかという点―「敬語表現化」におけるストラテジーについても考える必要があると思われる。1.問題提起の節で述べているが、「敬語表現化」は語句を機械的に敬語にするのではなく、主体の諸状況に対して認識しなければいけない。そのためには「敬語表現化」におけるストラテジーにおける認識も必要であると思われる。たとえば、「敬語表現化」を行う際には、単なる語句の敬語化だけでなく、「回避」や「省略」などの「敬語表現化」におけるストラテジーがあり、それについて認識する必要があるということについて指導を行う必要があると思われる。

学習者の「敬語表現化」におけるストラテジーを考える際、参考になるのが、日本語母語話者の敬語使用や敬語意識の実態の問題である。日本語母語話者の敬語使用や敬語意識の実態については国立国語研究所によって行われた各種の大規模な研究が代表的なものであるが、その他に、田中（1969)、吉沢（1973)、ＮＨＫ（1980）などもある。本節ではすこし古い実態調査の結果報告であるが、学習者の「敬語表現化」におけるストラテジーを考える際、参考になるものを「敬語教育の基本問題（下)」(窪田（1992)）の内容をもとにまとめておく。

国立国語研究所では、1952 年から 1953 年にかけて三重県上野市と愛知県岡崎市で、敬語行動と敬語意識についてくわしい実態調査を行い、その調査結果を「敬語と敬語意識」（1957）で、次の 25 項目にまとめている。

１）否定的要素を含む敬語形式（たとえば、「イタダケマセンカ」とか「クレンカ」など）は、発話全体として、否定的要素を含まない敬語形式（たとえば、「イタダケマスカ」とか「クレ」など）よりは一般的に丁寧と意識（認識）されている。

2)特定の敬語形式が個人によっていつも好んで使われるということはなさそうである。たとえば、ある人は否定的要素を含む敬語形式をいつも使う、などとはいえないようである。

3）長い発話ほど丁寧な敬語行動であると一般に認識されている。

4）同じく、方言形式を含む発話は、そうでない発話よりもらんぼうであると一般に意識（認識）されている。

5）ある部分に漢語を使う発話の方が、漢語を使わないそれよりも丁寧であると意識（認識）されている。

6）心理的に弱い立場に立つとき（ものを頼むとき、恩恵を受けた場合など）敬語行動は丁寧になり、その逆の場合（すなわち、相手がまちがっている場合や相手に恩恵を施す場合）は比較的にらんぼうになる。

7）この場面ではこの程度の丁寧さで敬語行動をすべきであるという意識（認識）と、実際の敬語行動の丁寧さとは必ずしも一致しない。

8）知っている人への敬語行動より知らない人への敬語行動の方が丁寧である。

9）同じ事態をあらわす敬語行動が相手によって変る変りぐあいは、平均して3通りである。地域的には、東から西へと移るに従って使い分けが細かくなる。

10）敬語行動の場合、性別が社会的要因のなかでもっとも大きい。年齢は敬語行動を規定する要因としてもっともきいていない。

11）男の方が場面によってよく使い分けるが、女の方はいつも丁寧な敬語形式を使い、場面によって使い分けない傾向がある。

12）敬語形式についての知識は学歴によってもっとも強く左右される。性別によってはほとんど左右されない。

13）敬語についての意見は年齢で大きく開く

14）一般に、丁寧な敬語形式を好む。

15）方言形式を含んだ敬語行動は自らも好まないし、また他人から受けることも好まない。

16）一般に丁寧な敬語行動を支持するものは、実際にも敬語行動は丁寧である。

17）女は男に対して、若い人は老人に対して、下層の人は上層の人に対してそれぞれ丁寧に言うべきであると意識（認識、あるいは、期待）している。

18）その場合、話し手と聞き手との間の敬語行動をもっとも強く規定するのは階層であ

るべきであると一般に考えられている。

19）敬語行動に対する判断（敬語意識）では、性の要因はきかない。

20）官庁や会社など事務所で、部外の人に対して、部内の上長について言うとき、丁寧な敬語形式を使うべきではないという「これからの敬語」の基準は一般にはかなりの心理的抵抗を感じさせるものらしい。

21）いわゆる「丁寧語」の「お」のつけ過ぎは、抽象的に意見を述べる時はともかく、実際の対話を聞くときは、それほど抵抗感を感じない。

22）自分の親族について言うとき、実際の敬語行動では相当丁寧な敬語形式を使うにもかかわらず、あまり丁寧な敬語形式は使うべきではないという意識は強い。

23）一般に若い人の敬語行動については寛大である。

24）自分は丁寧な行動をしているつもりだと答えるものは、敬語行動でも丁寧な敬語形式を使う傾向がある。

25）rigid なパーソナリティのものは敬語の使い分けが下手な傾向がある。

以上で指摘されている項目は、「敬語表現化」を含む敬語教育のいずれかの段階で学習者が認識しなければならないものが多い。しかし、今まで述べた通り、「敬語表現化」は個人のイデオロギーと深く結びついており、ある程度個別性が認められる部分がある。したがって、敬語教育においての「敬語表現化」のストラテジーの認識やストラテジーの使用について指導する際は、教師の主観的な判断だけによる指導の危険性について忘れてはならない。しかし、あえて「敬語表現化」におけるストラテジーに関係する項目について考えてみると、1）の否定的要素の使用、2）の敬語形式使用におけるバランスの問題、3・15）の「敬語表現化」における方言の不使用、5）の漢語の使用、8）の「親疎関係」における「疎」への対応、10・11・12）の性別の問題、17）「人間関係」における「敬語表現化」の期待度、20・22）「内外関係」における「外」への対応、21）敬語接頭辞「オ・ゴ」の使用（特に過剰使用の問題）などがあげられる。

上記で指摘した「敬語表現化」におけるストラテジーの問題では、個別性の問題や指導の問題以外にも、時間による「敬語意識」の変化のことである。同じストラテジーでも時間の変化によって主体の認識が変る場合があるということについて学習者、教師ともに理解しなければならないと思われる。しかし、敬語に対する認識およびストラテジーは、敬

語そのものの存在理由や意義に関わる問題なので、20 年ぐらいの「短い時間」ではそれほど変ることはないと予測される。

それに対して、国立国語研究所では、上記調査の 20 年後の 1972 年にほぼ同じ調査を同じ場所で行い、20 年前の実態と対比している。その調査結果は、国立国語研究所「敬語と敬語意識―岡崎における 20 年前との対比―」（1983）として発表している、以下に変化の比較のなかで、知っておきたい項目について窪田（1992）の指摘をもとにまとめてみた。

1）敬語の使い方については、この 20 年間に大きな変化はなかった。大筋としては変っていないことになる。

2）近頃敬語をあまり使わなくなった。あるいは、近頃どうもことばがらんぼうになった、というような印象を人が語るのをよく聞くが、全体としての丁寧さにはさほどの違いは見られない。一方、丁寧な言語形式の使用率が減ったことも事実である。

3）全体としての丁寧さには大きな違いは見られないとしても、細かく見ると、この 20 年間に、丁寧な場面ではより丁寧に、らんぼうな場面ではよりらんぼうに、という傾向があり、この点では敬語の使い方は上手になったといえるだろう。

4）一般に若い人の敬語の使い方は非難されることが多いが、敬語の丁寧さと関係のある社会的な要因（属性）では年齢はあまり関係が強くないことは、20 年前と同様である。敬語の丁寧さの度合いに影響を及ぼすものとしては性が第一にあげられる。

5）20 年間に進歩したものとしては、敬語の使い方についての常識が広まったことが上げられる。たとえば、自分の身内についてどう表現するか、というようなことでは著しく進んだといえる。

6）接頭辞の「お」や、丁寧語の「ます」のようなものを敬語と考える人が 20 年間に減ってきたことがはっきりした。この点で一般人の敬語意識は変ってきた、といえるだろう。

以上のような母語話者の「敬語」「敬語表現」に関する意識について考えることによって「敬語表現認識」におけるストラテジーの問題に近づくことができるのではないかと考えられる。

4.3「敬語知識」

4.3.1「敬語知識」の規定・性質

本節では「敬語表現化要素」のひとつである「敬語知識」について論ずる。

「敬語知識」は、ある事柄を「敬語表現化」する過程に必要な「敬語」「敬語表現」に関する知識、情報の問題である。言語的なバリエーションの問題、適切な表現の問題や文法の正誤の問題などがこの部分に属していると思われる。今までの「敬語」「敬語表現」の指導、学習において最も重要視された部分で、「敬語表現化要素」においても再考の必要がある部分であると思われる[50]。

例としては、目上の人である自分の指導教授に対する呼称としては「先生」「○○先生」などがある、「考え」「意見」の敬語としては、尊重の接頭辞である「オ・ゴ」を用いた「ご意見」「お考え」などがある、といった言語的な情報の部分が「敬語知識」の項目に属していると思われる。

「敬語形式・表現形式」の問題については、今まで多数の先行研究があり、「語・語彙における敬語」の性質に関する研究は成果をあげている。そのような研究の成果と影響で、敬語の指導・学習も語・語彙レベルの導入、指導が中心となり、成果をあげていると言える。しかし、このような指導や研究における問題点―実際のコミュニケーションにおける使用の問題や運用などの面における認識の不足を指摘した研究も行われており、そのなかでは、「敬語形式・表現形式」レベルの研究、指導について否定的な立場をとるものもある。しかし、かならずしも「敬語形式・表現形式」の研究、指導に問題点があり、実際の使用とはかけ離れているとは言えない部分がある。蒲谷（2003）は、「何らかの「表現形式」

---

50 「敬語表現知識」といった用語でなく「敬語知識」を用いたのは、「敬語表現知識」の用語から考えた場合、「敬語表現」に関する「知識」の問題は、4.3「敬語知識」で主な考察対象としている「敬語」に関する知識・情報の問題ではなく、「敬語表現」に関する知識の問題になり、「敬語表現」に対してどのような知識・情報を持つ（考える）必要があるのか、といった点にそのポイントが当てられてしまう。したがって、「敬語表現化」のための「敬語」に関する知識・情報のことについて考えるという意味で「敬語知識」という用語を設定した。「敬語表現知識」の問題については、4.2「敬語表現認識」の部分に入れて考えることにした。

なくしてコミュニケーションは成り立たないこと（は)、明らかであり、「表現形式」を捉えること事態を（それほど）否定的に捉える必要はない」と指摘している。「敬語形式・表現形式」における知識・情報をもとに、適切な「敬語表現」を構成する―「敬語表現化」を行うことは、主体の「敬語表現」「敬語表現化」における「意図」、概念の適切な具現化と密接な関係があると言えよう。

「敬語表現化要素」における「敬語知識」の部分では、今までの研究成果を踏まえた上で、さらに考察・分析の必要があると思われる項目を中心に見ていくことにしたい。

以下では待遇表現教育への適用から考えた「敬語知識」の問題についていくつかの例をあげて考えていく。

4.3.2「敬語知識」の問題―「丁重語」とその周辺

本節では「敬語知識」としての「丁重語」とその周辺の問題について論ずる。

「敬語知識」における「イラッシャル」「モウシアゲル」などの「直接尊重語」「間接尊重語」[51]に対する指導は今まで十分に行われたが、「丁重語」や「丁重文体」などの「敬語知識」については、指導が不足している部分があると思われる。しかし、「丁重語」や「丁重文体」などの「文話」に「丁重さ」「丁寧さ」を与える「敬語形式」は、「敬語表現化」における様々な機能を持っており、検討する必要があると思われる。

以下は、待遇表現教育の観点から見た「丁重語」とその周辺の性質である。

動作の主体を高くしないでという性質と「改まり」という性質を持つ「丁重語」は、典型的な表現として「オリマス（オル)」「マイリマス（マイル)」などがあげられる。ただし、これらの「丁重語」は、実際の「文話」の場合、「マス」の形で使われることが多いので、「マス」の形で導入する必要があると思われる。

[51] 蒲谷・川口・坂本（1998）による分類。「尊敬語」「謙譲語」にあたる。

「丁重語」と一緒に考えなければいけないのが「丁重語彙」である。本日（「今日」に対する「丁重語彙」。以下同様。）、こちら（ここ）、ただいま（すぐ）などがその例である。このような「丁重語彙」は「丁重語」と共起し、「文話」に現れる場合が多いので、「丁重語」と一緒に導入する必要があると思われる。

さらに「丁重文体」の問題であるが、「丁重文体」の「デアリマス」「デゴザイマス」の使用は、「文話」全体を丁重にする機能があると、蒲谷・川口・坂本（1998）は指摘している。

このような「丁重語」とその周辺の「丁重語彙」「丁重文体」は、まず、「文体」を変えることによって「文話」全体を「丁寧に」すること、つまり、「敬語表現化」することができる性質を持っている。また、「場」に対する「丁寧さ」を表すことで「敬語表現化」が容易になるという性質があり、さらに、「デス・デアル」体に対し、置き換えだけで「敬語表現化」ができる、といった「敬語表現化」における「敬語知識」としての意義がある。「文体」について、川口（2002b）は、「文体」は日本語の待遇表現を語る時、もっとも根本的な部分であると指摘している。

「丁重語」や「丁重語彙」と共起する「丁重文体」を用いて「敬語表現化」を行うことによって「敬語表現」に「丁重」な印象を与えることができるという「敬語知識」を「敬語表現化」の一つの指標として考える必要があると思われる。

4.3.3「敬語知識」の問題―「オ・ゴ～ダ」とその周辺[52]

本節では、「相手」を高くする「直接尊重語」形式である「オ・ゴ～ダ」の「敬語知識」における問題について論ずる[53]。

---

[52] 金（2004）

[53] 本節で論ずる「オ・ゴ～ダ」の問題については、第Ⅱ章の２.「敬語表現化」から見た表現行為における問題―「手紙文」「スピーチ」から見た敬語接頭辞「お・ご」を用いた「敬語表現」の使用様相に関する分析・考察の部分でさらに詳しく見ていく。

名詞に「オ・ゴ」を付けて「直接尊重表現」を作るのは、「相手」に属する物事に「オ・ゴ」を付けてその「相手」に対する「尊重」の意識を表現するという性質に適った「敬語表現化」の方式のひとつである。そのなかで、本稿における「敬語知識」において注目しているのは、「動詞の連用形―名詞化させた表現」に「オ・ゴ」を付けた「直接尊重表現」―「オ・ゴ～ダ」形式―を用いた敬語形式や動作・行為・状態を動詞系でなく名詞系で表し、それに「オ・ゴ」を付けた「直接尊重表現」が「敬語表現化」における「敬語知識」として働いている部分である。

「オ・ゴ～ダ」の「～」には動詞の連用形[54]が入り、その動詞が和語か漢語か、あるいは（言語的な）習慣によって、接頭辞として「オ」か「ゴ」が選択される。「オ・ゴ～ダ」形式は「敬語表現化」において幅広い使用を見せている。以下、その使用について確認する。【表１】は、「手紙文文例集」「スピーチ用例集」[55]からの用例である。共通する用例の一部を表としてまとめた。

---

[54] 名詞的な性質を持っていると思われる。金（2004）

[55] 金（2003、2004）。市販の「手紙文文例集」と「スピーチ用例集」をテキストとして使用した。テキストのリストは参考文献に記述した。「手紙文」と「スピーチ」については次のように規定している。

本稿においては「手紙文」のことを、一定の書式（たとえば、前文、本文、末文、後付、副文で構成されて、前文には起首、時候の挨拶、安否の挨拶などを入れ、末文には結びの挨拶、結語などを入れてはじめて完成されるという書式）によって書かれた「文章」だけでなく、特別な形式のない略式の手紙、はがきやメモなども含めて考える。コミュニケーションのために（一定の「表現意図」を叶えるために）一定の「相手」に向かって書かれたものとして考える。

「スピーチ」は一定の形式に従って行われる「談話」だけでなく一定の形式がなくても式辞、祝辞、冠婚葬祭や各種の集会でのあいさつなど、「改まった場」において、コミュニケーションのために（「表現意図」を叶えるために）一定の「相手」に向かって発せられたものとして考える。また、「スピーチ」は「手紙文」と違って「音」「音声」をその「表現形態」としているが、本稿においては、「音」「音声」の働きや影響について考察するのではなく、「スピーチ」における「敬語表現」を主な考察対象としているため、音声化する前の段階である「スピーチ」の原稿を研究対象とする。

「手紙文文例集」は「手紙文」を集めたもの、「スピーチ用例集」は「スピーチ」を集めたものであり、「手紙文」と「スピーチ」における模範・見本としての意味を持っていると思われる。さらに、「媒体」の性質上、「敬語表現化」の必要性が高く、「敬語表現」が頻繁に用いられるという特徴があると思われる。

「手紙文文例集」と「スピーチ用例集」については。第Ⅱ章の２.「敬語表現化」から見た表現行為における問題―「手紙文」「スピーチ」から見た敬語接頭辞「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」の使用様相に関する分析・考察の部分でさらに詳しくみていく。

【表１】「オ・ゴ～ダ」の「手紙文文例集」「スピーチ用例集」からの使用例

表現 （「敬語表現」）	「手紙文文例集」からの用例	「スピーチ用例集」からの用例
「お誘い」	先般はゴルフのお誘いをお受けしな がら、家業におわれてご辞退申し上げ、失礼しました。（「そのまま」、ｐ172）	エクスサイズのあとのビールのお誘いもお忘れなく。（「新郎」、p74）
「お持ち」	名古屋支店は、卓抜した行動力と的確な判断力をお持ちの山岡様には、最適の職場かと存じます。（「そのまま」、ｐ96）	山下君は辛抱強い研究者である同時に、統率力にも非凡な資質をお持ちでした。（「式辞」、p275）
「お住まい」	以前、ご友人がペナンにお住まいと伺いましたが、その方をご紹介していただけませんか。（「CD」、ｐ255）	より暮らしやすい環境の団地に、またお住まいの皆様方々の親睦がいま以上に深まるよう、微力ながらも精一杯努力をいたします。（「あいさつ」、p264）
「お許し」 （「おゆるし」）	どうぞ万事おゆるしのうえ、本年も旧に倍してご好誼のほど、ひたすらお願い申し上げます。（「実用」、ｐ28）	どうかお許しを願います。（「あいさつ」、p218）
「おあり」	いずれ、当地の△△デパートで個展を開かれる予定もおありとのこと。（「そのまま」、ｐ102）	皆さんにも、それぞれの懐かしい思い出がおありだと思います。（「式辞」、p533）
「お忘れ」 （「おわすれ」）	もしやおわすれではないかと存じ、ご通知申し上げます。（「あいさつ」、ｐ503）	エクスサイズのあとのビールのお誘いもお忘れなく。（「新郎」、p74）
「お越し」 「おいで」	なお、左記の住所に新居を構えましたので、お近くへお越しの節はぜひ	本日お越しの吉田先生のおかげです。（「大事典」、p74）

	お立ちよりください。(「CD」、p146) こちらにおいでの節はお立ち寄りくださいませ。(「実用」、p30)	故人も、皆さまのおいでをさぞかし喜んでいることと存じます。(「葬儀」、p30)
「お勤め」 (「おつとめ」)	つきましては、伯父様がお勤めのFテレビに就職ができたらと思い、採用試験に加わっていただきたく、お願い申し上げる次第です。(「あいさつ」、p487)	園部さつきさんは、外資系のB株式会社に通訳としてお勤めでいらっしゃいます。(「あいさつ」、p182)
「お力添え」	これも、ひとえに部長はじめ職場の皆様のお力添えがあったからこそと、深く感謝いたしております。(「お礼」、p118)	皆さまには、生前賜りましたお力添えとご厚誼にあらためて感謝いたします。(「葬儀」、p34)
「お喜び」	お兄さんもお義姉さんも、さぞお喜びのことでしょう。(「そのまま」、p93)	ご主人もさぞお喜びのことと思います。(「式辞」、pp187－188)

【表１】について考える。

「相手」の動作・状態を表現する際、動詞を用いた「敬語表現化」しない。つまり、動詞に「オ・ゴ」を付けた「オ・ゴ―ニナル」「オ・ゴ―クダサル」などの形式を使うのではなく、その動作・状態を表現する動詞の連用形を用いて、名詞化させ、あるいは名詞で表現して、それに「オ・ゴ」を付けた形で「敬語表現化」を行う例を【表1】 で表している。

【表１】の用例で確認できるが、「誘ウ」の場合、「お誘いくださる」や「お誘いいただく」などのような動詞をそのまま「敬語化」するのではなく、「お誘い」を用いて「敬語化」を行っている。「誘ウ」に「オ」を付けて「敬語化」することによって、「相手」の「誘い」ということを表し、さらに、その「誘い」は「自分」が尊重する「相手」の「行動」―「誘い」である点を表している。

同様の観点から考えると、「お持ち」は「持っていらっしゃる」、「お住まい」は「住んでいらっしゃる、生活していらっしゃる」、「おあり」は「いらっしゃる（ある）」、「お越し、おいで」は「いらっしゃる（来る）」、「お勤め」は「勤めていらっしゃる」、「お力添え」は

「お力添えくださる」などの代わりに使われていると見られる。

ただし、このような「敬語化」の方式は、全ての「手紙文」「スピーチ」において使われているのでもなく、全ての「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」に使われているのでもない。しかし、「手紙文」「スピーチ」においての「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」の一部として、「敬語表現化」における一つの工夫として使われているのである。

さらに、このような「オ・ゴ～ダ」を用いた「敬語化」は「手紙文文例集」「スピーチ用例集」だけでなく、実際の「敬語表現化」においても幅広く使われている。次は実際の宣伝物[56]における「オ・ゴ～ダ」の使用である。

例文１）インタネットバンキング　24 時間お好きな時に銀行取引。　お手持ちのパソコンがいつでもあなたの銀行窓口になります。（M 銀行サービス説明書）

例文２）現在の日本に数多く存在するそんな企業を知る術を、学生の皆さんはお持ちですか？（M ネット就職サイト）

例文３）お申し込みは、個人の国内居住者の方に限ります。（屋号付きの口座など事業用としてお使いの口座や、団体名の口座等ではお申し込みいただけません。）（M 銀行サービス申込書）

「敬語表現化」における「敬語知識」としての意味、意義について考えてみた。

「敬語表現化」における意識として、「尊重」すべき人物に関しての物事・動作・状態などに対しては、それを直接的に―動詞を用いた動作・行動・状態の「描写」で―表現するのでなく、間接的に―動詞の連用形、名詞化した形で、あるいは名詞で―表現するのが「丁寧」であるという意識が働いているのではないだろうか[57]。白（1996）によると、「一般的に上位者に関する行為を叙述するには、直接的な表現より間接的で迂回した表現をする必要がある。」としている[58]。その「迂回的な表現」[59]の一つとして、「尊重」する「相手」の

---

[56] 公共機関、企業などによる宣伝や情報提供を目的とする諸「文章表現」を宣伝物として規定する。

[57] 本稿においては「比較的」間接的であると認識している。

[58] 白の他にも、窪田・池尾（1971）、大石・林（2000）による同様の指摘がある。

[59] 筆者による表現である。

動作・行為・状態を、そのまま動詞―「オ・ゴ」を用いた「オ・ゴ―ニナル」などの動詞の「敬語化」で表現するのでなく、「迂回的に」それを名詞化（連用形を用いることによって名詞化）したり、あるいは、名詞にしたりして「敬語化」を行うのではないかと考えられる。

つまり、「オ・ゴ～ダ」を用いた「敬語化」には、「相手」の動作・行動および状態は「―する（動作、動詞）」ではなく、「相手」自身が動いてから展開されるのでなく、「相手」が「動いてなくても、動かなくても」そうなっているという待遇に関しての配慮を表そうとする意識が働いているのではないだろうか。「相手」を「尊重する」「高くする」ということは、「相手」の持っている能力・力などを拡大して表現するという「敬語化」の根本的な性質や配慮の表し方の面から考えると、動詞を使わずに、動詞の連用形―名詞化した表現、あるいは名詞に「オ・ゴ」を付けた表現の使用の一部が説明できるようになるのであろう。

また、「オ・ゴ～ダ」を用いた敬語形式は、「オ・ゴ～ニナル」「オ・ゴ～クダサル」などの「敬語形式」に比べ、比較的使用制限の少ない簡潔な形式である、他の複雑な敬語形式より誤用の危険性が少ない[60]、比較的敬度の高い「オ・ゴ」の使用で「丁寧さ」を確保している[61]、他の複雑な敬語形式に比べ、すっきりした、洗練された感覚がある[62]、といった「敬語表現化」における「敬語知識」としての意義がある。「敬語表現化」のための「敬語知識」のひとつであると考えられる。

次は、「オ・ゴ～ダ」の周辺の問題について確認したいと思うが、「オ・ゴ～ダ」の形式を用いた「敬語化」「敬語表現化」の範囲を広く捉えると、上記の通り、動詞で表現できる事柄（「題材・内容」）に対して、「オ・ゴ名詞[63]」の形で「敬語化」を行っている例も確認できる。

以下の用例は、「手紙文文例集」「スピーチ用例集」からのものである。

【「手紙文文例集」】

例文４）次回ご来店の際にお持ちいただきますと、謝礼といたしまして、千円相当の当

---

60 菊地（1994）金（2003）
61 辻村（1992）
62 林（1999）
63 特に漢語名詞。動作性（動詞性）を持つ漢語である。

店商品券とお引き換えいたしますので、どうぞよろしくお願い申しあげます。(「CD」、ｐ265)

例文５）つきましては、安全な指導と健康管理のため、お子さまの心身状態を伺う調査票のご記入をお願い申しあげます。(「CD」、ｐ267)

例文６）急場のお役に立てず、ふがいな兄だと思うでしょうが、どうか悪しからずご容赦をお願いいたします。(「あいさつ」、ｐ517)

例文７）日ごろは、当会の活動にご理解ご協力を賜り、まことにありがとうございます。(「あいさつ」、ｐ476)

例文８）今後ともよろしくご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。(「お礼」、ｐ62)

【「スピーチ用例集」】

例文９）皆さまのご来店をお持ちしております。(「式辞」、p445)

例文 10）ご承知のように、営業部では毎年、部としての目標のほか、各自がその年の目標を自己申告することになっています。(「式辞」p341)

例文 11）皆さま方のかわらぬご指導、ご厚誼を心からお願い申し上げます。(「あいさつ」、p343)

例文 12）本日はご出席、ありがとうございました。(「新郎」、p215)

例文 13）保護者の皆さまのご支援もよろしくお願いいたします。(「大事典」、p125)

「オ・ゴ～ダ」の場合と同様に考えると、例えば、「ご容赦」の場合、「ご容赦くださる」「ご容赦いただく」あるいは「お許しくださる」「お許しいただく」のような動詞の概念を残した「敬語化」ではなく、「容赦」という名詞に「ゴ」を付けた「ご容赦」で「敬語化」を行っていることが確認できる。「ご容赦」という表現を用いることによって、その「容赦（許し）」は「自分」が尊重する「相手」からの「容赦」でるということを表し、「敬語化」を達成しているのである。

「ご来店」は「店にいらっしゃる」「店に来てくださる」、「ご理解」は「ご理解くださる」「理解してくださる」、「ご承知」は「知っていらっしゃる」、「ご指導」は「ご指導くださる」「指導してくださる」、「ご出席」は「出席してくださる」「出席していただく」などの代わりに使われていると言えよう。

「オ・ゴ名詞」の「敬語化」も上記で確認した「オ・ゴ～ダ」の「敬語知識」としての意味を持っているが、その他にも、「文章」における「敬語表現化」の全体の構成の面を考慮し、「敬語表現」における質的・量的バランスを取るといった「敬語表現化」における意義があると考えられる。同じ表現形式の多用をさけるためのひとつの方略（「ストラテジー」）として使用される側面が考えられる。

4.3.4「敬語知識」の問題―「オ・ゴ～ニナル」と「レル・ラレル」の使用

本節では、「直接尊重」（いわゆる「尊敬」）の「敬語化」形式である「オ・ゴ～ニナル」と「レル・ラレル」の「敬語知識」における問題について論ずる。複雑な使用の制約を持つ「オ・ゴ～ニナル」の複雑な使用の制約について確認し、同じ「直接尊重」の「敬語化」形式である「レル・ラレル」との関係や「敬語表現化」における意義について分析、考察する。また、「敬語表現化」における問題だけでなく「敬語化」教育、および、「敬語表現化」教育の問題についても考察する。

4.3.4.1「オ・ゴ～ニナル」の性質と使用の制約

「オ・ゴ～ニナル」は「直接尊重」の「敬語化」形式である。「～」には「敬語化」の対象になる動詞の連用形が入り、「相手」の行動・状態などについて「敬語化」を行う性質を持っている。

しかし、「オ・ゴ～ニナル」は使用における様々な制約があり、「敬語表現化」における情報として、また「敬語表現化」における「敬語知識」として、把握しておかなければならないと思われる。次は、菊地（1994）と金（2003）をもとにまとめた「オ・ゴ～ニナル」の使用における制約である。

制約１）「～」部分に入る動詞の連用形の名詞性が乏しい場合は、「オ・ゴ～ニナル」形式は不自然になりやすい。

松尾（1944）は「オ・ゴ～ニナル」を「オ＋動詞性名詞＋ニナル」で分析している。こ

のような観点から考えると、「通常語」の動詞の「動詞性名詞（連用形）」の名詞性が高いと見とめられる場合は、「オ・ゴ～ニナル」の形式が「敬語化」において成立する可能性が高くなると思われる。

例）可能な例

書ク　→　書キ　→　お書きになる

帰ル　→　帰リ　→　お帰りになる

払ウ　→　払イ　→　お払いになる

向カウ　→　向カイ　→　お向かいになる

求メル　→　求メ　→　お求めになる

例）不可能な例

言ウ　→　？言イ[64]　→　＊お言いになる[65]

制約２）「～」部分、つまり、動詞の連用形が１音節の場合、一般的に「オ・ゴ～ニナル」は使えない。

例）スル　→　＊おしになる　→　なさる／される

来ル　→　＊お来になる　→　いらっしゃる・おいでになる／来られる

イル（居ル）→　＊おいになる　→　いらっしゃる

ミル　→　＊おみになる　→　ご覧になる／見られる

着ル　→　＊お着になる　→　お召しになる／着られる

寝ル　→　＊お寝になる　→　お寝（やす）みになる／寝られる

似ル　→　＊お似になる　→　？／似られる

「オ・ゴ～ニナル」を用いた「敬語化」が不可能な場合は、一般的に同じぐらい敬度を持つ「敬語化」形式として、敬語動詞（あるいは、「ナサル」「イラッシャンル」などの敬語専用動詞）を用いることがある。「レル・ラレル」を用いた「敬語化」も考えられるが、一般的に敬度は低くなると言われる。

---

64 「？」は適確かどうか不明であることを表す。言語使用者による意見が分かれるという意味でもある。

65 「＊」は誤用、不適格であることを表す。

制約３）「～」部分が１音節でなくても、特定の形式（敬語専用動詞など）がある場合は一般的に「オ・ゴ～ニナル」は使わない場合がある。あるいは、使えても自然でない場合が多い。

例）言ウ　→　？？お言いになる[66]　→　おっしゃる
　　行ク　→　？お行きになる　→　いらっしゃる
　　ヤル（「スル」の意味）→　？おやりになる　→　なさる
　　知ッテイル　→　＊お知りになっている　→　ご存じだ

特に「やりもらい動詞」の場合は、「オ・ゴ～ニナル」は使えない。

例）アゲル　→　＊おあげになる　→　さしあげる
　　ヤル　→　＊おやりになる　→　あげる・さしあげる
　　クレル　→　＊おくれになる　→　くださる

しかし、「オ・ゴ～ニナル」と「特定の形式」の両方を使える語もある。

例）飲ム　→　お飲みになる／めしあがる

制約４）「間接尊重語」については「オ・ゴ～ニナル」形式は使えない。

例）イタダク　→　＊おいただきになる
　　マイル　→　＊おまいりになる
　　モウス　→　＊おもうしになる
　　ウカガウ　→　＊おうかがいになる

制約５）動詞のもつ意味・文体的な特徴などの理由で、「オ・ゴ～ニナル」の形式がなじまない場合がある。

---

66 「？？」は「？」に比べ、さらにその適確さが疑わしいことを表す。

制約５－１）人間あるいは人間の集まり（会社・団体など）を「動作主」としない動詞は「オ・ゴ～ニナル」を使えない。

例）アフレル　→　＊おあふれになる
　　生ジル　→　＊お生じになる
　　涌ク　→　＊お涌きになる
　　奥マル　→　＊お奥まりになる
　　降ル　→　＊お降りになる

制約５－２）意味的によくない内容（マイナスイメージ）の動詞は「オ・ゴ～ニナル」がなじまない場合が多い。

例）化ケル　→　＊お化けになる
　　ツブレル　→　＊おつぶれになる
　　誤解スル　→　＊ご誤解になる

以上（制約５－２））のような動詞に「オ・ゴ～ニナル」を用いて「敬語化」を行っても、皮肉な表現になるだけである。本稿における「敬語表現」は問題提起の節で述べた通り、待遇表現の中の一部として、プラス方面における待遇表現に限定しているため、「皮肉」「揶揄」「笑い」を目的（「意図」）としたものは考察の範囲に入れないことにしている。

例）盗ム　→　＊お盗みになる
　　イバル　→　＊おいばりになる

高められる人物にふさわしくない内容であるため不適格になる。「題材・内容」に関係する部分であるが、適切でない「題材・内容」を用いた「敬語化」および「敬語表現化」は適切でないものになるのである。

例）転ブ　→　お転びになる
　　泣ク　→　お泣きになる

この種類は適格になると考えられる。上で確認した上位者に対して「ふさわしくない題材・内容」とは性質が異なるからであると思われる。

制約５－３）俗語的な感じの動詞は「オ・ゴ～ニナル」がなじまない。

例）コケル　→　＊おこけになる／＊おこけられる
　　ブンナグル　→　＊おぶんなぐりになる／＊ぶんなぐられる
　　サボル　→　＊おサボりになる／＊サボられる
　　突ッ張ル　→　＊お突っ張りになる／＊突っ張られる

この種類は一般的に「敬語化」および「敬語表現化」が認められないものとして考えられる。制約５で確認できる「題材・内容」と「敬語化」との関係も問題から考えた場合、不適格になると思われる。この種類の動詞は、「レル・ラレル」を用いた「敬語化」も不可能である。

制約６）外来語・擬音語・擬態語の動詞については「オ・ゴ～ニナル」の形式は使えない。

例）ホットスル　→　＊おほっとになる　→　ほっとなさる／される
　　ガッカリスル　→　＊おがっかりになる　→　がっかりなさる／される
　　ノンビリスル　→　＊おのんびりになる　→　のんびりなさる／される
　　コピースル　→　＊おコピーになる　→　コピーなさる／される
　　メモスル　→　＊おメモになる　→　メモなさる／される

制約７）漢語系動詞であるが「オ」が付く場合がある。
「漢語スル」の場合は「漢語」が「動作性漢語」である場合、「ゴ～ニナル」を用いて「敬語化」するのが一般的である。

例）説明スル　→　ご説明になる

出張スル　→　ご出張になる
心配スル　→　ご心配になる

しかし、「漢語系」であるが例外として「オ」が付く場合がある。

例）感ジル／ズル　→　お感じになる
察スル　→　お察しになる

また、「漢語系」であるが、「ゴ」よりは「オ」が自然な場合は、「オ・ゴ～ニナル」を用いた「敬語化」は不自然になる場合がある。

例）食事スル　→　＊ご食事になる／＊お食事になる　→　お食事なさる／される
掃除スル　→　＊ご掃除になる／＊お掃除になる　→　お掃除なさる／される
勉強スル　→　＊ご勉強になる／＊お勉強になる　→　お勉強なさる／される

制約８）意味的に理由を求めることは難しいが習慣として「オ・ゴ～ニナル」といわない場合がある。

例）安心スル　→　？ご安心になる　→　ご安心なさる
協力スル　→　？ご協力になる　→　ご協力なさる
結婚スル　→　？ご結婚になる　→　ご結婚なさる
成長スル　→　？ご成長になる　→　ご成長なさる

例）カジル　→　？おかじりになる　→　かじられる
チギル　→　？おちぎりになる　→　ちぎられる
運転スル　→　＊ご運転になる　→　運転なさる／される
営業スル　→　＊ご営業になる　→　営業なさる／される
水泳スル　→　＊ご水泳になる　→　水泳なさる／される
野球スル　→　＊ご野球になる　→　野球なさる／される

高められる人物・地位のある人物の行為としてふさわしくないという感覚で、比較的に敬度の低い「レル・ラレル」を用いて「敬語化」しているのではないだろうか。

制約９）複合動詞の中には「オ・ゴ～ニナル」の形式を用いられないのが多い。不自然に感じられるのが多い。

例）探シ出ス　→　？お探し出しになる
　　言イ尽クス　→　？お言い尽くしになる
　　振リ返ル　→　？お振り返りになる
　　居座ル　→　？？お居座りになる
　　騒ギ立テル　→　？？お騒ぎ立てになる

ただし、音節数が少ない複合動詞、結合度が高いと見られる複合動詞は、「オ・ゴ～ニナル」形式を用いて「敬語化」するのができる場合がある。しかし、この場合は、個人差も大きいと思われるので一律では言えない。

例）見立テル　→　お見立てになる
　　立チ寄ル　→　お立ち寄りになる
　　乗リ換エル　→　お乗り換えになる
　　受ケ取ル　→　お受け取りになる
　　話シ合ウ　→　お話し合いになる

「オ・ゴ～ニナル」は上記で確認したように様々な使用に関する制約を持っている。

4.3.4.2「オ・ゴ～ニナル」の「敬語知識」における問題と「敬語表現」教育への適用の問題

本節では、「オ・ゴ～ニナル」の「敬語知識」における問題点と「敬語表現」教育への適用の問題について論ずる。

「レル・ラレル」形式を用いた「直接尊重敬語化形式」―「敬語化」は上の節で確認した通り、制約も少なく簡単に「直接尊重語」が作れるが、「オ・ゴ～ニナル」は様々な制約があるため、「レル・ラレル」に比べて学習者にとってはだいぶ厄介な形式である。それで、学習者は一律に「レル・ラレル」形式を「敬語化」および「敬語表現化」における「直接尊重語」として使ってしまう可能性がある[67]。

しかし、「レル・ラレル」を用いた「敬語化」にも様々な問題があり、敬語表現教育においても一律に「レル・ラレル」形式を「敬語表現化」における有効な手段や情報（「敬語知識」）として提示することには問題点がある。

以下では、「敬語表現化」における「レル・ラレル」形式の問題点について論ずる。

敬語を頻繁に使う人や敬語の使用に慣れている人にとって「レル・ラレル」は「安っぽい」「ぎこちない」敬語として感じられる可能性があると菊地（1994）は指摘している。制約も少なく、いわゆる「便利な敬語化」の方式ではあるが、様々な動詞に付く、実際の「談話」などにおける使用頻度が比較的高いといった面がある。そのため、いわゆる「敬度」つまり、「敬意の度合い」という面で他の「敬語形式」（「直接尊重」形式）に比べ、その「敬度」が落ちるという印象を与えるということが考えられる。「敬語」「敬語表現」を時間的観点から考えた場合、一般的に頻繁な使用や時間の経過によって、ある「敬語」「敬語表現」の「敬度」は落ちる（落ちていく）と認識されて、実際の例も多い。

「レル・ラレル」は「尊重（直接尊重）」の他に「受身・可能・自発」としての機能も表し得るので、「レル・ラレル」の「敬語化」形式を聞いても、あるいは読んでも（文脈があるとしても）、「尊重」か「受身」か、あるいは「可能」なのか、と判断できない場合がある。次は、「レル・ラレル」の意味の判断が難しい例[68]であるが、「レル・ラレル」を「オ・ゴ～ニナル」に代えた場合、「直接尊重」としての意味や「敬語化」における機能は明確になる。

---

[67] 金（2003）。2001 年、韓国人と台湾人の日本語学習者を対象に「敬語表現化」と敬語の使用に対するインタビューを実施した。インタビューの結果、上位者の行動・状態について「敬語化」を行う際、制約の多い「オ・ゴ～ニナル」よりは「レル・ラレル」の形式を用いる場合が多いということが確認できた。「レル・ラレル」形式を多用する理由については、「オ・ゴ」を用いた「敬語化」形式は制約が多く誤用になりやすいので、比較的簡単な「レル・ラレル」形式を用いるという意見があった。他に、「レル・ラレル」も使わず、「デス・マス」の「丁寧文体」だけで「敬語表現化」を行うという意見もあり、「敬語表現化」と敬語表現教育における学習者の問題点や困難を窺うことができた。

[68] 菊地（1994）

例文 14)「あなた、あの方にその話したの？じゃ、泣かれたでしょう？」

→「あの方」が泣いたのは事実であるが、「直接尊重」か、「迷惑の受身」かがわからない

例文 15)「（夜遅くまで一緒に仕事をしていた部下が上司に）つかれましたね。部長、明日は早く起きられますか」

→ 「直接尊重」か、「可能」かがわからない

最後に、「文話」全体における「敬語表現化」の問題であるが、ある「文話」における動詞をすべて「レル・ラレル」の形式で「直接尊重語化」しただけでは、変化の乏しい単調なスタイル（文体）になりやすいと思われる。「敬語表現化」は一の語・文における「敬語化」だけでなく、「文話」全体における「敬語表現化」を考える必要がある。学習者の敬語能力の向上のためには様々な形式の「敬語形式」を習得し、活用するようにする必要があり、そのような観点から考えた場合、一律な「敬語表現」、つまり、バリエーションに乏しい「敬語表現化」は避ける必要があると思われる。

「敬語表現化」における「敬語知識」としての「オ・ゴ～ニナル」の指導の前に考えておきたいことであるが、一般的に日本語の「敬語表現」では上位者の行為を直接的に表現することは礼を失する行為であるという認識があると思われるので、それを比較的間接的に（「オ・ゴ～ニナル」の形式自体の意味・機能は、高く待遇する人物が「オ・ゴ行為」を「スル」のではなく、そのよう「ニナル」という意味で間接的に表現するものである）「敬語化」することによって、「文話」における「敬意」を確保することができるということを学習者に認識させる、あるいは情報として提供する必要があるのではないだろうか。

日常生活において使用頻度が極めて高い語彙に対しては、敬語専用動詞が用意されているので、それを用いて「敬語化」を行えば充分であるが、そうではない語彙に対して「敬語化」を行うためには、いわゆる「間接的な」形式を用いる必要もあるということを学習者に指導する必要があると思われる。

次は、実際の指導―「敬語」の指導において考えておきたい「オ・ゴ～ニナル」の「敬語知識」としての問題をまとめたものである。

①「オ・ゴ～ニナル」の間接性による「敬度」について十分に認識させる。
⇒使用意識の面

② 基本的に「オ」 ＋ 和語動詞の連用形 ＋ ニナル
「ゴ」 ＋ 漢語動詞の語幹 ＋ ニナル
という形で「敬語化」が行われるという点―「形式」上の面について指導する。
⇒「オ・ゴ～ニナル」の「敬語形式」としての面

③「オ・ゴ～ニナル」の「直接尊重語」は、人間あるいは人間の集まり（会社・団体など）を「動作主」とする動詞をその対象とするものであるので、それに注意して「敬語化」を行うように指導。
⇒制約５－１）

④「敬語化」の基本的な原則―意味的によくない内容の動詞に使わない、俗語的な感じの動詞に使わないなどといった「題材・内容」の面―に注意して「敬語化」を行うように指導。
⇒制約５－２）と制約５－３）

⑤専用の敬語動詞―「直接尊重動詞」が存在する場合は、それを用いた方が自然的な場合が多いということに注意して「敬語化」を行うように指導。
⇒制約２）と制約３）
⑥「敬語化」する動詞の音節数によって「オ・ゴ～ニナル」を使えない場合があるということに注意するように指導。
⇒制約２）

⑦「～スル」動詞の場合は、「オ・ゴ～ニナル」を用いた「敬語化」がなじまない場合が多いので、「オ・ゴ～ニナル」よりは「～ナサル・サレル」の形式を用いて「敬語化」を行うように指導[69]。

[69] 菊地（1994）

⇒制約６)、制約７)、制約８）

4.3.5「敬語知識」の問題―「オ・ゴ～スル」の使用

本節では、「間接尊重」（いわゆる「謙譲」）の「敬語化」形式である「オ・ゴ～スル」との「敬語知識」における問題について論ずる。「オ・ゴ～ニナル」と同様に複雑な使用の制約を持つ「オ・ゴ～スル」について確認し、「敬語表現化」における「敬語知識」として意義と誤用の問題について分析、考察する。また、「敬語表現化」における問題だけでなく「敬語化」教育、および、「敬語表現化」教育の問題についても考察する。

4.3.5.1「オ・ゴ～スル」の性質と使用の制約

「オ・ゴ～スル」は「間接尊重」の「敬語化」形式である。「～」には「敬語化」の対象になる動詞の連用形が入り、「相手」に関係する「自分」の行動・状態などについて「敬語化」を行うことによって「相手」に対する「尊重」の気持ちを表す性質を持っている。

しかし、「オ・ゴ～スル」は使用における様々な制約があり、「敬語表現化」における情報として、「敬語表現化」における「敬語知識」として、把握しておかなければならないと思われる。次は、菊地（1994）と金（2003）をもとにまとめた「オ・ゴ～スル」の使用における制約である。

制約１)「～」部分に入る動詞の連用形の名詞性が乏しい場合は、「オ・ゴ～スル」を用いた「敬語化」は不自然になりやすい。これは、「オ・ゴ～ニナル」の制約と共通する。

例）可能な例

祝ウ　→　祝イ　→　お祝いする

返ス　→　返シ　→　お返しする

訪ネル　→　訪ネ　→　お尋ねする

話ス　→　話シ　→　お話する

例）不可能な例

言ウ　→　？言イ　→　＊お言いする

制約２）「～」の部分―動詞の連用形が１音節の場合、一般的に「オ・ゴ～スル」は使えない。これは「オ・ゴ～ニナル」の制約と共通する。

例）見ル　→　＊お見する　→　拝見する

来ル　→　＊お来する　→　まいる

イル（居る）　→　＊おいする　→　おる

「オ・ゴ～スル」を用いた「敬語化」が不可能な場合は、「間接尊重動詞」あるいは「丁重動詞」を用いる「敬語化」の方法がある。

制約３）「～」部分が１音節でなくても、特定の形式（敬語専用動詞など）がある場合は一般的に「オ・ゴ～スル」は使わない場合がある。「敬語化」形式として用いたとしても自然ではない場合が多い。これは「オ・ゴ～ニナル」の制約と共通する。

例）言ウ　→　＊お言いする　→　申し上げる

知ル　→　＊お知りする　→　存じ上げる

「オ・ゴ～スル」を用いた「敬語化」が可能であっても、敬語動詞の方が落ち着く場合がある。

例）会ウ　→　お会いする　→　お目にかかる

聞ク　→　お聞きする　→　うかがう

特に、「オ・ゴ～ニナル」における制約と共通して「やりもらい動詞」の場合は、「オ・ゴ～スル」形式は使えない。

例）モラウ　→　＊おもらいする　→　さしあげる

アゲル　→　＊おあげする　→　いただく

しかし、「オ・ゴ～ニナル」と同様に「オ・ゴ～スル」と「特定の形式―敬語動詞」の両方を使える場合もある。

例）見セル　→　お見せする／お目にかける・ご覧に入れる
尋ネル　→　お尋ねする／うかがう
訪ネル　→　お訪ねする／うかがう

制約４）「直接尊重語」については「オ・ゴ～スル」を用いた「敬語化」は使えない。これは「オ・ゴ～ニナル」における制約と平行する。

例）ナサル　→　＊おなさりにする
メシアガル　→　＊おめしあがりする
オッシャル　→　＊おおっしゃいする

制約５）動詞のもつ意味・文体的な特徴などの理由で、「オ・ゴ～スル」の「敬語化」がなじまない場合がある。これは、大体、「オ・ゴ～ニナル」における制約と共通する。

制約５－１）人間あるいは人間の集まり（会社・団体など）を「動作に関係する人物（補語）」としない動詞は「オ・ゴ～スル」を使えない。

例）アフレル　→　＊おあふれする
生ジル　→　＊お生じする
涌ク　→　＊お涌きする
奥マル　→　＊お奥まりする
降ル　→　＊お降りする

制約５－２）意味的によくない内容（マイナスイメージ）の動詞は「オ・ゴ～スル」がなじまない場合が多い。

例）殺ス　→　＊お殺しする
　　イジメル　→　＊おいじめする
　　カラカウ　→　＊おからかいする
　　殴ル　→　＊お殴りする
　　盗ム　→　＊お盗みする
　　侮辱スル　→　＊ご侮辱する
　　追及スル　→　＊ご追及する

「動作に関係する人物を高める」といった「オ・ゴ～スル」の「敬語化」における意識とはあわない意味を持っている動詞に対して「オ・ゴ～スル」を用いた「敬語化」は不可能である。

ただし、意図的ではなかったが、結果として「悪い」影響ができてしまったという意味では使える場合もある。

例）待タセル　→　（先生を）お待たせしてしまった。
　　迷惑ヲカケル　→　ご迷惑をおかけする。
　　コワス　→　？？（先生のお茶碗を）おこわししてしまった。
　　割ル　→　？？（先生のお茶碗を）お割りしてしまった。

制約５－３）俗語的な感じの動詞は「オ・ゴ～スル」がなじまない。

例）乗ッケル　→　＊お乗っけする
　参考）乗セル　→　お乗せする
　　サボル　→　おサボりする

制約６）外来語・擬音語・擬態語の動詞については「オ・ゴ～スル」の形式は使え

ない。これは「オ・ゴ～ニナル」の制約と共通する。

例）ぺこぺこスル　→　＊おぺこぺこする
　　スケッチスル　→　＊おスケッチする

制約７）意味的に理由を求めることは難しいが習慣として「オ・ゴ～スル」を用いた「敬語化」は認めない場合がある。これは「オ・ゴ～ニナル」の制約と共通する。

例）アコガレル　→　＊おあこがれする
　　追ウ　→　＊お追いする
　　メザス　→　＊おめざしする

菊地（1994）によると、主体から関係する人物に一方的に向かう意味、しかも「相手」に「恩恵」を与えるわけでもない意味の場合は「オ・ゴ～スル」を用いた「敬語化」はなじまないという。

例）乗ル　→　＊（「誰」のために特急に）お乗りする／ご乗車する

さらに、菊地（1994）によると、行為が「～に（の）ために」でも、その行為によって具体的・直接的な「恩恵」を得る人物が想定できる習慣が確立している場合でないと、「オ・ゴ～スル」を用いた「敬語化」は成立しにくいという。

制約８）複合動詞の中には「オ・ゴ～スル」の形式を用いられない、または、不自然に感じられるものが多い。これは「オ・ゴ～ニナル」の制約と共通する。

例）送ル　→　お送りする
　　届ケル　→　お届けする
　　送リ届ケル　→　＊お送り届けする
　　誘イ出ス　→　＊お誘い出しする
　　訪ネ歩ク　→　＊お訪ね歩きする
　　持チ上ゲル　→　＊お持ち上げする

複合動詞の中では「オ・ゴ～スル」を用いた「敬語化」が不可能な動詞が多いようである。しかし、すべて不可というわけではない。

例）取リ寄セル　→　お取り寄せする
　　引キ受ケル　→　お引き受けする
　　使イ立テル　→　お使い立てする

「オ・ゴ～ニナル」の制約と同様に、音節数が少ない、結合度が高いと見られる複合動詞は「オ・ゴ～スル」を用いた「間接尊重語化」ができると思われる。

「オ・ゴ～スル」は上記で確認した通り、様々な使用に関する制約を持っている。

4.3.5.2「オ・ゴ～スル」の「敬語知識」における問題と「敬語表現」教育への適用の問題

前節で述べたように「オ・ゴ～ニナル」は「直接尊重語における典型的な敬語化形式」として存在している同時に、敬語教育で提示する必要があるということがわかった。それと対立するもの、すなわち、「間接尊重語における典型的な敬語化形式」として存在し、提示できるのが、「オ・ゴ～スル」であると思われる。

「オ・ゴ～ニナル」の場合と同じく「敬語表現化」のためには、様々な「敬語知識」について理解し、実際に使いこなす必要があると思われる。そのような「敬語知識」のひとつとして、「間接尊重語」を作る「お・ご―する」形式を用いる「敬語化」の手段があるということを学習者に理解させる必要があると思われる。

実際の場面で使用頻度が極めて高い語彙に対しては、専用の動詞（いわゆる敬語専用動詞）が用意されているので、それを用いた「敬語化」「敬語表現化」を行えば十分であるが、そうでない場合は、「別の形式」を用いる必要もあるということを学習者に認識させる必要があると思われる。

次は、「オ・ゴ～スル」を含めた敬語形式を用いた「敬語表現化」における認識の問題である。前節の「敬語表現化過程」における「敬語表現認識」の部分で、すでに「敬語表現化」における「主体」（学習者）「認識」の問題について述べているが、本節では、「オ・ゴ～スル」を中心にした「間接尊重」、いわゆる「謙譲」の観点からみた「敬語知識」における「敬語表現」教育における問題点にについて加える。

「オ・ゴ～スル」を用いた「敬語化」について指導する際、用語としての「謙譲（語）」における「謙り」の概念をそのまま適用し、「自分を低めて…（敬語化をする）」というような指導における解説が行われる場合がある。しかし、それによって学習者に抵抗感を引き起こさせる場合や「自分」の動作や状態になぜ「敬意」の接辞である「オ・ゴ」が必要なのかという点に対して学習者から疑問が出てくる場合がある。これは用語における概念をそのまま指導に適用させた結果であると思われるが、その場合は、前節で述べた通り、「敬語表現化」には、「敬語化」「敬語表現化」における基本的な概念である「相手」や「話題の人物」に対する「尊重」の意識が根底にあり、「敬語形式」は、その「尊重」の意識を表すための様々なやり方であるというように認識させる必要があると思われる。また、自分の行動・状態に「オ・ゴ」がついているが、その行為は直接「相手」にかかわり、「相手」にさしだされたものであると理解させる必要があると思われる。

次は、最近、敬語の「ゆれ」（誤用）としてよく指摘される「オ・ゴ～スル」の「直接尊重語」としての「敬語化」の問題についてである。具体的な誤用の例としては、次のようなものがある。

例文 16）ご利用していますか、レタックス（郵便局の印刷物）

・「敬語化」における誤用：＊ご利用していますか

・正しい「敬語化」としては、「ご利用なさっていますか／ご利用なさっていらっしゃいますか」などが考えられる

例文 17）スーパーＭＭＣがグンとご利用しやすくなるというお知らせです（銀行の印刷物）

・「敬語化」における誤用：＊ご利用しやすくなる

・正しい「敬語化」としては、「ご利用なさりやすくなる」などが考えられる

例文 18）よろしくご指導してください。

・「敬語化」における誤用：＊ご指導してください

・正しい「敬語化」としては、「ご指導ください」などが考えられる

例文 19）私が主人をご案内しました

・「敬語化」における誤用：＊ご案内しました

・正しい「敬語化」としては、「案内しました／案内致しました」などが考えられる

菊地（1994）は、このような現象は国立国語研究所の 1953 年度の岡崎市での敬語調査では、わずかな部分を占めているということにとどまっていたが、最近十年ほどの間にこの種の誤用は増えてきていると指摘している。

菊地の指摘のように、このような誤用は日本語母語話者だけでなく、日本語学習者においても近年増えていて、次第に「オ・ゴ～スル」を用いた「敬語化」が「直接尊重表現」として定着していく動きをみせているようである。

このような「敬語化」における（誤用の）現状は「オ・ゴ～スル」形式を「オ・ゴ＋（動作性）漢語名詞／和語（の名詞形）＋ ヲ ＋スル」、すなわち、「オ・ゴ名詞（形） ヲ スル」という形として解釈した結果ではないかと推測される。

つまり、「あなた（「相手」） が／に 関係する 「オ・ゴ名詞」[70] を する」という意識の表れ、あるいは、「内言」を具現化した形ではないかと思われる。助詞「ヲ」は実際の「敬語表現化」では「省略」される場合、あるいは、「省略」という形で「敬語表現化」が行われる場合が多いが、実際、このように話しことば・書きことばを問わず「文話」において助詞を省略することは頻繁に行われていることである。また、このような「文話」における「助詞の省略」あるいは「無助詞」の現象は、日本語における特徴のひとつでもあると指摘されている。上記の例で確認できるように、単純に助詞の「ヲ」を挿入するだけで、誤用は解消するわけであるが、このように「オ・ゴ」を用いた「敬語化」形式をはじめとする日本語における「敬語化」形式の複雑さと難しさを反映する現象のひとつであると言えるのではないだろうか。

---

[70] この場合の「オ・ゴ名詞」の「敬語表現化」における意識としては、「相手」に関わる物事に「オ・ゴ」を付けて、「相手」を「直接」高くする「直接尊重語（表現）」としての意識、あるいは、「自分」の言語行為において上品さ・丁寧さを表す「美化語（表現）」としての意識が働いているのではないだろうか。

このような日本語母語話者（日本人および日本語で書かれてある印刷物など）による「誤用」は学習者の学習を妨害する要因のひとつになると思われる。実際の指導の場面において、このような「誤用」が学習者に見られるにも関わらず、日本語母語話者が実際「敬語化」におけるひとつの手段として使っているので、あるいは、「外国人」だから、そこまで精度を高める必要はない、失礼にならない程度の誤用だから特に問題はないといったスタンスがあるのも現実ではないだろうか。あるいは、「誤用」についての学習者からの疑問・指摘があった場合、日本語母語話者も使っているから特に問題はないという対応をしているケースもあるのではないだろうか。

私見として、言語の教育・指導において、そもそも実際の現状とはある程度「差」が存在するものであると思う。それは言語の教育・指導ということがいわゆる目標言語における「理想形」を教えることを原則としているからであると思われる。「理想形」を教えている限り、「現状」とのギャップが生じるのは当然で、また仕方がないことであろう。外国語、あるいは第 2 言語として日本語を学習する場合、限られた時間と費用で最大の効果をあげるためには、「原則」を中心に教育・指導すべきであると思われる。例外・誤用・ずれなどの「副」としての項目については、「原則」を優先にした後、「余裕があれば導入」するべきではないかと考えている。

「オ・ゴ～スル」を用いた「敬語化」とその誤用などにおける教育・指導の場合も、優先すべきことは、「オ・ゴ～スル」の「理想的な形」を中心に教育・指導に挑むべきであると思われる。「例外」などに関する項目の教育は、基本的な、また「理想」的な用例を習得したあとでも十分であろう。

最後は、実際の指導―「敬語」の指導において考えておきたい「オ・ゴ～スル」の「敬語知識」としての問題である。

「オ・ゴ～スル」の指導において考えていきたい点は、「オ・ゴ～スル」の項目における問題と共通する項目が多い。「オ・ゴ～ニナル」と一緒に導入することが考えられる。

①「オ・ゴ～スル」使用に関しての意識について十分に指導する。

⇒使用意識の面

② 基本的に「ゴ」　＋　和語動詞の連用形　＋　スル

「ゴ」　＋　漢語動詞の語幹　＋　スル

という形で「敬語化」が行われるという点―「形式」上の面について指導する。

⇒「オ・ゴ～スル」の基本的な性質

③「オ・ゴ～スル」の間接尊重語は、人間あるいは人間の集まり（会社・団体など）を「動作に関係する人物（補語）」とする動詞をその対象とするものであるので、それに注意して「敬語化」を行うように指導。

⇒制約５－１）

④「敬語化」における（「題材・内容」関連の）基本的な原則　―　意味的によくない内容の動詞に使わない、俗語的な感じの動詞に使わないなど　―　に注意して「敬語化」を行うように指導。

⇒制約５－２）、制約５－３）

⑤「間接尊重語化」する動詞の音節数によって「オ・ゴ～スル」を用いた「敬語化」が不可能になる場合があるということに注意するように指導。

⇒制約２）

⑥「敬語化」する動詞の意味・言語習慣にも注意するように指導。

⇒制約６）、制約７）、制約８）

⑦「オ・ゴ～スル」と「オ・ゴ～スル」は「敬語化」における「間接尊重語（表現）」と「直接尊重語（表現）」を作る典型的な「敬語化形式」として、使用頻度が高いだけでなく、使用の制約の面においても、共通する項目が多いので、一緒に提示・指導するのが望ましいと思われる。

５．まとめ

Ｉ章では、「文話」（コミュニケーション）における「主体」の存在、「主体」の「意図」、「主体」を取り囲む諸状況に対する認識などの観点から「待遇コミュニケーション」における「敬語表現化」の過程について分析・考察を試みた。本稿における「敬語表現化」は、コミュニケーションの主体としての学習者の頭のなかの「内言」を具現化する（「外言」にする）過程に注目している。「待遇コミュニケーション」という観点から接近しているが、主に分析・考察の対象としているのは「表現主体」における「表現行為」―「表現行為」における過程の問題である。本来、コミュニケーション（「待遇コミュニケーション」）を観点としているならば、「表現」と「理解」の両目を研究の対象にしなければならないが、本稿では、「表現主体」の「敬語表現化」の過程の問題に注目しているため、コミュニケーヨン（「待遇コミュニケーション」）の一部である「表現の問題」において分析・考察を行った。

第Ｉ章では、「内言」として存在するコトバの材料、あるいはコトバの回路である「ゲンザイ」とその「ゲンザイ」を具現化のために組み立てた「内言」としての「通常表現」に「敬語表現化要素」（「敬語表現意識」「敬語表現認識」「敬語知識」）を適用させ、「敬語表現化」を完遂させる一連の過程である「敬語表現化」の概念、意義、および具体的問題について分析・考察を行った。「ゲンザイ」を具現化し、「敬語表現化」を行う過程で考えなければならない諸項目を「敬語表現化要素」とし、さらに、その「敬語表現化要素」を三つにわけて考えた。「敬語表現化」における意識の問題―「尊重」の意識・「相手」に対する「配慮」の意識・「敬語表現」の普遍性における意識など―である「敬語表現化意識」、「敬語表現化」における認識の問題―「人間関係」「場」「題材・内容」「ストラテジー」に対する認識など―である「敬語表現化認識」、「敬語表現化」における言語的な知識―敬語形式の性質・運用における知識―である「敬語知識」の三つの項目を立て、それらを「敬語表現化」に適切に適用させることによって「敬語表現化」が完遂されるという考え方を提示した。しかし、実際の日本語を用いた「敬語表現化」の問題を考えた際、本稿で提示している「敬語表現化要素」の三つの項目が「敬語表現化」に必要な項目のすべてではないと考えられる。他にも声量・話し方などの音声的な問題や身振り・手振りなどの非言語的な問題などが「敬語表現化」における重要な要素として考えられるが、本稿では、言語

的な様相と主体を取り囲む諸状況の問題に注目をし、「敬語表現化」の問題について分析・考察を行った。

人間の言語行為といった面では「敬語表現化」の考え方は、一部における分析・考察ではあるが、先行研究における語・句レベルの「敬語化」の問題や「表現」の語形を変えるだけの「敬語表現化」の問題に捉われず、さらに「文話」を単位として、主体の「敬語表現」における「内言」の性質と「敬語表現化」のための様々な要素の働きに注目した「敬語表現化」という考え方は、「敬語表現」の研究や「敬語表現教育」を考えるためのひとつの指標としての意味を持っていると思われる。

以下のⅡ．待遇表現教育における「敬語表現化」の適用と「文話」における「敬語表現化」の諸相の章では、「敬語表現化」の日本語教育―実際の教室活動への適用の問題と「文話」における「敬語表現化」の様相について分析・考察を行う。

第Ⅰ章における「敬語表現化」という考え方を実際の日本語教育の現場にはどのように適用することができるのか、また、実際の日本語研究―「敬語表現」の研究にはどのように適用することができるのかという点について考えるためである。

Ⅱ　待遇表現教育における「敬語表現化」の適用と「文話」における「敬語表現化」の諸相

１．実際の教室活動への適用へ向けて

Ⅰ「待遇コミュニケーション」における「敬語表現化」の章では、「敬語表現化」の過程について分析・考察してきたが、コミュニケーション主体の実際の思考回路や実際の表現形式､表現行為の面から考えると論及できる部分は一部に過ぎないと思われる｡しかし、「敬語表現」を作る過程である「敬語表現化」は、待遇表現教育の方法を考える際のひとつの観点としての意義があるのではないかと考えている。

「敬語表現化」の過程および「敬語表現化要素」における認識・適用は、待遇表現教育のために考えなければならない項目の一つであると思われる。本節は、実際の待遇表現教育、特に実際の教室活動での適用の問題について論ずる。

まず、川口（2003）の「チャンピオンスピーチ」の例について考える。

「チャンピオンスピーチ」は早稲田大学の日本語研究教育センターの日本語クラスにおけるテストの高得点者（チャンピオン）のスピーチで、定期的に行われるテストでチャンピオンになった感想やどのように勉強をしたのかということから個人的なことまで様々なことについてスピーチをするとしている。

「チャンピオンスピーチ」では、スピーチにおける「場面」を設定し、それに相応する表現を使用するように指導を行うという。また､「チャンピスピーチ」では、スピーチ司会者を設定する場合もあるとしている[71]。

以下では、「敬語表現化」の観点から考えた「チャンピオンスピーチ」の待遇表現教育上の意義について分析を行った。

まず、スピーチにおける「人間関係」の設定の面である。本稿において注目しているのは、一般成人同士としての「人間関係」の設定であるが、「チャンピオンスピーチ」では、

[71] 川口（2003）。最初は教師が司会を担当し、モデルを確認させる。ある程度学生が理解してきた時点からは学生に司会を担当させるとしている。

無理な人間関係を設定せず、実際、学習者が直面し得ると思われる「場面」に近い一般成人同士という「人間関係」を設定することによって学習者の「敬語表現化」における意識を高めることができたと思われる。第Ⅰ章の「敬語表現意識」の節と「敬語表現認識」の節ですでに述べているが、実際に学習者が直面し得る「人間関係」、無理のない「人間関係」を設定することによって、学習者の「敬語表現化」の必要性における意識を高めることができる他、一般成人同士という「人間関係」を設定することによって、「敬語表現化」における「人間関係」がより認識しやすくなると思われる。

また、「チャンピオンスピーチ」では、クラスのみんなの前でスピーチをするという普段とは違う「あらたまった場」を設定することにより、「敬語表現」の使用における「場」に対する認識を高めることも期待される。普段のクラスメート同士の「場」から、「スピーチ会場」といった「場」に変える設定をすることによって、「場」に対する「敬語表現」の使い分けに対する認識を高めることができると思われるのである。このような「スピーチの場」の設定は、テストで高得点を取った学習者が、テストで高得点を取ったことについてみんなに話すといったスピーチにおける「当然性」も確保できるため、より効果的に「場」に対する認識を高めることができるのではないかと思われる。

さらに、「チャンピオンスピーチ」では、普段のクラス活動ではあまり使わない「丁重語」や「丁重文体」を用いてスピーチをするようにしているが、このようなスピーチにおける「丁重語」「丁重文体」の使用で、スピーチに必要な「敬語知識」の導入がスムーズにできると思われる。第Ⅰ章の「敬語知識」の節で述べているが、「敬語表現化」において「簡単に敬語表現にする」ことのできる「丁重語」「丁重文体」は、普段のクラス活動では、その導入や練習が難しい点があると思われる。「丁重語」「丁重文体」の言語形式としての意味・性質についてはわかるが、どのような「場面」で、どのように使えばいいのかといった点は、学習者にとっては理解しにくい部分があるだろう。しかし、「チャンピオンスピーチ」といった具体的且つ実感できる「場面」を設定することによって「丁重語」「丁重文体」のよりスムーズな導入および練習が可能になるのではないかと考えられる。

このように実際の教室活動を行う際、「敬語表現化」の過程や「敬語表現化要素」を意識することによって、よりスムーズな待遇表現指導・学習が期待できると思われる。つま

り、上記で確認したように、実際の教室活動―上記で確認した「敬語表現化」の面だけでなく―においては「だれが」「だれに向かって」「何のために」「何を」「どういうコトバを使って」といったことについて考えなければならないのである。そのような「だれが」「だれにむかって」「何のために」「何を」「どういうコトバを使って」ということは、第Ⅰ章で述べた「敬語表現化要素」の「敬語表現意識」「敬語表現認識」「敬語知識」といったことにつながることになるのである。

「だれが」「だれに向かって」などのことを学習者側に認識させ、また、教師側はそれらを精緻に記述・認識することによって（中級）会話練習をより有効なものにすることができるが、この問題については川口（2005）の「談話記述の精緻化」に触れなければならない。

川口（2005）は、「談話記述の精緻化」を、特定の談話を「だれが／だれに向かって／何のために」行うかを考えることから考え、談話の流れを談話の目的や談話の流れにかかわる表現をもとに正確に記述することであると定義している。さらに、川口（2005）は、一部の日本語教材における談話練習のテキストが不自然で、有効な練習が期待できない理由として、「だれが／だれに向かって／何のために」の項目が確定されていない点、人物の設定における課題事項が明確されていない点、自然な談話の流れを精緻に記述（提示）していない点などを指摘し、そのような問題点を解決し、有効な会話練習を行うためには、談話構造を分析して談話の流れとそれにかかわる表現を正確に記述する「精緻化」を行うべきであると指摘している。

「談話記述の精緻化」は、実際の教室活動における「敬語表現化」の考え方の適用の問題に対して示唆するものが多い。「自分」はどのような人物であって、「相手」はどのような人物なのか、また、「自分」と「相手」の関係はどのような「人間関係」にあるのかといった「人間関係」の設定と認識の問題。「何について敬語表現化」を行うか、「何のために敬語表現化」を行うかといった「題材・内容」の問題。「敬語表現化」を行い、「自分」の「意図」を達成するためには、（「文話」において）どのような課題をクリアしなければならないのかといった問題。「敬語表現化」のためにはどのようなコトバ―「敬語」を使えばいいのかといった「敬語知識」の問題などがそれである。

「敬語表現化」の実際の教室活動、特に「談話練習」に取り入れる場合は、上記で確認した問題点について考えなければならないであろう。

さらに川口（2005）は実際の指導における留意点について述べているが、それらは「敬語表現化」を実際の授業に適用させる場合における留意点とつながる部分が多いので、以下でまとめておく。

①精密に記述された会話モデルが手に入ったとして、それを暗記させて復唱させる必要はない。そのような会話モデルの復唱は、ネイティブスピーカーの選んだ表現を「正しいもの」として押し付けて学習者の表現創造の機会と表現の多様性を認識する機会をともに奪うことになる。

②実際の指導においては、学習対象が「だれが／だれに向かって／何のために」であるかが設定されたところで、学習者に「では、最初にだれがだれに向かって、どのようなことばで話を始めますか」ということを聞く。そのような活動を通じて、「会話」における自主的な、創造的な認識を持たせる必要がある。

次は、実際の教室活動における（レポート・調査等の）「発表会」の導入の問題について述べる。

これは実際、筆者が担当した[72]2004 年度秋学期（2004 年 10 月から 2005 年１月までの期間）の早稲田大学日本語研究教育センターの授業で実施し、その成果をある程度確認した部分でもある。筆者が担当した授業は「日本語５Ｂ」「日本語６Ｂ」「ＩＣ５－１Ａ」の三つの授業であった。授業の概要と授業における設定を簡単に紹介する。

まず、「日本語５Ｂ」「日本語６Ｂ」の授業は、早稲田大学日本語研究教育センターで行われる授業で、早稲田大学日本語研究教育センターに日本語学習のために在籍している外国人留学生を対象にした授業である。筆者が担当した 2004 年秋学期の「日本語５Ｂ」クラスには 8 人の学習者が、「日本語６Ｂ」クラスには 6 人の学習者が在籍し、コミュニケーション活動中心の授業を行った。教科書を使わないコミュニケーション活動中心の授業

[72] 授業はチームティーチングの形で行った。「日本語５Ｂ」「日本語６Ｂ」は週 5 日の５コマ（１コマは 90 分）の授業を 5 人の講師で、「ＩＣ５－１Ａ」は週 3 日の 5 コマの授業を 3 人の講師で担当した。

では、学習者個人があるテーマを決め、そのテーマについて他の学習者、担当講師と話し合いをし、自分のテーマに対する「考え」を深めていくことを主な活動内容としている。「日本語５Ｂ」「日本語６Ｂ」の授業では、「話し合い」を通じて深まった自分の「考え」について、レポートを書いたり、「口頭発表会」で発表をしたりすることによって、日本語のコミュニケーション能力を高めることを目標としている。

「日本語５Ｂ」「日本語６Ｂ」の授業では様々な教室活動を行ったが、本節における「敬語表現化」の実際の教室活動への適用の面では、「口頭発表会」のことを中心に考えたい。

「口頭発表会」では、クラスでの「話し合い」をもとに深めた自分の「考え」（テーマ）について、どのような過程を経て自分の「考え」（テーマ）が深まったのか、自分の「考え」（テーマ）を深めるためにどのような努力をしたのかといったことについてクラスのみんなの前で発表（報告）をする。「口頭発表会」では、発表内容の伝達のためにレジュメを作成し、レジュメをもとに発表を行う。また、「口頭発表会」では、「口頭発表会」の進行のために発表者以外の学習者が順番に「司会者」を担当することになっており、「口頭発表会」には普段のクラス活動には参加しないゲストを呼ぶことがあった。

一方、「ＩＣ５－１Ａ」の授業は、早稲田大学国際教養学部の日本語授業で、早稲田大学に国際教養学部の学部生一留学生を対象にしている。筆者が担当した「ＩＣ５－１Ａ」クラスは 3 人の学習者が在籍し、教科書を中心とした授業を行った。テキストを使った活動内容が中心になっていたが、聴解、作文、ボランティアセッションの話し合いなどとビデオドラマ制作などの活動も行われた。「ＩＣ５－１Ａ」はこのような様々な活動によって大学で修学するために必要な日本語能力を身に付けることを目標としている。

このように様々な「ＩＣ５－１Ａ」の活動の中で、本節における実際の教室活動への適用の面では「ボランティアセッション」に注目したい。

「ボランティアセッション」では、「ＩＣ５－１Ａ」の学習者個人が一つのテーマを選び、そのテーマの内容を授業内のボランティア[73]、他の学習者、担当講師との話し合いや教室外の調査（文献、インタネット、インタビュー、アンケートなどの調査方法）を通じて深めていく活動を行った。「ボランティアセッション」の後半には、深まったテーマについて「発表会」を設けた。特に、「発表会」に注目したいが、「発表会」は「日本語５Ｂ」

[73] ボランティアは日本語母語話者である早稲田大学の学生（学部生）3 名が週 1 回、90 分間参加した。

「日本語６Ｂ」と同じく、レジュメの作成、学習者による司会、ゲスト（ボランティアを含む）の投入などのことを活動内容として行った。

「日本語５Ｂ」「日本語６Ｂ」「ＩＣ５－１Ａ」の実際の教室活動を通じて考えた「敬語表現化」における（レポート・調査等の）「発表会」の導入の問題について述べる。特に本稿における「敬語表現化」の観点からみた「発表会」における「人間関係」「場」などの問題について分析・考察を行う。

まず、「発表会」における「人間関係」の設定の点―発表者と聴衆の一般人同士としての設定について述べる。

上記の「チャンピオンスピーチ」と同様、「発表会」においても発表者と聴衆といった実際有り得る「人間関係」を設定することによって、学習者の「敬語表現化」における意識を高めることができると思われる。「チャンピオンスピーチ」と同様、「練習のための人間関係」ではなく、学習者が実際経験する、あるいは経験した発表者と聴衆という「人間関係」を設定することによって「敬語表現化」における意識を高めることができたと思われるのである。

実際、「日本語５Ｂ」「日本語６Ｂ」「ＩＣ５－１Ａ」の学習者にまず、母語における「発表会」や過去に経験（発表だけでなく参加を含む）について考えさせ、「発表会」における発表者と聴衆という「人間関係」について―特に発表者と聴衆という「人間関係」における普遍性について意識するようにした。その後、この授業における（日本語を用いる）「発表会」を導入し、「発表会」の「人間関係」と「人間関係」に対する認識の問題について意識させた。

このように「発表会」では、普段のクラス活動における学習者同士といった「人間関係」とは違う「発表会」における発表者と聴衆といった「人間関係」を設定、学習者にそれを認識させることによって、「敬語表現」使用や「敬語表現化」の必要に対する意識を高めることができたと思われる。また、このような「発表会」における発表者と聴衆としての設定は、一般成人同士としての「人間関係」だけでなく、発表者としての「役割・立場」と聴衆としての「役割・立場」についても認識させることができ、それに相応する「敬語表現」の使用を促し、さらに「敬語表現化」の意識を高めることができたと言えよう。

このように「発表会」における発表者と聴衆の「人間関係」の設定は、一般成人同士としての無理のない、また、学習者が実際直面し得る「人間関係」について意識することができるという点と発表者と聴衆といった「人間関係」における「立場・役割」について認識することができるという点で「敬語表現化」に対する学習者の意識を高めることができると考えられる。さらに、学習者の「敬語表現化」における意識を高めることによって「敬語表現」の指導が定着や容易になると思われる。

次は、「発表会」における「人間関係」の設定の点―ゲスト投入を通じた「人間関係」への認識の問題について述べる。

「発表会」では、いつものクラスのメンバー―クラスメート、担当講師、ＴＡ―との関係における「人間関係」における認識だけでなく、普段とは違う「人間関係」を設定することによって「敬語表現化」における意識を高めることができたと思われる。いつものクラスのメンバーだけでは、「人間関係」の三つの軸のひとつである「親疎」の観点からは「親」の関係しか接する機会がないので[74]、「発表会」におけるゲストの投入を持って、「疎」の「人間関係」への認識を促すことが期待される。

実際、ゲストは普段のクラスには参加しない人物を中心に参加してもらった。また、学習者には、「発表会」におけるゲストの参加を告げ、ゲストとの「人間関係」―「親疎」の「疎」と、それに基づく「敬語表現化」の必要性について意識させた。このようなゲストの投入とゲストの位置づけについて学習者に認識させることによって、「敬語表現化」における意識（必要性）を高めることができるのではないかと考えられる。

次は、「発表会」における「人間関係」の設定の点として、「発表会」における司会者の設定の問題について述べる。

「発表会」では「発表会」の進行役―司会者を学習者が担当するようにした。「発表会」の司会者は一人の学習者がすべての「発表会」における進行役を勤めるのではなく、すべての学習者が司会を経験できるように、発表者ごとに司会者を交代させるやりかたで実施した。司会者は、「発表会」の開会あいさつ、発表者の紹介、発表後の質疑応答時間の進行、

---

[74] 「発表会」は授業期間の後半以降に行われるので、授業開始からある程度時間が経ており、その分、クラスメートや担当講師との関係は「親疎」の軸から考えると、「親」に近いと思われる。もちろん、これは本節における例をあげている「日本語５Ｂ」「日本語６Ｂ」「ＩＣ５－１Ａ」の 2004 年の秋学期の場合である。

「発表」の終了宣言、次の発表者の紹介、「発表会」の閉会あいさつ、および、必要に応じては質疑応答時間での質問のまとめなども担当するように指導した。また、このような「発表会」における司会の際、普段とは違う表現―具体的には「丁重語」「丁重文体」―の使用について指導を行った。

このように「発表会」における司会を学習者が担当することによって、司会を担当する学習者は、「発表者」と「聴衆」とは異なる「人間関係」の軸である「立場・役割」について認識することができたと思われる。進行役としての「立場・役割」とそれに相応することば遣い―「敬語表現」の使用および「敬語表現化」の問題について認識することができるのであろう。

また、司会者としての表現を指導する際、「敬語知識」の節で確認した「丁重語」「丁重文体」の導入、理解がよりスムーズになると言えよう。「発表会」における司会者の「役割・立場」について意識させた後、司会者の表現として「丁重語」「丁重文体」を提示するので、理解や定着[75]がより容易になると思われる。

「発表会」における「場」の設定の点―「発表会場」の設置の問題について述べる。

「発表会」では、正式な「発表会」のための「発表会場」といった「場」での認識を高めるために様々な工夫をした。「発表会」といえども、もとは普段のクラス活動の延長にあるため、「発表会」を「あらたまった場」として学習者に認識させるためには、様々な設定（設置）が必要であるのである。まず、上記で述べたような発表者と聴衆としての「人間関係」、司会者としての「立場・役割」、ゲストの参加に加えて、ビデオ撮影や録音なども行った。ビデオ撮影や録音は「発表会」の後の振り返りおよびフィードバックにも使える資料になるが、自分が参加する「発表会」の内容が収録されるということによって、学習者は「発表会」や「発表会場」を「あらたまった」ものとして、「あらたまった場」として認識することもできたと思われる。

このように「発表会場」という「あらたまった場」を様々な設定によって認識させるこ

---

75 「丁重語」「丁重文体」の定着の面であるが、実際、「発表会」が終わった後、クラスのみんなの前で話す際、「丁重語」「丁重文体」を用いる場面が多くなった。「発表会」における司会者の表現として丁重語を導入する前には「丁重語」「丁重文体」の使用があまり見られなかったことをもとに考えると、導入と定着が効果的に行われたといえるのではないだろうか。

とにより、「場」への認識を高めると同時に「敬語表現化」における意識も高めることができたと思われる。

このような普段のクラス活動における工夫によって「敬語表現化」に対する意識を高め、「敬語表現化」の過程で考えなければならない様々な項目について認識させることができるのではないかと思われる。その具体的な方法としては、上記で確認できた通り「チャンピオンスピーチ」「発表会」の実施などが考えられる。

２.「敬語表現化」から見た表現行為における問題―「手紙文」「スピーチ」から見た敬語接頭辞「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」の使用様相に関する分析・考察

本節では、「敬語表現化」の概念や過程から考えた「文話」における「敬語表現」の問題について分析・考察を行う。実際の「文話」のなかで「敬語表現」はどのように使われ、どのような使用様相を表しているかについて、「敬語表現化」における「表現行為」の観点から考える。また、この節は、第Ⅰ章で確認した「敬語表現化」の概念を実際の「敬語表現」の研究にどのように適用するかを考えるための意味も持っている。

「敬語表現化」の観点から見た「敬語表現」の使用様相を考えるために「手紙文」「スピーチ」の用例を用いた。「文話」のなかで「敬語表現化」はどのように行われているのか、また、「敬語表現化要素」―「敬語表現意識」「敬語表現認識」「敬語知識」はどのように「敬語表現化」や「敬語表現」に働いているのかを「表現行為」といった観点から「敬語表現化」における意識・認識の面を中心に考える。

2.1　問題提起

日本語を用いたコミュニケーションにおいて、「敬語表現」は、「人間関係」を適切なものとするために必要不可欠な要素である。その「敬語表現」の形式の中で、質的にも量的にも中核をなしているのが敬語接頭辞「オ・ゴ（御）」（以下「オ・ゴ」）

を用いた「敬語表現」である。しかし、「オ・ゴ」を用いた「敬語化」[76]と「敬語表現」に関しては、日本語母語話者の使用は必ずしも一定だとは言えないため、日本語の事実（現状）をどう捉えるかという点、日本語教育・学習においてどのように扱うかといった点などが問題になっている。

特に「改まった場面」[77]における「敬語表現」に対する考察は、日本語の使用実態および日本語教育における重要な項目になると思われるが、その使用様相に関する考察は、十分とは言えないであろう。

「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」と「敬語化」に関しては今まで多数の研究が行われてきたが、「オ・ゴ」の付け方や「語・文」レベルでの使用の様相に集中した研究が多かったため、実際の使用の場面―「文話レベル」においての様相については明らかにされていない点があると思われる。また、「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」の過程やその意識についても考える必要があると思われる。

そこで、本節においては、「文話」の例―特に「改まった場面」における「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」の使用様相と「敬語表現化」の問題について考察するため、日本語を用いたコミュニケーションの模範例として存在し、「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」が比較的多く使われる「手紙文文例集」と「スピーチ用例集」をテキストとして用いた。「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」を分析・考察の対象としているため、「敬語表現」や「敬語表現化」の問題を全部網羅していない一部に対する分析・考察ではあるが、「敬語表現」と「敬語表現化」の問題を窺うことができると思われる。

さらに、本節はⅠ章の「敬語知識」で述べた「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」と「敬語表現化」の問題をさらに詳しく考えていくものとして位置づけしたい。

---

76 「敬語表現化」を入れて考える。

77 「改まった場面」は、「コミュニケーション主体」が「場」「人間関係」に対する総合的認識である「場面」において「丁寧に」、「改めて」認識した場合の総称である。「場面」だけでなく「媒体」の面においても「丁寧に」、「改めて」「表現」「理解」しようとする認識を持つようになると考える。

2.2 敬語接頭辞「オ・ゴ」

2.2.1 敬語接頭辞「オ・ゴ」の定義

2.2.1.1「オ」

辻村（1991）によると、「オ」は尊敬・謙譲・美化（丁寧）の接頭辞だという[78]。「大いなるもの」の意味のたたえことば「オホ」（例：おほ君、おほ神）と同じくたたえことばである「ミ」（例：み屋、み垣）が合して「オホミ」がうまれた。これは、「おほみ酒」「おほみ心」など、主として神・天皇に関する物事を表すものであった。この「オホミ」が平安時代に「オホム（ン）」、院政期に「オン」、鎌倉時代末に「オ」と転じた。室町時代には、書きことばとしては「オン」が用いられたが、話しことばとしては「オ」が普通に用いられるようになった。本来、尊敬の接頭辞であるが、御所に仕える女房達の使った、いわゆる「女房詞」（例：おでん、おなす、おひや）から、丁寧の接頭辞としても使われるようになった。また、話し手側の物事であっても、それが及ぶ相手に敬意を表す場合には「お手紙をさしあげる」のように、「オ」を用いるようになった。これが謙譲語としての用法である。「オ」は体言に付く接頭辞であるが、用言にも付くようになった。形容詞に付く形は、鎌倉時代に「心苦しく」「人わるく」「物狂はしく」などの、体言を上にした複合語に「御」を付けたことからおこったものと考えられている。

「オ」が和語であるところから、和語に付くのが一般的であるが、漢語でも「正月」「時間」「天気」「客」など「オ」のつくものは少なからずあって、「おビール」「おニュー」の

---

[78] 本稿における敬語形式の分類・述語は、蒲谷・川口・坂本（1998）に従っているが、「オ・ゴ」の起源・使用様相を述べる部分では、参考文献である辻村（1991）の記述をそのまま引用した。以降の「ゴ」や「オン・ミ・ギョ」に対しても同様。本稿や本節における敬語形式の分類の問題については以降の**「2.2.2 敬語接頭辞「オ・ゴ」の先行研究」**で詳しく述べる。

敬語の分類については、第Ⅰ章の「**4.1.3「敬語表現意識」の問題―「尊重」の意識」**の部分ですでに述べているが、尊敬語・謙譲語・美化語という辻村（1991）の 3 分類に対し、蒲谷・川口・坂本（1998）は、大きく「概念敬語」と「文体敬語」の二つにわけ、「概念敬語」には「直接尊重語」「間接尊重語」「恩恵直接尊重語」「恩恵間接尊重語」「丁重語」「尊重丁重語」「相手尊重語」「自己卑下語」「美化語」があり、「文体敬語」には「丁寧文体語」「丁重文体語」があるとしている。

ように外来語に付くこともある。田中（1972）によると、「オ」の付く被調査語 1396 語のうち、「オ+和語」は 78.9%、「オ+非和語」は 21.1%であるとしている。

2.2.1.2「ゴ」

辻村（1991）によると「ゴ」は尊敬・謙譲・美化の接頭辞であり、本来、中国から敬語接頭語であると思われる。基本的に漢語であるので、漢語に付くのが一般的であるが、まれに和語に接続することがある。たとえば、「ごゆっくり」「ごもっとも」などがある。

田中（1972）によると、「ゴ」が付く被調査語 563 語のうち、「ゴ＋漢語」は 99.6%、「ゴ＋非漢語」は 0.4%であるとしている。

意味、用法の面においては「オ」と共通する部分もあるが、「オ」が物事を「きれいに・やさしく」表現するに対し、「ゴ」は「立派に」表現するという性質がある。

2.2.1.3「オン・ミ・ギョ」

本節におけるテキストには、その用例は少ないが、「御」の他の使用として「オン」「ミ」「ギョ」がある。しかし、その使用例はごく限られたことばでしか確認できない。また、現代日本語において「オ・ゴ」の使用に比べて「オン・ミ・ギョ」の使用は一般的なものではなく、生産的な使用や使用用例を見せているとは言えないのではないかと思われる。

したがって、本節においては「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」や「敬語表現化」の問題を中心にして分析、考察を行った。

2.2.2 敬語接頭辞「オ・ゴ」の先行研究

「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」に関しては、今まで多数の研究が行われてきた。

柴田（1957）は「日本語アクセント辞典」から系統的無作為抽出法によって得た 4830 語に対し、接頭辞「オ」をつけておかしい場合には×、おかしくない場合には○を記入してもらい、その結果を集計・分析した。田中（1972）は国立国語研究所の「新聞の語彙調

査」の資料についての調査、分析した。菊地（1994）は「先生にお手紙をさしあげた」という言い方をどのように思うかについてアンケート調査を実施した。上に提示した研究以外にも数多くの先行研究があるが、ほとんどが「語・文」レベルにおいての「オ・ゴ」の付き方に関する研究である。

本節では「語」レベルにおける「オ・ゴ」の付き方の研究にとどまらず、実際使われている単位として考えられる「文話」を視野に入れ、「オ・ゴ」の使用様相やその「敬語表現化」の問題、特に「表現」の面に注目する。

様々な「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」と「敬語表現化」の問題のなかでも、「オ・ゴ」を用いた「直接尊重表現」「間接尊重表現」の「敬語表現化」の問題について表現されたものから接近し、分析・考察を行なうが、「尊重」（「直接尊重」「間接尊重」）の概念・用語は蒲谷・川口・坂本（1998）から取り入れたものである。蒲谷・川口・坂本は「尊重」の概念について次のように述べている[79]。

> （「おっしゃる」「お書きになる」などは）…ある人物を＜高くする＞という「敬語的性質」を持ち、そうした「敬語的機能」を果たす、という点で最も「敬語らしい敬語」と言えるかもしれない。その意味で「尊敬語」という名称でもよいのだが、現在の「敬語表現」においては、「尊敬」という言葉が必ずしも適切でない場合も多いため、「尊敬」ではなく、すべての人の人格を「尊重」するという意味で、「尊重語」という術語で呼びたいと思う。

現代社会においては「尊敬」という述語よりは、すべての人の人格を「尊重」する意味の「尊重語」という述語が最も適切であると考えられる。さらに、蒲谷・川口・坂本（1998）によると、「敬語」の概念の部分に「直接」関る動作主体を「高くする」という「敬語的性質」を持っている表現を「直接尊重語」（他の分類では「尊敬語」にあたる）、概念の部分

---

79 この部分の引用はすでに第Ⅰ章の「**4.1.3「敬語表現意識」の問題―「尊重」の意識」**の節で行っているが、「尊重」の意識や概念から本節におけるテキストを考えていくということを周知してもらうため、さらにそのような「尊重」の観点から「敬語表現化」の問題を考えていくということについて周知してもらうため、もう一回引用を行った。
本節における以降の内容は敬語の分類や用語における考え方を述べているが、用語の問題は単なる「呼び方」の問題ではなく、観察対象（研究対象）をどのような観点からみているのかを決めるファクターの一つであると考えられる。

に直接関る動作主体は「高くしないで」、その動作に間接的に関る人物を「高くする」という「敬語的性質」や「敬語的機能」がある表現を「間接尊重語」（他の分類では「謙譲語」にあたる）と、位置付けている。

なお、本節においては、分析・考察の対象を必ずしも「語」レベルで切り取るのではなく、「オ・ゴ」の「敬語表現」という点を重視し、やや広めに切り取っている。また、「文話」全体における「敬語表現化」の過程・意識の面から分析・考察を行う。

2.3 テキスト

2.3.1「手紙文」

2.3.1.1「手紙文」の定義および性質・特徴

本節においては「手紙文」のことを、一定の書式（たとえば、前文、本文、末文、後付、副文で構成されて、前文には起首、時候の挨拶、安否の挨拶などを入れ、末文には結びの挨拶、結語などを入れてはじめて完成されるという書式）によって書かれた「文章」だけでなく、特別な形式のない略式の手紙、はがきやメモなども含めて考える。

つまり、コミュニケーションのために（一定の「表現意図」を叶えるために）一定の「相手」に向かって書かれたものとして考える[80]。

「手紙文」は、他の「文章表現」とは違って「相手」との関係が明確であるという特徴がある。「相手」との関係が明確であるため、「相手」が「自分」より上位者である場合はそれに従う「敬語表現化」が行われる。また、「手紙文」は、「手紙文」という「文章表現」の性質上、「相手」が必ずしも上位者ではなくとも「丁寧に」表現するようになるという特徴もある。それは、「相手」に対する「尊重」の気持ちや「敬意」などを表す手段が文字を使用した「文章」しかないためではないかと考えられる。「手紙文」において「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」が多用される点は上記のような特徴に起因していると考えられる。

---

80 市販の「手紙文文例集」は、いわゆる正式な「手紙文」だけでなく略式の「手紙文」や業務関係の「手紙文」なども扱っているため、「手紙文」の規定をやや広めに捉えている。

なお、「手紙文文例集」は「手紙文」を集めたもので、「手紙文」における「表現」「理解」の模範例としての性質を持っていると本節では規定する。

2.3.1.2「手紙文文例集」の定義および種類

本節においては以下のような市販の「手紙文文例集」からの「手紙文」をテキストとして用いた。「手紙文文例集」選定の際、現代日本語の使用事実にできるだけ接近するために1990 年以降に出版されたものを選んだ。また、著者、編者の言語的「癖」を最小にするため、複数の「手紙文文例集」を用いた。

なお「手紙文文例集」はグループ１とグループ２に分けてある。グループ１は本節における「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」と「敬語表現」を分析・考察するために主に用例を収集したもののグループで、さらに「スピーチ用例集」との比較のために任意にわけたグループである。本節における「スピーチ用例集」は 5 冊をテキストとして扱っており、その 5 冊の「スピーチ用例集」とのバランスを取るためである。つまり、テキストとしては 10 冊の「手紙文文例集」を使用しているが、そのうちの 5 冊を「スピーチ用例集」との比較に使用しているのである。以下は「手紙文文例集」のグループ１である

【グループ１】

〇現代文書研究会編（1990）『そのまま使える手紙の書き方全書』池田書店（「そのまま」と略称。以下、同様）
〇輪辻潔（1997）『すぐに役立つ大活字 BOOK’ｓ　わかっているようでわからない手紙の書き方』三省堂出版社（「大活字」）
〇木庭久美子（1999）『すぐ書ける　お礼の手紙・はがきの手帳』小学館（「お礼」）
〇講談社編（2001）『あいさつ・スピーチと手紙の事典』講談社（「あいさつ」）
〇主婦の友社編（2001）『ＣＤ－ＲＯＭ付　手紙・はがき・文書文例大事典』主婦の友社（「CD」）

以上の「手紙文文例集」５冊からの 500 例と、以下の 5 冊からの用例をテキストとして利用した。以下は「手紙文文例集」のグループ２である。

【グループ２】

〇主婦と生活社（1993）『すぐ役立つ若い女性の手紙　実例集』主婦と生活社（「若い女性」）

〇中川越（1988）『目上の人への手紙文』永岡書店（「目上の人」）

〇片岡智志（1996）『事例別・すぐ使える　手紙・はがき文例事典』小学館（「事例」）

〇松平泰臣（1998）『新・実用手紙百科』有紀書房（「実用」）

〇ひろば制作室編（1998）『てがみ広場　女たちのおしゃべりネットワーク』青樹社[81]

2.3.2「スピーチ」

2.3.2.1「スピーチ」の定義および性質・特徴

本節においては「スピーチ」のことを一定の形式に従って行われる「談話」だけでなく一定の形式がなくても[82]、式辞、祝辞、冠婚葬祭や各種の集会おいてのあいさつなど、「改まった場」において、コミュニケーションのために（「表現意図」を叶えるために）一定の「相手」に向かって発せられたものとして考える。また、「スピーチ」は「手紙文」と違って「音」「音声」をその「表現形態」としているが、本節においては、「音」「音声」によるコミュニケーション上の働きや影響について考察するのではなく、「スピーチ」における「敬語表現化」と「敬語表現」を主な分析・考察対象としているため、音声化する前の段階である「スピーチ」の原稿を研究の対象とする[83]。

「手紙文」は「相手」との「人間関係」や「題材」などを考え、「丁寧に」表現するという特徴があるが、「スピーチ」は「相手（聞き手）」との「人間関係」だけでなく、特に

---

81 テキストとして扱ったが、本節における文例はない。

82 「スピーチ」においては「手紙文」のような比較的に厳格に決まった形式はないと考えられる。もちろん、「スピーチ」の種類によって習慣的に使われる「決り文句」のような表現（例えば、結婚式の「スピーチ」においての「末長くお幸せに」など）はあるが、「手紙文」の形式みたいに「厳格に決まっている」とは言えないと考えられる。
　ただし、「一般的なスピーチ」は次のような構成を持っていると考えられる。
　はじめのあいさつ→核となる内容→終わりのあいさつ

83 「音」「音声」による干渉（影響）を排除するためである。

「場」に対して「認識」―「敬語表現認識」、「丁寧に」、「改まった」表現をするという特徴がある。さらに、「スピーチ」は、「手紙文」と違って不特定多数の「相手」を持つ場合も多い。

また、「スピーチ」は形式的には「談話」の形をとっているが、普段の日常生活ではあまり使わない「敬語表現」や構成を持っていると考えられる。それは上記において確認したように、「スピーチ」がある程度、特別な「場」の認識をもとに使われているからだと考えられる。そのような面から考えると、「スピーチ」は「文章」に近い、「文章表現」的な性質を持った「談話表現」であるとも言えよう。

「スピーチ用例集」は「スピーチ」を集めたもので、「スピーチ」における「表現」の模範例としての性質を持っていると考える。

2.3.2.2「スピーチ用例集」の定義および種類

本節においては以下のような市販の「スピーチ用例集」からの「スピーチ」をテキストとして用いた。「スピーチ」選定においては、「手紙文」と同じ基準を適用した。

〇永田書店編集部（1995）『すぐに使える　式辞・あいさつ実例百科』永田書店（「式辞」）
〇藤村英和（1998）『葬儀・法要のあいさつ』西東社（「葬儀」）
〇ブライダルスピーチ研究会（1998）『新郎・新婦のスピーチ実例集』日本文芸社（「新郎」）
〇講談社編（2001）『あいさつ・スピーチと手紙の事典』講談社（「あいさつ」）
〇成美堂編集部（2001）『短いスピーチ大事典 1000』成美社（「大事典」）

以上の「スピーチ用例集」から 500 例のスピーチを収集し、テキストとして用いた。

2.3.3 テキストの意義

本節は「改まった場面」における「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」の様相と「敬語表現」の使用様相を主な分析・考察の対象としている。

「手紙文」「スピーチ」は、「人間関係」や「題材・内容」に対する「敬語表現認識」、「敬

語表現化」における「敬語表現意識」、「敬語表現化」における様々な「敬語知識」をもとに「敬語表現化」を行っていると思われる。

「手紙文」「スピーチ」はコミュニケーションの「主体」がそのような様々な「敬語表現化要素」をどのように認識し、どのように適用させたのかを調べるための資料としての意味を持っていると思われる。「手紙文文例集」と「スピーチ用例集」は、実際の「自然の文話」ではないため、ある程度作者・編者の言語的な習慣や個人的な意図が影響している点を認めざるをえないが、「敬語表現の模範的な例」のひとつとして存在し、それを日本語使用者に訴えている、あるいは、提示しているという面もあると言えよう。本節ではそのような「敬語表現にいける模範的な存在」としての「手紙文文例集」と「スピーチ用例集」の性質に注目し、「敬語表現化」のあり方とそこから起因した「敬語表現」の使用様相について分析・考察を行うことによって、「敬語表現化」の問題を考えるひとつの指標を提示できるのではないかと考えている。また、そのような点に「手紙文文例集」「スピーチ用例集」の「敬語表現化」と「敬語表現」の研究における意義があると考えている。

また、「手紙文文例集」と「スピーチ用例集」は、「敬語表現化」が行われる過程において、「表現主体」が「敬語表現化」のために意識・認識しなければならない項目の多くを「改まったもの」として捉えているという共通点があり、また「手紙文」―「文章表現」、「スピーチ」―「談話表現」という性質を持っているので、本節において目指している「改まった場面」―「改まった文話」における「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」の使用様相に接近しやすいという面もあると思われる。「敬語表現化」と「敬語表現」に対する一部の観察ではあるが、第Ⅰ章で考えた「敬語表現化」の問題を「敬語」「敬語表現」の分析・考察にどのように適用するのかを考えるひとつの試みになるのではないかと考えている。

次は、土屋（1987）の「書きことば」の特徴であるが、「手紙文」と「スピーチ」の「文章」的な性質を考えるための参考資料として提示しておく。

① 書きことばの方が話しことばより敬意の高い表現が選ばれる。

ｉ）ぶっきらぼうな口を聞く人はいるが、ぶっきらぼうな「文章」を書く人は少ない。

ⅱ）書きことばは「相手」との距離を意識しやすくなるため、敬語表現が多くなると思われる。

ⅲ）書きことばは時間をかけて冷静に「自分」と「相手」の関係を考えられる。それで何らかの待遇意識を持った場合、それを表出するために、敬語表現が必要となる。

②書きことばは「間接尊重表現」が出やすい。

話しことばは話し手が「自分」の位置を知るゆとりが少なく、即座に表現しなければならないため、「間接尊重表現」が使いにくい。

③書きことばの方が比較的にはまった敬語形式が多い（話しことばの方は自由な敬語形式が多い）。

日本語の「わきまえ方式」の敬語形式は固定的な人間関係を社会分化の習慣にしたがって、どう認識して表現するかという形式である。この人間関係をわきまえることは、日本語の書きことばの中で、一層強く認識される。たとえば、「手紙文」の書き方は厳しく形式が決まっている。

④書きことば・話しことばには、それぞれ特質の違いによる敬語表現がある。話しことばでは、相手の前に姿を見せるということで、身ふり・表情などで敬意を表すことができる（→「敬語行動」）。書きことばは「敬語表現」以外に敬意を表現する手段がない。したがって、「敬語表現」に集中することができる。

2.4 分析の方法

5 冊の「手紙文文例集」（【グループ１】）と 5 冊の「スピーチ用例集」から 500 例ずつ収集した 1000 個の「手紙文」と「スピーチ」を主な資料として扱った。他に「手紙文」の分析のためには別の 5 冊（【グループ２】）からの用例も追加している。

「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」の判定や数値は次のような方法で行った。以下は「手紙文」の用例である。「スピーチ」においても同様な方法を適用した。チェックの対象とし

ては、「オ・ゴ」を用いた「直接尊重表現（場合によっては、「直接尊重語」。以下、「直接尊重表現」）[84]」と「間接尊重表現（場合によっては、「間接尊重語」。以下、「間接尊重表現」）を主な対象としている。それは、「直接尊重表現」と「間接尊重表現」は「オ・ゴ」を用いた様々な「敬語表現」の中でも過半数を占めているため、その使用例を多数確認できるからである。また、「敬語表現化」における「表現主体」の「意識」および「人間関係」「場」に対する認識の問題を分析・考察が比較的鮮明であると考えたからである。

【用例１】「手紙文」

「表現主体」：結婚祝いをもらった夫婦（杉村夫婦）

「表現主体」の「表現意図」：上司からの結婚祝いへのお礼

「理解主体」：結婚祝いをくれた上司（高山）[85]

拝啓

　秋たけなわの候、皆様にはいよいよご清祥のことと、およろこびもうしあげます。

　このたび、私どもの結婚に際しましては、ごていねいな　ご祝辞ならびに結構なお品までちょうだいいたしまして、ありがとうございました。

　お贈りいただきました美しいペアのワイングラスは、さすがにご趣味豊かな高山様ご夫妻のお人柄をしのばせるものと、感激しております。終生、私どもの記念品として大切に使わせていただきます。

　未熟な二人ではございますが、ご祝辞いただきました　お言葉をひとつひとつかみしめながら、心温まる家庭をつくっていきたいと思っています。今後とも変わらぬご指導のほど、お願い申しあげます。

　改めてごあいさつに参上するつもりでおりますが、とりあえず書面にて御礼申し上げます。

---

[84] 場合によっては「直接尊重語」を対象にしている。しかし、「文」「語」の区別は厳密には行っていない。それは「敬語」の「語」「文」の分析・考察を本節の目標としてはいないからである。本節における分析・考察の目標は、テキストの「敬語表現」における「敬語表現化」の問題を考えることにあるため、「敬語表現化」が行われたと考えられる・認定できる部分を分析・考察の対象としている。従って、「表現」という用語を用いて「敬語表現化」が行われた部分を指示している。「間接尊重表現」も同様である。

[85] 「表現主体」「表現意図」「相手」の記述は「文章」としての「手紙文」を「敬語表現化」の観点から分析、考察するために筆者が付けたものである。また「表現主体」「表現意図」「相手」の用語は、蒲谷・川口・坂本（1998）から取り入れた。「スピーチ」の場合も同様である。

敬具

十月五日

杉村　実

絵里

高山　義雄様

（「お礼」、ｐ59）

ご趣味のように（白い四角）に入っている部分が「直接尊重表現」、お贈りいただきましたのように（網掛けの四角に下線）に入っている部分が「間接尊重表現」を表している。「表現」の分類においては「文話」における「人間関係」「内容」「方向性」「待遇意識」などの観点から総合的に考えて判断した。

例えば、ご趣味という表現は、この「手紙文」における「相手」である高山に属しているものとして認定できる。尊重して表現しようとする、つまり「敬語表現化」を行おうとする「相手」に属している物事に対して「オ・ゴ」を付けて「敬語表現化」している―「敬語表現」として使っている。ご趣味は「敬語」の概念の部分に「直接」関る動作主体を「高くする」という「敬語的性質」を持っているため、「直接尊重表現」として判断した。

お贈りいただきましたは概念の部分に直接関る動作主体は「高くしないで」、その動作に間接的に関る人物を「高くする」という「敬語的性質」や「敬語的機能」があると考えられるため、「間接尊重表現」として判断した。

2.5「手紙文」「スピーチ」における「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」の問題

2.5.1「手紙文」「スピーチ」の全体の構成に関する分析・考察

「手紙文」「スピーチ」という「文話」の全体の構成という観点から、「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」の使用様相を分析した結果、「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」は「文話」―「手紙文」「スピーチ」において「相手」との関りがあると認定できる部分に使われるということがわかった。特に、最初と最後の（形式的）あいさつ、お礼の部分に用いられる場合が多かった。

以下は、「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」が、「相手」との関りのある部分、特に、最初と最後の（形式的）あいさつ、お礼の部分に用いられている用例である。

【用例２】「手紙文」
「表現主体」：小学校に入学した子供の両親（豊田）
「表現主体」の「表現意図」：次男健次郎の小学校入学祝いへのお礼
「理解主体」：小学校入学祝いを贈ってくれた目上の人物（秋山）

拝啓

桜前線北上の便りも聞かれるころとなりました。

皆様には、お元気でお過ごしのことと、およろこび申し上げます。[86]

このたびは、次男健次郎の小学校入学に際し、お心こもるお手紙に、お祝いの文具券までいただきまして、まことにありがとうございました。

さっそく、ちょうだいした文具券で、筆箱やノートなどの学用品を求めさせていただきました。健次郎は大喜びで、机から出したりしまったりして眺めております。

おかげさまで、ついこの間生まれたように思っておりましたのに、もう小学生でございます。昨日も姉の恵子に小学校の様子などいろいろ質問したりして、入学式を待ちかねております。なにぶんにものんびり育てておりますので、親としては多少不安もございますが、なんとかがんばってほしいと願っております。

近いうちに子供たちを連れまして、お礼かたがたうかがわせていただきたいと存じております。

末筆ながら、奥様にもどうぞよろしくお伝えください。

花どきのならいでとかく気候不順の折から、おからだにはくれぐれもお気をつけください。

まずは、お礼のみにて失礼いたします。

敬具

三月二十四日

豊田　修

86 用例における「オ・ゴ」を用いた敬語表現全部に白い四角や網掛けの四角に下線を用いて表しているのではない。考察対象となる表現だけにマーキングしているのである。

陽子

秋山清一　様

（「お礼」、ｐ46）

【用例３】「スピーチ」

「表現主体」：新婦の母親

「表現主体」の「表現意図」：結婚披露宴の客にあいさつをする

「理解主体」：結婚披露宴の客

「場」：結婚披露宴場。不特定、複数の「相手」が集まっている

皆さま、私は新婦の母、伊藤幸枝でございます。本日は田中俊夫、和枝の結婚披露宴の宴にお集まりいただきまして、ほんとうにありがとうございます。

ご存じのように、新郎は早くご両親を亡くされ、新婦の父もあいにく病床にありますので、私が両家を代表して、ひと言お礼を申し上げたいと存じます。

本日は二人の門出をこのように盛大にお祝いくださいましたうえ、ご厚情あふれるお言葉の数々をちょうだいいたしまして、まことにありがとうございます。

ご存じのとおり、二人ともふつつか者でございます。今後とも皆さまのご指導をたまわりますよう、お願い申し上げます。

なお、新婦の父は、昨日までなんとか皆さまにごあいさつだけでも申し上げるつもりでいたのでございますが、どうしてもまいることができず、皆さまにお詫び申し上げるように申しておりました。よろしくご理解くださいますよう、併せてお願い申し上げる次第でございます。

（「式辞」、pp118－119）

主に「相手」との関りのある部分に「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」が行われている用例である。

「手紙文」「スピーチ」という「文話」自体が「相手」との関りがあってからこそ成立するという性質を持っているが、そのなかには、（形式的）あいさつ、お礼の部分のように「相手」と密接な関係のある部分と「自分」の計画、抱負などを述べる部分のように「相

手」との関係の認定が難しい部分がある。そのような部分のなかで「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」は「手紙文」「スピーチ」ともに「相手」との関りのある部分に主に使われている傾向がある。

もちろん、他の「敬語表現化要素」としての「敬語知識」（例えば、「レル」「ラレル」など）を働かせて「敬語表現化」を行うとしても「敬語表現化」は認められると思われる。しかし、「手紙文」「スピーチ」のような「改まった文話」における「敬語知識」の適用、つまり、「敬語形式」の面から分析した結果、他の「敬語形式」より「オ・ゴ」を用いた「敬語形式」の使用が比較的多いという点が確認できた。

特に、（形式的）あいさつ、お礼の部分、つまり比較的固定した性質を持っている部分において「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」を用いて「敬語表現化」を行っていることが確認できたが、それは、他の「敬語形式」と比べて「オ・ゴ」を用いた「敬語形式」のほうが「敬意度（あるいは待遇度）」が高いという「敬語表現化」における意識、あるいは知識が働いたからではないだろうか。「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」は、他の「敬語表現」に比べて「敬意度」が高いため、決められた表現であり、「質の高い敬語表現」が要求される部分である（形式的な）あいさつやお礼を述べる部分などによく使われるのではないだろうか。

また、「手紙文」と「スピーチ」いった「文章」「談話」の「媒体」の性質よりは「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」の性質、つまり、形式的である点、「改まり度」が比較的高い点、「固い感覚」を持っている点、「敬意度」が高いといった点が働いた結果であると考えられる。「相手」との関りのある部分については「丁寧に」表現しようとする「敬語表現意識」が働いた結果、「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」を多用するようになったと考えられる。

下の用例は、「手紙文」からの用例であるが、上記で確認した「敬語表現化」の過程と同様のものが推測される。

【用例４】「手紙文」
「表現主体」：縁談を勧められた男性サラリーマン
「表現意図」：自分の縁談を断る
「相手」：目上の仲介者

先日はたいへんおもてなしくださってありがとうございました。その節はいろいろとご心配くださいまして、ご厚情ありがたくお礼申し上げます。

あの時のお話につきまして、その後、十分に考えてみましたが、やはり今の自分にはまだ結婚は早すぎるように思えます。サラリーも少ないうえ世間というものを十分に見ないうちに家庭を持つことは、どうにも不安でなりません。まだあとニ、三年は仕事に専念し、勉強もつづけたいと考えております。

まことに申しわけございませんが、今回のお話は一応白紙にしていただきたく、あしからずご了承のほどお礼をかねてお願い申しあげます。

謹白

（「大活字」、ｐ102）

「形式的なあいさつ」の部分に、「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」を集中して使うという傾向は以下の用例のような「あいさつ状」において確認できる。「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」―特に「尊重表現」は冒頭と結尾の部分に現れるだけで、「本文」および「自分」の状況・これからの計画などについて述べる部分にはあまり使われないということが確認できる。

以下の文例を通じて推測できる「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」の性質としては「形式的」である、「改まり度」が比較的に高い、「固い感覚」がある、「敬意度」が高いということなどが挙げられるのではないだろうか。

【用例５】「手紙文」
「表現主体」：定年退職をした女性
「表現意図」：定年退職のあいさつをする。
「相手」：教育関係者、友人、知人

謹啓　春風が心地よい季節となりました。皆様にはご清栄のこととお喜び申し上げます。さて、私こと，このたびＹ市立W小学校校長を最後に定年退職いたしました。Ｋ大学教育学部を卒業後、教育界に入りまして三十八年、学校教育一筋にやってこられましたのも、

多くの方々のすばらしい出会いがあったからこそです。今はただ感謝の念でいっぱいです。ありがとうございました。

しばらくは在職中にたまっておりました雑事の整理をおこない、いずれは地域社会に奉仕できる仕事につきたいものと考えております。

どうぞ、これからも変わらぬご指導ご支援を賜りますようお願い申しあげます。

末筆ではございますが、長年にわたるご厚誼に感謝いたし、あわせて皆様の末長い幸せをお祈り申し上げます。

右、略儀ながら退職のご挨拶まで。

謹言

（「あいさつ」、p468）

【用例６】「手紙文」

「表現主体」：転職した男性

「表現意図」：転職のあいさつをする。

「相手」：取引先および知人

向夏の折、皆々様にはご清祥のこととお喜び申しあげます。

さて、私儀、このたび株式会社Ｓ食品を円満退職し、六月十日よりＨフーズ株式会社開発部に勤務することになりました。前在職中は、公私にわたり格別のご支援ご高配を賜りましたこと、改めて衷心より御礼申し上げます。

新会社での仕事は開発部ということでもあり、これまでの私の経験をより生かせるセックションかと存じます。

なにとぞ旧に倍するご指導ご支援をお願い申しあげます。

右、略儀ながら書中にて、ご挨拶申し上げます。

（「あいさつ」、ｐ467）

【用例７】「手紙文」

「表現主体」：社会人の成人

「表現意図」：旧師に感謝の気持ちを込めた年賀状を出す。

「相手」：昔の恩師

新年おめでとうございます。

先生にはおげんきでご越年のごとと存じあげます。平生ごぶさたばかりしておりまして申し訳ございません。

どうぞ今年もよろしく御指導、ご叱正くださいますようお願い申しあげます。

私も社会に出まして元気に勤めておりますからなにとぞご安心くださいますよう、いろいろなできごとに出あうにつけて、先生の御教訓を思い出してありがたく思っております。

どうぞ、ますますご健康にお過ごしくださいますようお祈り申し上げます。

まずは新年のごあいさつまで。

（「実用、ｐ26」）

【用例８】「手紙文」

「表現主体」：東京在住のサラリーマン

「表現意図」：仕事について語る暑中見舞いをする。

「相手」：知人

暑中お見舞い申し上げます。

東京はまさに連日の猛暑ですが、御地にてはいかがおすごしでしょうか。

四月に営業部に移ってから、もう四ヶ月がすぎようとしています。

最近、やっとセールズの仕事におもしろさを感じてきました。夏の日差しの中を歩き回るのはたいへんですが、仕事を終えて仲間と飲むビールの味は格別です。

まだまだ暑い日が続くそうですので、ご自愛くださいますようお祈り申し上げます。

（「そのまま」、ｐ71）

【用例９】「手紙文」

「表現主体」：成人になって成人祝いをもらった男性（土屋）

「表現意図」：成人祝いへのお礼

「相手」：成人祝いを送ってくれた目上の男性（佐藤）

拝啓

例年にない寒さが続きますが、皆様、お元気でお過ごしのご様子、およろこび申し上げます。

先日は成人式のお祝いをお贈りいただきまして、まことにありがとうございました。いただきましたお祝いで、成人の記念となるようなものを求めたいと思っております。

成人式を迎えたと申しましても、なにぶんにも親がかりの学生の身、まだまだ一人前とはいえません。しかし選挙権も与えられ、社会的には大人とみなされるわけですから、これからは一人の人間としての自覚を持って行動しなければと思っております。

なお、両親からもくれぐれもよろしくとの伝言でございます。

ほんとうにありがとうございました。

季節柄、くれぐれもご自愛ください。

敬具

一月二十日

土屋浩一

佐藤茂樹様

（「お礼」、ｐ54）

2.5.2「手紙文」「スピーチ」の「表現形式」に関する分析・考察

2.5.2.1 名詞系の「直接尊重表現」と動詞の「間接尊重表現」の「敬語表現化」に関する分析・考察

「手紙文」と「スピーチ」における「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」は、次のような「表現形式」の構造で用いられる傾向があった。

オ・ゴ名詞系[87]：直接尊重表現　（＋）[88]　オ・ゴ動詞：間接尊重表現

以下は「手紙文」と「スピーチ」から収集した「敬語表現」を文単位で切り、提示した例である。「文話」の全体の提示ではなく、文単位で提示したのは、まず、上記で示した「表現形式」の存在とその実態を確認するためである。

【「手紙文」】

（例文 18）師走の折、貴社のますますのご発展をお祈り申し上げ、心より御礼申し上げます。（「お礼」、ｐ96）

（例文 19）そこで先輩、そして奥さまのお力をお借りしたいのですが、先輩の会社は女性が半分以上と聞いております。（「大活字」、ｐ83）

（例文 20）何か支障がおきましてはご迷惑をおかけすることになると思います。せっかくのお言葉ですが、…（「大活字」、ｐ120）

（例文 21）先般はゴルフのお誘いをお受けしながら、家業に追われてご辞退申し上げ、失礼いたしました。（「そのまま」、ｐ172）

（例文 22）つきましては、先生のお力をおかしいただきたいのですが、この身勝手なお願いをお容れいただけませんでしょうか。（「そのまま」、ｐ184）

（例文 23）また、スピーチのご指名を受けておりましたが、そちらに関してもご迷惑をおかけすることになり、まことに心苦しく存じます。（「CD」、ｐ338）

【「スピーチ」】

（例文 24）なにしろ北海道は初めての経験ですので、皆さんのお力をお借りしたり、お知恵をお借りしたりしなければならないことも多いことでしょう。（「式辞」、p394）

（例文 25）どうかこれまで同様、ふたりにご指導とお力添えをお願いします。（「新郎」、

---

87 「名詞系」は、品詞の分類における「名詞」と動詞の連用形で「名詞」と同様の働きをするものをまとめて指す。品詞の分類では「動詞」の属するが、「文話」および「文」における使用に注目した述語である。動詞の連用形で「名詞」と同様の働きをするコトバの例としては、「誘う」の連用形である「誘い」のようなものがある。なお、この述語は本節の考え方によるものである。

「オ・ゴ名詞系」の問題については、第Ｉ章の 4.3.3「敬語知識」の問題―「オ・ゴ～ダ」とその周辺の部分ですでにその概要を述べているが、本節でさらにくわしく見ていく。

88 （　）を付けたのは「直接尊重表現」と「間接尊重表現」が用例のなかででつながった形で出現する場合とそうでない場合があるということを示すためである。

p159）

（例文 26）本日は皆様、ご多用のところをお集まりいただき、まことにありがとうございます。（「あいさつ」、p170）

（例文 27）田畑さん、これを機に今後いっそうのご精進をお祈りするとともに、いつまでもご状健で、そして A 町袖の伝統を継承する後進へのご指導と育成を重ねてお願い申し上げます。（「あいさつ」、p217）

（例文 28）どうか生前の故人にお寄せいただきました　ご厚誼、ご厚情を今後も変わらずご遺族の方々に賜りますよう、切にお願い申し上げます。（「葬儀」、p87）

テキストとして用いた「手紙文文例集」からの用例、500 例を対象として調べた結果、次のような事が確認できた。

【表２】「手紙文文例集」の 500 例における「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」の様相―「直接尊重表現」と「間接尊重表現」を中心に―

「手紙文」	「直接尊重表現」	「間接尊重表現」
名詞系	1763[89]（82.89%）	432（28.00%）
動詞	364（17.11%）	1111（72.00%）
計	2127（100%）	1543（100%）

【表２】は、500 例の「手紙文」の中の「敬語表現」を調べた結果である。

名詞系に「オ・ゴ」を付けて「直接尊重表現」として使用している例の数が 1763 例（「直接尊重表現」全体の 82.89%）で、動詞に「オ・ゴ―イタダク」「オ・ゴ―申シ上ゲル」などの敬語形式を用いて「間接尊重表現」として使用している例の数が 1111 例（「間接尊重表現」全体の 72.00%）であった。

この結果は、「手紙文」における「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」が、名詞系には「直

[89] 表の数字は次のような方式でカウントした。「なんとかお心当たりへご紹介願えませんでしょうか」のような「敬語表現」―「文」が「手紙文」にある場合、名詞の「心当たり」に「オ」を付けた「お心当たり」は「直接尊重表現」として使用されていると認定した。したがって、名詞の「直接尊重表現」の一つとしてカウントする。また、動詞の「紹介する」に「ゴ～願ウ」を用いた「ご紹介願えませんか」は「間接尊重表現」として使用されていると認定し、それを動詞の「間接尊重表現」の一つとしてカウントした。「スピーチ」の場合も同様である。

接尊重表現」として、動詞には「間接尊重表現」として行われる傾向が存在しているということを示していると言えよう。

【表３】は「スピーチ」の用例、500 例における分析結果であるが、「手紙文」と同様、「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」は、名詞系には「直接尊重表現」として（85.74%）、動詞には「間接尊重表現」として（75.79%）行われる傾向があるということが確認できる。

【表３】「スピーチ用例集」の 500 例における「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」の様相―「直接尊重表現」と「間接尊重表現」を中心に―

「スピーチ」	「直接尊重表現」	「間接尊重表現」
名詞	2068（85.74%）	323（24.21%）
動詞	344（14.26%）	1011（75.79%）
計	2412（100%）	1334（100%）

「手紙文」と「スピーチ」のように「媒体」の異なる「文話」であっても、「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」は、名詞系には「直接尊重表現」として、動詞には「間接尊重表現」として行われるということは、「改まった場面」における「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」および「敬語表現」の使用様相には共通する点があるからであろう。以下の節である 2.5.2.2 と 2.5.2.3 では、その「敬語表現」に共通する「敬語表現化」における「表現主体」の「敬語表現化要素」―「敬語表現意識」「敬語表現認識」「敬語知識」への認識を中心に分析・考察していく。

2.5.2.2 動詞の「間接尊重表現」としての「敬語表現化」や「敬語表現」の使用様相に関する分析・考察

以下は、「手紙文」と「スピーチ」からの例である。「敬語表現」の使用様相を確認するために、まず、「文」単位で切り取った。

【「手紙文」】

例文 29）その折の感想などを、十一月三十日までに四百字詰原稿用紙十枚前後におまとめいただければ幸いでございます。（「そのまま」、pp167－168）

例文30）なお、さらにお許しいただければ、帯、小物、草履、バッグも含め、一式借用できたらと存じます。ほんとうに厚かましいのですが、どうかお聞き届けいただけますよう、お願い申し上げます。（CD、ｐ259）

例文 31）どうぞお気軽にお越しいただき、ご歓談いただければ、両人にとってもこのうえない喜びとなることと存じます。（「あいさつ」、p481）

【「スピーチ」】

例文 32）季節のおりにでも、お立ち寄りいただけると、故人も喜ぶと思います。（「葬儀」、p133）

例文 33）本日はお忙しいなかをご無理いただき、A 市都市防災課長の秋山様にアドバイザーとしてご出席いただいております。（「あいさつ」、p266）

例文 34）行き届かぬところがございましたら、どうかお許しいただきたいと存じます。（「式辞」、p112）

「間接尊重表現」は、その表現自体の性質上、「自分」（「表現主体」）の行為に「相手」への関係・影響がない場合は成立しない。そのような敬語形式の基本的な「敬語表現化」の性質をもとに、「自分」の行為が「相手」に関係する動作を表現している動詞に対し、「敬語表現化」して表現することによって「丁寧さ」を確保しているのである。

「行動展開表現」における「丁寧さ」の原理の一つとして、「自分」が「行動」するというのがある[90]。「相手」を動かすのではなく「自分」が「行動」することによって「相手」に対する「丁寧さ」を確保するのである。このような「丁寧さ」の確保のやり方には実際に「自分」が「行動」する場合もあるが、実際に「行動」するのは（あるいは、「行動」してもらうのは）「相手」であっても、表現上の工夫、つまり、「敬語表現化」のやり方によって―たとえば、「オ・ゴ―イタダク」のような「間接尊重表現」の敬語形式を「敬語表現

[90] 蒲谷・川口・坂本（1998）「行動展開表現」においての「丁寧さ」の原理である。

化」に用いることによって、「自分」が行動するかのように表現する場合もある[91]。

「自分」(「表現主体」)が「行動」するように表現することによって、あるいは、「行動」が「相手」に関係する「間接尊重表現」を「敬語表現化」の手段として用いることによって「手紙文」「スピーチ」における「丁寧さ」を確保しているのではないかと思われる。また、そのような工夫をすることによって「敬語表現化」を達成しているのではないかと考えられる。

さらに、敬語形式には「オ・ゴ」を用いたものだけではなく、「レル・ラレル」などの様々な種類があるが、「オ・ゴ」を用いた「間接尊重表現」を「敬語表現化」における「敬語表現化要素」のひとつである「敬語知識」として用いたのは、「オ・ゴ」が持っている敬語形式としての性質を「敬語表現化」に適用させた結果ではないかと思われる。「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」は、他の敬語形式を用いた「敬語表現」に比べて比較的「敬度」が高い点[92]や、「イタダク」のような授受動詞や「申シ上ゲル」のような敬語形式が持っている「自分」の「行動」や「自分」に対しての「利益」をほのめかすような感覚がある点が、「手紙文」「スピーチ」の「敬語表現化」における「敬語表現化要素」の「敬語知識」として働いた結果ではないだろうか。

動詞に「オ・ゴ〜イタダク」などの「間接尊重表現」を用いて「敬語表現化」を行うことによって、実際は「相手」の「行動」であるが、それがあたかも「自分」の「行動」のように表現する、それで「改まった場面」における「文話」―「手紙文」「スピーチ」においての「丁寧さ」を確保し、「敬語表現化」を完遂していると考えられる。

以下の用例は「手紙文文例集」からの例であるが、上記で確認した「敬語表現化」のやり方が確認できる。

【用例 10】「手紙文」
「表現主体」:就職活動中の女子大生(鈴木知美)
「表現意図」:採用予定を問い合わせる。

---

91 蒲谷・川口・坂本(1998)「あたかも表現」の概念を参考にした。
92 辻村(1991)

「相手」：採用担当者

拝啓　貴社ますますご清栄のことと存じます。

さて、私はＲ大学経済学部国債経済学科を来春三月に卒業見込みの鈴木知美と申します。

かねてより、卒業後は海外ツアーコンダクターになりたいと考え、貴社への入社を強く希望しております。

つきましては、来年度の新卒者採用のご予定について、お教えいただきたく、お伺い申し上げます。

ご多忙のところ、まことに恐れ入りますが、ご返信をいただければ幸いです。よろしくお願い申し上げます。

敬具

（「あいさつ」、ｐ496）

【用例 11】「手紙文」

「表現主体」：中年の女性

「表現意図」：長女の就職について相談する。その訪問の都合を問い合わせる

「相手」：知人

八百屋で初茸を見つけ、ようやく秋の訪れを感じました。みなさまには、お変わりございませんか。

さて、過日お目にかかったときにお話申しあげました長女の就職につきまして、折り入ってお願いがございます。

ご多用のところ、恐縮でございますが、来る十五日（土）の午後二時過ぎから三十分ほど、おじゃまさせていただきとう存じます。ご都合はいかがでございましょうか。

お手数ですが、返信はがきにて、折り返しご返事いただければ幸いです。

まずはとり急ぎおうかがい申し上げます。

（「あいさつ」、ｐ499）

2.5.2.3 名詞系の「直接尊重表現」としての「敬語表現化」や「敬語表現」の使用様相に関する分析・考察

名詞系に「オ・ゴ」を付けた「直接尊重表現」(「オ・ゴ～ダ」)[93]で「敬語表現化」行うことは、「相手」に属する物事に「オ・ゴ」を付けてその「相手」に対しての「尊重」の意識を表すという「敬語表現化」の過程に適ったことである。そのような「オ・ゴ」を用いた「直接尊重表現」を用いた「敬語表現」のなかで、本節で注目しているのは、名詞系、特に「動詞の連用形―名詞化させた表現」に「オ・ゴ」を付けた「直接尊重表現」が「手紙文」「スピーチ」によく使われているということや動作・行為・状態を動詞でなく名詞系で表し、それに「オ・ゴ」を付けた「直接尊重表現」がよく使われるということである。

次の【表１】は「手紙文文例集」「スピーチ用例集」からの用例である。共通する用例の一部を表としてまとめてみた。テキストで使用されている「敬語表現」の形を確認するため、文単位で切り取って提示したものである。

【表１】「オ・ゴ～ダ」の「手紙文文例集」「スピーチ用例集」からの使用例からみた「～」に名詞系が入った例

表現	「手紙文」	「スピーチ」
「お誘い」	先般はゴルフのお誘いをお受けしな がら、家業におわれてご辞退申し上げ、失礼しました。(「そのまま」、p172)	エクスサイズのあとのビールのお誘いもお忘れなく。(「新郎」、p74)

[93] 名詞系に「オ・ゴ」をつけた「直接尊重表現」は、第Ⅰ章の 4.3.3「敬語知識」の問題―「オ・ゴ～ダ」とその周辺の節で述べた「オ・ゴ～ダ」の「～」の部分に名詞系が入り、それが「手紙文」と「スピーチ」で「直接尊重表現」として使われる場合のことを指す。名詞系に「オ・ゴ」をつけた「直接尊重表現」は、基本的には「オ・ゴ～ダ」とあまり変らないが、本節では「～」の部分に入る名詞系の「敬語表現化」上の問題と「文話」―「手紙文」と「スピーチ」における「直接尊重表現」としての使用様相の問題に注目しているため、異なる「述語」(「用語」)を用いることにした。

「お持ち」	名古屋支店は、卓抜した行動力と的確な判断力をお持ちの山岡様には、最適の職場かと存じます。（「そのまま」、ｐ96）	山下君は辛抱強い研究者である同時に、統率力にも非凡な資質をお持ちでした。（「式辞」、p275）
「お住まい」	以前、ご友人がペナンにお住まいと伺いましたが、その方をご紹介していただけませんか。（「CD」、ｐ255）	より暮らしやすい環境の団地に、またお住まいの皆様方々の親睦がいま以上に深まるよう、微力ながらも精一杯努力をいたします。（「あいさつ」、p264）
「お許し」（「おゆるし」）	どうぞ万事おゆるしのうえ、本年も旧に倍してご好誼のほど、ひたすらお願い申し上げます。（「実用」、ｐ28）	どうかお許しを願います。（「あいさつ」、p218）
「おあり」	いずれ、当地の△△デパートで個展を開かれる予定もおありとのこと。（「そのまま」、ｐ102）	皆さんにも、それぞれの懐かしい思い出がおありだと思います。（「式辞」、p533）
「お忘れ」（「おわすれ」）	もしやおわすれではないかと存じ、ご通知申し上げます。（「あいさつ」、ｐ503）	エクサイズのあとのビールのお誘いもお忘れなく。（「新郎」、p74）
「お越し」「おいで」	なお、左記の住所に新居を構えましたので、お近くへお越しの節はぜひお立ちよりください。（「CD」、ｐ146）こちらにおいでの節はお立ち寄りくださいませ。（「実用」、ｐ30）	本日お越しの吉田先生のおかげです。（「大事典」、p74）故人も、皆さまのおいでをさぞかし喜んでいることと存じます。（「葬儀」、p30）
「お勤め」（「おつとめ」）	つきましては、伯父様がお勤めのＦテレビに就職ができたらと思い、採用試験に加わっていただきたく、お願い申し上げる次第です。（「あいさつ」、ｐ487）	園部さつきさんは、外資系のＢ株式会社に通訳としてお勤めでいらっしゃいます。（「あいさつ」、p182）

「お力添え」	これも、ひとえに部長はじめ職場の皆様のお力添えがあったからこそと、深く感謝いたしております。(「お礼」、ｐ118)	皆さまには、生前賜りましたお力添えとご厚誼にあらためて感謝いたします。(「葬儀」、p34)
「お喜び」	お兄さんもお義姉さんも、さぞお喜びのことでしょう。(「そのまま」、ｐ93)	ご主人もさぞお喜びのことと思います。(「式辞」、pp187－188)

「相手」の動作・状態を表現する際、動詞を使うのではなく―動詞に「オ・ゴ」を付けた「オ・ゴ～ニナル」「オ・ゴ～クダサル」などの敬語形式を使うのではなく、その動作・状態を表現する動詞の連用形を用いて―名詞化させ、あるいは名詞で表現して、それに「オ・ゴ」を付けた形の表現で「敬語表現化」を行っている例である。

上の【表１】から確認できるが、「誘ウ」の場合、「オ誘イクダサル」や「オ誘イイタダク」などのような動詞をそのまま用いた「敬語表現」ではなく、「オ誘イ」という「敬語表現」を使っている。「誘イ」という名詞系に「オ」を付けて「敬語表現化」することによって、「敬語表現化」を行う事柄（「敬語表現化要素」における「敬語表現認識」の「題材・内容」）における「相手」の「誘イ」ということを表し、さらに、その「誘イ」は「自分」が「敬語表現化」を通じて、尊重の意識を表す「相手」の「行動」―「誘イ」であることを表しているのである。

同様の観点から考えると、「オ持チ」は「持ッテイラッシャル」、「オ住マイ」は「住ンデイラッシャル、生活シテイラッシャル」、「オアリ」は「イラッシャル（アル)」、「オ越シ、オイデ」は「イラッシャル（来ル)」、「オ勤メ」は「勤メテイラッシャル」、「オ力添エ」は「オ力添エクダサル」などの代わりに使われていると考えることができる。

また、このような「敬語表現化」のやり方は動詞の連用形だけでなく、名詞で表現している例も存在する。以下は「手紙文文例集」と「スピーチ用例集」からの例であるが、「敬語表現化」のやり方を確認するために「文」単位で切り取った。

【「手紙文」】

例文 35）次回ご来店の際にお持ちいただきますと、謝礼といたしまして、千円相当の当店商品券とお引き換えいたしますので、どうぞよろしくお願い申しあげます。（「CD」、ｐ265）

例文 36）つきましては、安全な指導と健康管理のため、お子さまの心身状態を伺う調査票のご記入をお願い申しあげます。（「CD」、ｐ267）

例文 37）急場のお役に立てず、ふかいな兄だと思うでしょうが、どうか悪しからずご容赦をお願いいたします　（「あいさつ」、ｐ517）

例文 38）日ごろは、当会の活動にご理解　ご協力を賜り、まことにありがとうございます。（「あいさつ」、ｐ476）

例文 39）今後ともよろしくご指導　ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。（「お礼」、ｐ62）

【「スピーチ」】

例文 40）皆さまのご来店をお持ちしております。（「式辞」、p445）

例文 41）ご承知のように、営業部では毎年、部としての目標のほか、各自がその年の目標を自己申告することになっています。（「式辞」p341）

例文 42）皆さま方のかわらぬご指導、ご厚誼を心からお願い申し上げます。（「あいさつ」、p343）

例文 43）本日はご出席、ありがとうございました。（「新郎」、p215）

例文 44）保護者の皆さまのご支援もよろしくお願いいたします。（「大事典」、p125）

動詞の連用形を用いた名詞系における「敬語表現化」の過程の場合と同様に考えると、例えば、「ゴ容赦」の場合、「ゴ容赦クダサル」「ゴ容赦イタダク」あるいは「オ許シクダサル」「オ許シイタダク」のような動詞の概念を残した「敬語表現」ではなく、「容赦」という漢語名詞に「ゴ」を付けた「ゴ容赦」を用いて「敬語表現化」を行っていることが確認できる。「ゴ容赦」という「敬語表現」を用いて「敬語表現化」を行うことによって、その「容赦（許シ）」は「敬語表現化」を行う事柄（「敬語表現化要素」における「敬語表現認識」の「題材・内容」）における「自分」が尊重する「相手」からの「容赦」であり、それに対して「敬語表現化」を行っていると言えよう。

名詞に「ゴ」を付けた「敬語表現」の場合を動詞の連用形に「オ」を付けた「敬語表現」の場合と同様に考えると、「ゴ来店」は「店ニイラッサｈル」「店ニ来テクダサル」、「ゴ理解」は「ゴ理解クダサル」「理解シテクダサル」、「ゴ承知」は「知ッテイラッシャル」、「ゴ指導」は「ゴ指導クダサル」「指導シテクダサル」、「ゴ出席」は「出席シテクダサル」「出席シテイタダク」などの代わりに使われていると考えることができるだろう。

ただし、このような「敬語表現化」のやり方と「敬語表現」は、全ての「手紙文」「スピーチ」に渡って行われている（使われている）のではなく、全ての「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」において確認できるものではない。しかし、このような「敬語表現化」のやり方と「敬語表現」が本節におけるテキストとして用いた「手紙文文例集」「スピーチ用例集」で多数確認されることは事実である。このような「敬語表現化」のやり方と「敬語表現」は、「手紙文」「スピーチ」における「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」のやり方と「敬語表現」の一部として、または、「敬語表現化」における一つの工夫として存在しているものであると言えよう。

テキストの「文話」では、実際どのような使用様相を表しているのかを確認するために「手紙文」からの用例をふたつ提示する。以下の用例は、前節である「2.5.2.2 動詞の「間接尊重表現」としての「敬語表現化」や「敬語表現」の使用様相に関する分析・考察」で用いた用例であるが、動詞の「間接尊重表現」の使用と比較をするため、もう一回提示する。名詞系の「直接尊重表現」の使用例だけをマーキングしているが、前節で用いた例文なので、前節の内容との比較にもなるだろう。

【用例 10】「手紙文」
「表現主体」：就職活動中の女子大生（鈴木知美）
「表現意図」：採用予定を問い合わせる。
「相手」：採用担当者

拝啓　貴社ますますご清栄のことと存じます。
　さて、私はＲ大学経済学部国債経済学科を来春三月に卒業見込みの鈴木知美と申します。
　かねてより、卒業後は海外ツアーコンダクターになりたいと考え、貴社への入社を強く

希望しております。

つきましては、来年度の新卒者採用のご予定について、お教えいただきたく、お伺い申し上げます。

ご多忙のところ、まことに恐れ入りますが、ご返信をいただければ幸いです。よろしくお願い申し上げます。

敬具

（「あいさつ」、ｐ496）

【用例 11】「手紙文」

「表現主体」：中年の女性

「表現意図」：長女の就職について相談する。その訪問の都合を問い合わせる

「相手」：知人

八百屋で初茸を見つけ、ようやく秋の訪れを感じました。みなさまには、お変わりございませんか。

さて、過日お目にかかったときにお話申しあげました長女の就職につきまして、折り入ってお願いがございます。

ご多用のところ、恐縮でございますが、来る十五日（土）の午後二時過ぎから三十分ほど、おじゃまさせていただきとう存じます。ご都合はいかがでございましょうか。

お手数ですが、返信はがきにて、折り返しご返事いただければ幸いです。

まずはとり急ぎおうかがい申し上げます。

（「あいさつ」、ｐ499）

上記で述べた通り、「敬語表現化」を行う「題材・内容」における「オ・ゴ」を用いた名詞系の「直接尊重表現」がテキストに多数存在していることが確認できた。動詞のままでも「敬語表現化」ができる「題材・内容」に対して、それを名詞系化した形に「オ・ゴ」を付けて「敬語表現化」を行っているのはなぜか。

「敬語表現化」における「敬語表現化意識」のひとつとして、「尊重」すべき人物に関する物事・動作・状態などに対しては、それらを「直接的」に―動詞を用いた動作・行動・

状態の「描写」を「直接的」であるとすれば―「敬語表現化」を行うのでなく、「間接的」に―動詞の連用形を用いて、つまり、名詞化した形で、あるいは名詞で表すことを「間接的」であるとすれば―「敬語表現化」を行ったほうが、「丁寧」であるという「敬語表現化」における意識が働いているのではないだろうか[94]。白（1996）によると、「一般的に上位者に関する行為を叙述するには、直接的な表現より間接的で迂回した表現をする必要がある。」としている[95]。その「迂回的な敬語表現化」[96]の一つとして、「敬語表現化」における「主体」が「尊重」の気持ちを表す（必要のある）「相手」の動作・行為・状態を、そのまま動詞―「オ・ゴ」を用いた「オ・ゴ～ニナル」などの動詞を用いたの「敬語表現化」ではなく、「迂回的に」、言い直すと、それを名詞系（連用形を用いることによって名詞化と動詞と同じ概念の名詞を用いる場合を含めて）にして「敬語表現化」を行うのではないかと考えられる。

つまり、動詞の連用形や名詞系に「オ・ゴ」を付けた「敬語表現」および「敬語表現化」には、「相手」の動作・行動および状態は「～する（動作、動詞）」ではなく、言い換えると、「相手」自身が動いたからその動作・行動および状態が展開されるのではなく、「相手」が「動いてなくても、動かなくても」そうなっているという「敬語表現化」における配慮を表そうとする意識が働いているのではないだろうか。「相手（あなた）」は「偉い」から、別に動かなくてもそうなっているという「待遇表現」における表現上の配慮、つまり、「敬語表現化」における「敬語表現意識」のひとつが働いているのではないかとも考えられるのである。「相手」を「尊重する」あるいは「高くする」ということは、「相手」の持っている能力・力などを拡大して表現するという「待遇表現」―あるいは「日本語におけるポライトネス」―の根本的な性質や配慮の表し方の面から考えると、「手紙文」「スピーチ」における「敬語表現化」を行う際、動詞を使わずに、動詞の連用形―名詞化した表現、あるいは名詞に「オ・ゴ」を付けた「敬語表現」の使用における「敬語表現化」の意識の一部が説明できるようになるのではないだろうか。動詞を直接に用いるのでなく、動詞の連用形―名詞化した表現、あるいは名詞を用いることによって、「尊重」する、「高く」する

---

[94]「比較的」間接的であると認識している。しかし、本節における「直接的」という概念と「間接的」という概念の判断（判別）には何らかの厳密な基準があるわけではない。名詞系を用いた「敬語表現」と動詞を用いた「敬語表現」を比べた際、名詞と動詞の表す概念・様相および「文話」における感覚が「間接的」、あるいは「直接的」であるということである。

[95] 白の他にも、窪田・池尾（1971）大石・林（2000）による同様の指摘がある。

[96] 筆者の表現である。

「相手」の行為・動作・状態を「迂回」して表現する効果も考えられるだろう。

また、そのような「敬語表現化」における意識としては、動詞の連用形―名詞化した表現、あるいは名詞は、比較的簡単な形で「敬語表現化」することができる[97]、「オ・ゴ～ニナル」「オ・ゴ～クダサル」を用いた複雑な形式[98]に比べてすっきりした「敬語表現」を作ることができるという点、洗練された書き方のように感じられる[99]という点なども働いているのではないだろうか。「オ・ゴ～ニナル」「オ・ゴ～クダサル」のような複雑な、使用における制約の多い敬語形式を用いて「敬語表現化」を行うよりは、動詞の連用形―名詞化した表現、あるいは名詞に「オ・ゴ」を付ければいいという比較的「簡単な」形式を用いて「敬語表現化」を用いる、という「敬語表現化」における意識も考えられる。

そのような「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」における意識が「改まった場面」における「文話」、本節のテキストである「手紙文」「スピーチ」の「敬語表現化」に反映されていると考えられる。

2.5.2.4「手紙文」「スピーチ」における「敬語表現化」の傾向―名詞系における「直接尊重表現」と動詞における「間接尊重表現」

2.5.2.2 と 2.5.2.3 における「手紙文」「スピーチ」の分析・考察の結果、「改まった場面」で使われる「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」および「敬語表現」の使用様相の傾向として、次のような「敬語表現」が多数存在していることが確認できた。

オ・ゴ名詞系：「直接尊重表現」―「敬語表現化」の意識：「相手」の物事・動作・状態に対して「敬語表現化」する。動詞で表現できる物事を名詞系で表現。尊重する人物に対して直接には触れない、簡潔で洗練、バランスを取るという働きの「敬語表現化」における工夫。　（＋）

オ・ゴ動詞：「間接尊重表現」―「敬語表現化」の意識：「相手」に関係する「自分」の動作を「敬語表現化」する。「相手」を動かさないような表現。「自分」の「行動」「利益」をほのめかし、「丁寧さ」を確保する「敬語表現化」における工夫。

97 本稿の「4.3.3「敬語知識」の問題―「オ・ゴ～ダ」とその周辺」を参照。
98 本稿の「4.3.4「敬語知識」の問題―「オ・ゴ～ニナル」と「レル・ラレル」の使用」と「4.3.4「敬語知識」の問題―「オ・ゴ～スル」の使用」を参照。
99 林（1999）

2.5.3「スピーチ」における「敬語表現化」の問題―「直接尊重表現」の多用

本節では5冊の「スピーチ用例集」から収集した「スピーチ」における「敬語表現化」の問題―「スピーチ」の「敬語表現化」における「直接尊重表現」の多用の問題について分析・考察を行う。

「スピーチ」は「手紙文」と比べ、「敬語表現化」における傾向として、比較的「直接尊重表現」の使用が多いことが確認できた。文字数250字から500字（前後）の「手紙文」と「スピーチ」、各230例を対象とし、「直接尊重表現」の使用数を調べてみた。

【表４】文字数250～500字の「手紙文」と「スピーチ」の「直接尊重表現」の使用

	「手紙文」（用例数：230）	「スピーチ」（用例数：230）
名詞	713[100]	905
動詞	160	188

「文話」―「手紙文」「スピーチ」の分量が変わると、「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」の数も変わるため、文字数250～500字程度の「手紙文」と「スピーチ」を「敬語表現化」における「直接尊重表現」の使用様相を調べる対象とした。「手紙文」からの230例と「スピーチ」からの230例を対象にしているが、230例という数字に特別な意味はなく、用例の数を揃えるためだけのものである。

さらに、「文話」―「手紙文」「スピーチ」の「題材・内容」や「表現主体」の言語的習慣などによる敬語形式の使用における変化という面は注意しなければならない問題であるため、本節においては、そのような影響を最小化するため、あらゆる種類と内容の「手紙文」と「スピーチ」を調査の対象とした。

その結果、「手紙文」より「スピーチ」のほうに「敬語表現化」における「直接尊重表現」の使用が多いということが確認できた（【表 4】を参照）。特に「スピーチ」には名詞系における「オ・ゴ」を用いた「直接尊重表現」の使用が「手紙文」に比べ、比較的多い

[100] カウントのやり方は【表２】【表３】と同様。数字は「表現」の数であって、「用例」の数ではない。

ということが確認できた。以下は、「スピーチ用例集」からの用例であるが、「敬語表現化」における「直接尊重表現」の多用が確認できる。

【用例 12】「スピーチ」
「表現主体」：日本料理店の店主
「表現主体」の「表現意図」：開店披露宴で來席者に開業のあいさつをする
「理解主体」：開店披露宴に集まった客
「場」：日本料理屋。お祝いの客が多数集まっている。

ご多用のところをご案内申し上げましたので、さぞご迷惑のことと恐縮しております。
開店披露と申しましても、ご覧のとおりの貧弱な店でございます。大げさにお招きするのも、と考えたのではありますが、私にとって長年の夢でありました店を持つことができ、やはり皆様のご覧いただこうと考えた次第でございます。
若輩の私が、こうして小さいながらも意見の店を構えることができ、やっと開店にこぎつけることができましたのも、ひとえに皆様のあたたかい励ましとご助力のおかげでございます。心より感謝申し上げます。とりわけ料亭魚よしの吉田様、奥様には、ことばに尽くせないご援助をいただき、この場をお借りして心より感謝申し上げます。
私ごとで大変お耳障りかと存じますが、この店を開くまでのいきさつを振り返りますと、吉田様にはひとかたならぬお世話とお骨折りをいただきました。…（中略）…「料理は心」の吉田様の一言が、折にふれて胸によみがえってまいります。このおことばを肝に銘じてまいりたいと思います。
店を構えてみたものの、まだまだとうてい一人歩きできる私ではありません。今後も皆様のお力添えにおあずかりしなければなりません。どうぞ、一日も早く、名実ともに一人前になれますよう、ご指導　ご鞭撻のほど心よりお願い申し上げます。
わざわざお運び願いましたものの、ご覧のとおりはなはだ粗末な料理で恥ずかしいのですが、お酒のほうは十分に用意してございます。お時間の許す限り、ごゆっくりとおくつろぎいただき、できましたら料理の味、盛り付けなどにつきまして、ご助言やおしかりなどいただけましたら、これにまさる喜びはございません。本日はまことにありがとうございました。
（「あいさつ」pp254～255）

【用例 13】「スピーチ」

「表現主体」:（晩婚の）新郎

「表現主体」の「表現意図」:結婚披露宴で来客にあいさつをする。

「理解主体」:結婚披露宴に集まった客

「場」:結婚披露宴式場

会場の皆様、ようこそおいでくださいました。大勢の方にご臨席いただき、心からお礼申し上げます。

私たちは、本日、小林聡様ご夫妻のご晩酌により結婚式をあげました。これもひとえに、出会いから挙式までお力添えくださいました小林様ご夫妻のおかげと感謝いたしております。

私も麗子も、すでに若いといえる年ではありませんが、結婚をあせらなかったために、最良の伴侶にめぐり会うことができました。おくてのふたりですから、これからも急がずあわてず、手を携えて、コツコツと努力しながら、マイペースの人生を歩いていきたいと思っております。

そう申しましても、家庭人としてはふたりとも新米夫婦です。皆さまには、今後とも私たちのよき師、よき相談相手として、ご指導　ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

本日は、ありがとうございました。

（「新郎」ｐ78）

【用例 14】「スピーチ」

「表現主体」:喪主代理の上司、山内。

「表現主体」の「表現意図」:葬式で喪主代理として弔問客にあいさつをする。故人（石橋）の意思を継ぐことを表明する。

「理解主体」:石橋の葬式にあつまった弔問客。

「場」:葬式会場

ご遺族、ご親戚に代わりまして、ひとことごあいさつ申し上げます。私は世話役代表の山内晋作と申します。故、石橋邦夫さんが勤務しておりましたハヤミ株式会社の取締役でございます。

本日はお忙しいなか、多くの皆さまにご参列、ご焼香を賜りまして、まことにありがとうございました。

石橋さんは、弊社に入社されてちょうど三十年になります。営業部長の要職にあって、社業の発展に力を尽くされておりました。営業部門を率いるリーダーとして、スタッフの信望を一身に集め、大いにご活躍でございました。

ところが、まことに残念なことに、ひと月ほど前に急に体調を崩されまして、手当てのかいなく他界されました。享年は五十三歳でした。精力的でお元気な方であっただけに、ご遺族の方々のお気持ちやいかにと、悲しみに胸を打たれるばかりでございます。

私どもといたしましては、石橋さんの生前の力強い仕事ぶりを受け継ぎ、社業のいっそうの振興に努めることが、何よりも故人への恩返しになるかものと存じます。

本日は、最後までお見送りくださいまして、厚くお礼を申し上げます。故人が生前に賜りましたご厚誼、ご厚情に深く感謝申し上げるとともに、これからはご遺族の方々に温かいご支援、ご助力をお寄せくださいますよう、心よりお願い申し上げまして、ごあいさつとさせていただきます。

（「葬儀」pp82～83）

【用例 15】「スピーチ」

「表現主体」：村浜画廊の代表

「表現主体」の「表現意図」：画廊の開設式で來席者にお礼のあいさつをする

「理解主体」：村浜画廊開設記念式典に集まった客

「場」：記念式場。画廊に関係のある客が多数集まっている。

本日はご多用中のところを当村浜画廊開設記念式典にお集まりいただき、本当にありがとうございました。また陶芸家の岩下先生、画家の藤森先生、現代美術評論家の新藤先生、その他の方々よりご丁重なご祝辞をたまわりまして、スタッフ一同、誠に身にあまる光栄でございます。

画廊というのは、同じ芸術でも音楽の演奏会などに比べると、お客様をひきつける力にどうしても劣るのが現状でございます。

しかし我が村浜画廊は、従来の画廊にはなかった数々の画期的なアイディアでお客様の新しい関心を集めるべく、その準備をすでに進行中でございます。なにとぞご期待くださ

いませ。

最後に、当画廊開設にあたりご尽力くださいました先生方、このような高いところから恐縮ではございますが、厚くお礼を申し上げます。

（「大事典」ｐ80）

「スピーチ」における「敬語表現化」の方式のひとつとしての「オ・ゴ」を用いた「直接尊重表現」は、名詞系（動詞の連用形からの表現も含めて）だけでなく動詞に関しても幅広く使用されている点が【表４】と「スピーチ」の用例から確認できるが、これは「スピーチ」という表現形式にその理由があるのではないかと考えられる。

「スピーチ」は「手紙文」と違って、「相手」と直接に、つまり、面と向かって表現すること（発話すること）をその表現形式としているため、その表現（「敬語表現」を含めて）を聞いている「相手」、その表現（「敬語表現」を含めて）に関係する「相手」が「表現主体」の目の前にいる。それで、目の前にいる、その場で聞いている「相手」に対する「敬語表現化」における配慮、意識が働いて、このような傾向が見られるようになったのではないかと考えられる。

また「スピーチ」では「敬語表現化」を行う「題材・内容」が、目の前にいる「相手」に直接関係する場合が多いという点も「オ・ゴ」を用いた「直接尊重表現」の多用を通じた「敬語表現化」につながるのではないだろうか。

さらに「スピーチ」における「直接尊重表現」は、【表】で確認できるように、名詞系に「オ・ゴ」をつけた「直接尊重表現」が「手紙文」に比べ比較的多用されていることが確認できる。それは、上の「2.5.2.3 名詞系の「直接尊重表現」としての「敬語表現化」や「敬語表現」の使用様相に関する分析・考察」の節で確認したような「敬語表現化」における意識が「手紙文」と比べ、比較的積極的に現れた結果ではないだろうか[101]。

[101] 「手紙文」においてはそのような「敬語表現化意識」が表れないという意味ではない。「スピーチ」のほうが「手紙文」に比べて、そのような「敬語表現化意識」比較的積極的に表れているのではないかということである。

2.5.4「スピーチ」における「敬語表現化」の問題―「間接尊重表現」の形式

本節では、「オ・ゴ～申シ上ゲル」と「オ・ゴ～イタダク」を中心とした「間接尊重表現」における「表現形式」の問題について分析・考察を行う。

「オ・ゴ～申シ上ゲル」「オ・ゴ～イタダク」のような「オ・ゴ」を用いた「間接尊重表現」は、「～」の部分に動詞の連用形が入った「ひとまとまり」した敬語形式として存在しており、前の節で確認したように、「改まった場面」―「手紙文」「スピーチ」における「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」の一部を担っている。

しかし、「スピーチ」におけるひとつの「敬語表現化」の敬語形式として「申シ上ゲル」「イタダク」の前に「ヲ」「ニ」などの助詞を入れた用例があった。次は「スピーチ」からの用例である。敬語形式の面を観察するために「文」単位で切り取って提示したものである。

例文 45）皆さま、本日はご多用のところ、父裕次郎の古希の祝いに、このようにお集まりくださり、厚くお礼　を　申し上げます。（「式辞」、ｐ157）

例文 46）清水様ご夫妻にあらためてお礼　を　申し上げます。（「新郎」、p72）

例文 47）皆様にご報告いたしますとともに、あらためてお祝い　を　申し上げます。（「あいさつ」、ｐ192）

例文 48）今日ここにめでたく成人式を迎えられた皆さんに、心よりお祝い　を　申し上げます。（「式辞」、p410）

例文 49）ご両家の皆さまにも心よりお慶び　を　申し上げます。（「式辞」、ｐ51）

例文 50）研究開発部を代表しまして、心からお喜び　を　申し上げます。（「あいさつ」、p222）

例文 51）遺族を代表いたしまして、謹んで皆さまにごあいさつ　を　申し上げます。（「葬儀」、p46）

例文 52）ひと言お礼のごあいさつ　を　申し上げます。（「新郎」、p86）

例文 53）本日はこのようなめでたい席にお招き　を　いただき、たいへんうれしく思っております。（「大事典」、p120）

例文 54）本日はお忙しいなか、たくさんのお集まり　を　いただき、まことにありがと

うございます。「あいさつ」、p298）

例文 55）また、諸先輩からは何事にもお力添え　を　いただくという力強いおことばもありました。（「式辞」、p545）

例文 56）それ以来、私の結婚後の一時期を除いて、ずっと親しくしていただき、いまも家族ぐるみのお付き合い　を　いただいております。（「式辞」、p163）

例文 57）PTA 活動の目的や意義にご理解　を　いただくとともに、前向きかつ積極的なご協力　を　いただきますよう、この場をお借りしてお願い申し上げます。（「あいさつ」、p281）

例文 58）さっきとまたお目にかかって、ご指導　を　いただくこともあろうかと思います。（「式辞」、p391）

例文 59）このように大勢の方々にご臨席　を　いただき、まことにありがとうございます。（「新郎」、p72）

【その他】:「ご助力をいただく」「ご出席をいただく」「ご推薦をいただく」「ご厚誼をいただく」「ご愛顧をいただく」「ご支援をいただく」「ご出席をいただく」などを用いた「敬語表現化」の例がある。

「オ・ゴ＋動詞の連用形＋申シ上ゲル、イタダク」の敬語形式で「敬語表現化」を行うことができる「題材・内容」について、それを分離したような敬語形式、つまり、「オ・ゴ名詞系」＋「助詞（ヲ、ニ）」＋「申シ上ゲル、イタダク」、を用いている用例である。このような「敬語表現」は、主に「スピーチ」で確認され、「手紙文」においてはその使用数が非常に少なかった。つまり、「手紙文」においては「オ・ゴ＋動詞の連用形[102]＋申シ上ゲル、イタダク」の「間接尊重表現」を用いて「敬語表現化」を行っていたのである。同じ「題材・内容」について「敬語表現化」を行うのに、「スピーチ」と「手紙文」では異なる敬語形式を用いる場合があるのである。

本節では、このような「スピーチ」における「オ・ゴ名詞」＋「助詞（ヲ、ニ）」＋「申シ上ゲル、イタダク」の敬語形式を用いた「敬語表現化」の問題について考える。

---

[102] 同じ形であるが、ひとつの「表現形式」のなかで存在し、働く場合は「動詞の連用形」として、助詞によって分離された場合は独立した（独立して働く）と見なし、「名詞」として考えた。

まず、敬語形式からの分析である。

「申シ上ゲル」の前に来る「オ・ゴ名詞」は、「内在・内容」の面からみると「自分」のことを述べる場合が多いので、「敬語表現化」においては、「間接尊重表現」としての機能を持っていると言えよう（用例参照）。そのような観点から分析を行うと、「イタダク」の前に来る「オ・ゴ名詞」は、「相手」の動作や働きかけを表現する場合が多いので、「直接尊重表現」としての働きをしていると言える。しかし、下の用例で確認できるように、「ひとまとまり」の「敬語表現」に戻した場合は、「申シ上ゲル」と「イタダク」の前に来る「敬語表現」は、両方、「ひとまとまり」の「間接尊重表現」となる。このようなことは以下の用例で確認できる。矢印がついている「文」は、比較のために筆者が作ったものである。「スピーチ用例集」からの用例と比較してみると、意味は同じであるが、敬語形式の面における違いが確認できる。

例文 45）皆さま、本日はご多用のところ、父裕次郎の古希の祝いに、このようにお集まりくださり、厚くお礼　を　申し上げます。（「式辞」、ｐ157）

⇒皆さま、本日はご多用のところ、父裕次郎の古希の祝いに、このようにお集まりくださり、厚くお礼申し上げます。

例文 51）遺族を代表いたしまして、謹んで皆さまにごあいさつ　を　申し上げます。（「葬儀」、p46）

⇒遺族を代表いたしまして、謹んで皆さまにごあいさつ申し上げます。

例文 53）本日はこのようなめでたい席にお招き　を　いただき、たいへんうれしく思っております。（「大事典」、p120）

⇒本日はこのようなめでたい席にお招きいただき、たいへんうれしく思っております。

例文 58）さっきとまたお目にかかって、ご指導　を　いただくこともあろうかと思います。（「式辞」、p391）

⇒さっきとまたお目にかかって、ご指導いただくこともあろうかと思います。

このような「敬語形式」は「スピーチ」全般に渡って使われていた。その使用に関する「敬語表現化」の意識・認識について考察した。

ⅰ）「文話」全体―「スピーチ」全体における「敬語レベル」調整の面

「オ・ゴ～イタダク、申シ上ゲル」などの「オ・ゴ」を用いた「ひとまとまり」の「敬語表現―間接尊重表現」は、比較的「敬度」の高い「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」である上、動詞と一体化させた「敬語表現」、比較的形式（敬語形式）に充実した「敬語表現」である。したがって、「形式」の面を重視する「手紙文」[103]おいては多用されるが、「手紙文」より形式の面における制約などが比較的少ない「スピーチ」においては、分離した形で使われることもあると考えられる。

また、「敬語表現化」の際、「スピーチ」の全体の構成などを考慮し、全体的に重い、文章的な表現に偏ってしまうことを避けるため、「オ・ゴ」と動詞の部分を分離した「敬語表現」を用いて「敬語表現化」を行うという面も考えられるのではないだろうか。「文章」である「手紙文」と違って、「スピーチ」は「談話」としての性質を持っているので、比較的形式から離れた表現、口語的表現を用いることによって「談話」としての性質を確保しているとも言えよう。つまり、形式から多少離れた「敬語表現」を用いて「敬語表現化」を行うことによって、「スピーチ」という「談話」が「文章」のように（硬く）なること、重苦しくなることを避けるという意識が「敬語表現化」の過程で働いたのではないかと考えられる。

ⅱ）実質的な意味を表現

「オ・ゴ～申シ上ゲル、イタダク」を用いた「間接尊重表現」は上記で述べたように「形式的性質」を持っている敬語形式であり、「ひとまとまり」で表現される敬語形式である。また、主に「敬語表現化」の「目標」になるのは「～」の部分に入る概念、つまり「～する（アイサツスル、集マルなど）」で代表される動作、状態であって、「申シ上ゲル」「イタダク」の部分は敬語形式においては、「形式」の面を担当しているという分析ができる。し

103 「手紙文」は「スピーチ」に比べて比較的「形式」的な面を重視するという本節における認識である。「手紙文」には一般的に頭語――前文――本文――末文――結語――日付――署名・宛名・副文などのような「決まった」構造を持っており、「正式な・丁寧な手紙文」のほどこのような形式に従う必要があると認識されていると考えられる。しかし、「スピーチ」には、「手紙文」のような決まった形式は特に存在しないと考えられるのが一般的である。しかし、「スピーチ」にまったく「決まった」形式がないとは言えないであろう。

たがって、上記で述べたように、比較的形式の面を重視する「手紙文」においては、「ひとまとまり」の「オ・ゴ～申シ上ゲル、イタダク」のような「間接尊重表現」が多用されているのである。

一方、「スピーチ」で確認できる「分離した敬語表現」は、「手紙文」の「ひとまとまり」の表現とは違って、実質的意味を持つようになると思われる。形式的印象のあるお礼申しあげるより、「お礼　を申し上げる」のような「分離した敬語表現」を「敬語表現化」に用いることによって、「自分」の「意図」、感情である「お礼」「を」、「相手（あなた（方））」に「申し上げる」という実質的意味をより鮮明に出すようになると思われる。特に、「申シ上ゲル」のように、「言ウ、話ス」などのような「通常語」より「丁寧な」、また「場」に相応しい形式的印象のある表現に実質的意味を付加することによって「スピーチ」における「敬語表現化」のやり方のひとつとして存在し、さらに「スピーチ」における「丁寧さ」を確保しているとも言えよう。

また、「ゴ指導」「ヲ」、「イタダク」のような「イタダク」を用いた「分離した敬語表現」も上の同様の観点で分析することができるが、特に「オ・ゴ～イタダク」の場合は、用例で確認できるように、その使用の幅が「申シ上ゲル」に比べて比較的広かった。「オ集マリ」「オ招キ」「ゴ指導」「ゴ支援」などの用例があるが、それは「イタダク」という授受動詞の持っている「丁寧な」感覚が「敬語表現化」に反映された結果であると考えられる。

さらに、音声の媒体としている「スピーチ」の基本的性質から考えると、このような「敬語表現」は「オ・ゴ」のついた表現（ことば）を強調するような機能もあると考えることができるのではないだろうか。実際に声を出して話す際、「お祝い」「を」「申し上げます」と言ったほうが、連続している「お祝い申し上げます」を言ったほうより、「お祝い」や「申し上げる」という「敬語表現」をより鮮明に、あるいは、より効果的に「相手」に伝えることができるという「敬語表現化」における意識が働いているのではないかと考えられる。

2.5.5「手紙文」における「敬語表現化」の問題―「敬語表現化認識」の問題１「親疎関係」

本節では「手紙文」における「敬語表現化」の問題のなかで「敬語表現認識」の「人間関係」の問題、特に「親疎関係」における「敬語表現化」の問題について「手紙文」を対象に分析・考察を行う。

第Ｉ章で記述した通り、実際のコミュニケーションの単位として考えられる「文話」、その「文話」レベルにおける「敬語表現化」の問題は、「語」や「文」レベルにおける分析・考察だけでは判断できないものがある。それは、「文章」レベルという「表現形式」における「敬語表現化」には様々な要素が絡んでいるからであろう。たとえば、誰かを「高める」とか、何かを「美化する」という「敬語表現化」における意識だけでなく、「相手」との「上下関係」や「親疎関係」などの「人間関係」、「相手」と普段接触している「場」、「文章」における「題材・内容」や「相手」への「配慮」などが「敬語表現化」の要因として考えられるのである。

杉戸（1999）によると、「人間関係」における「上下関係」―いわゆる年齢、地位などの要因は「敬語表現」の使用（「敬語表現化」）を決める重要な要因になるが、身分上の区別などが少なくなった現代社会において、「敬語使用」を決定するもう一つの重要な要因になるのが「親疎関係」だとしている。

たとえば、一人の会社員がいるとしよう。その会社員が「相手」に対してどのような「敬語表現化」を行うかを考えた時、次のようなことがあげられる。「自分」の上司・先輩には「敬語表現」を使用、同僚・同期には「普通体」を使用、そして後輩には「敬語表現」を使うというのがそれである。

上司・先輩に対して「敬語表現」を使い、同僚・同期に対して「普通体」を用いるのは当然のことであると言えよう。それは「敬語表現化」の過程で大きく影響をする「人間関係」における「上下関係」の面からみた場合のことである。しかし、「上下関係」において「下」の位置にあると思われる（一般的にそのように思われる）後輩に対しても「敬語表現」を用いるのはなぜか。それは「敬語表現化」において「上下関係」より「親疎関係」のほうが強く作用しているからだと思われる。もちろん、上記で述べたように「親疎関係」だけが「敬語表現化」の様相を決める要因であるとは思えない。後輩も「一人の人格体」

であるという「敬語表現化」における認識や自分の「丁寧さ」「人格」などに対しての損害を防ぐための理由など様々な理由が絡み合って「敬語表現化」を決めるのであろう。

そのような「敬語表現化」における「人間関係」の認識の面、特に「親疎関係」の面から考えた場合、上司・先輩は「疎」、同僚・同期は「親」、後輩は「疎」であると考えることができる[104]。したがって、後輩に対して、「人間関係」の「親疎関係」においては「疎」の関係として認識をし、それに相応する「敬語表現化」を行っていると考えるのである。

つまり、現代社会においては、昔の時代のように身分・恩恵・地位・年齢などによる「上下関係」だけでは判断できず、そのような「上下関係」だけによって「敬語表現化」の様相が決まるとは言えないのである。様々な「人間関係」において「敬語表現化」の様相が変わるということを考えておく必要があると思われる。

「手紙文」における「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」も上記のような観点から考えることができる。「手紙文」における「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」は「親疎関係」の面においては「疎」の関係によく現れる傾向があった。言いかえると、「親」の関係には「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」があまり使われない傾向があった。

【用例 16】「手紙文」
「表現主体」：東京在住の人物
「表現意図」：寒中見舞いを送る
「相手」：それほど親しくない知人

寒中お見舞い申し上げます
厳しい寒さが続いておりますが、お変わりなくお過ごしでしょうか。
東京は例年になく雪が多い冬です。雪に慣れないため滑って転び、救急車で病院に運ばれる人が続出しています。雪国の人たちが見ると不思議に思えることでしょう。
どうか風邪などお召しになりませんよう、体にお気をつけてください。
（「あいさつ」、ｐ539）

[104] もちろんこれには「個別性」の問題を考慮しなければならないが、本節のおける分析・考察では、上司・先輩は「疎」、同僚・同期は「親」、後輩は「疎」であるという前提を立てている。「敬語表現化」の主体と心理的に、また立場的に近い存在を「親」、遠い存在を「疎」として考える。

【用例 17】「手紙文」
「表現主体」：友人に寒中見舞い状を出す男性
「表現意図」：寒中見舞いを送る
「相手」：親しい友人

ぬくぬくと暖かいエアコンのきいた部屋の中から、寒中お見舞いを申し上げます。
正月も過ぎるころになって急に周辺が落ち着いてきた感じです。年末は取り込んでいて、忘年会に出られなかったのが残念でなりません。久しぶりに山ちゃんや石黒さんをはじめ、なつかしい連中に会いたかったのに…。
桜が咲くころにまたみんな集まるような企画を立ててくれませんか。
（「あいさつ」、ｐ539）

用例 16 と用例 17 はともに同じ「寒中見舞い状」である。しかし、用例 16 は親しくない「相手」であるが、用例 17 は親しい友人が「相手」になっているため、「敬語表現化」の様相―特に「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」の使用の差が確認できる。また、用例番号と用例番号は同じ「手紙文文例集」からの用例であるが、「相手」によって「敬語表現化」の様相が異なっている。
用例 16 が「オ・ゴ」を用いたあいさつなどを用いて「敬語表現化」を行っているのに対して、用例 17 は「友人」という親しい「相手」に出しているためか、「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」はあまり確認できない。

【用例 18】「手紙文」
「表現主体」：旅行をしている女性
「表現意図」：旅行先からはがきを送る。旅先での自分の気持ちを伝える。
「相手」：親しい友人

会社の出張で岐阜県美濃市に来ています。幸運なことに昨夜たまたま「あかりアート展」が開催されていました。和紙を使った明かりのオブジェが全国から公募され、伝統的な美濃の街並みに展示されていました。それはそれは幻想的な光景でした。
ペットボトル入りの水を置いてない店が多いのには驚きました。理由はなんと、水がと

てもおいしい街なので、置いても売れないのだそうです。
（「あいさつ」、ｐ545）

【用例 19】「手紙文」
「表現主体」：旅行をしている男性
「表現意図」：旅行先からはがきを送る。旅先での自分の気持ちを伝える。
「相手」：親しい先輩

いかがお過ごしですか。夏休みを利用して、以前から先輩に勧められていた信楽にやってきました。駅を降りて街へ入ると、うわさどおりユーモラスなタヌキたちが愛嬌いっぱいに出迎えてくれました。今日は街を散策して、ホテルに戻ったばかりです。明日からは伝統産業会館へ足を運んだり、陶芸教室に参加したり、いろいろな焼き物店を見て回る予定です。時間があれば信楽宮跡や玉桂寺にも行きたいし、愛宕山公園にも…。欲張っても、三日しかありません。はたしてどこまでできるとやら、楽しみです。
（「あいさつ」、ｐ545）

用例 18 と用例 19 は旅先からの「はがき文」である。簡単な「文章」であるが、親しい「相手」に出しているため、「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」がほとんど使われていないのが確認できる。特に用例 19 場合は「上下関係」の「上」である先輩を「敬語表現化」における相手にしているのにも関らず、親しい関係であるためか、ほとんど「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」が行われていないことが確認できる。最初の形式的なあいさつの部分だけに「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」を行っているのである。

本節では、「手紙文」における「敬語表現化」の問題―「敬語表現化認識」の問題のなかでも「親疎関係」の問題について分析・考察を行った。「手紙文文例集」における「敬語表現化」の様相を決める要因のひとつとして「人間関係」における「親疎関係」の認識の問題が働いていることが確認できた。

2.5.6「手紙文」における「敬語表現化」の問題―「敬語表現化認識」の問題２「上下関係」

本節では、「手紙文」における「敬語表現化」の問題、そのなかでも「人間関係」における「上下関係」の認識の問題について分析・考察を行う。

「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」は「上下関係」においては「上」の「人間関係」によく使われる傾向がある。それは「敬語表現化」の基本的な性質のひとつである、「表現主体」である「自分」より「上」の人物（上位と認識する人物）に対しては「敬語表現化」を行うということに起因していると思われる。

ただし、ここでは「人間関係」における「上下」の概念について、もっと考えてみる必要がある。それは、「上下関係」には「固定されている上下関係」と「固定されていない上下関係」があるということである。

まず、「固定されている上下関係」であるが、年齢や社会的地位などによって決められる「上下関係」である。2.5.3「手紙文」における「敬語表現化」の問題―「敬語表現化認識」の問題１「親疎関係」の節で述べたように現代社会においては、昔の時代―近代以前の時代のように身分上の区別が厳しく、また、固定的なものではないが、ある程度現代社会においても身分上の区別は存在しており、それによって「人間関係」や「敬語表現化」などは影響を受けているのは事実であろう。そのように、「人間関係」における「上下関係」を決める要因のひとつとして年齢や社会的地位などが考えられるのである。

もうひとつの「固定されていない上下関係」のことは、言い換えると、「流動的な上下関係」と呼ぶこともできるだろう。それは、「恩恵」や「利益」などによって決められる「上下関係」のことである。たとえば、「恩恵」による「上下関係」は、「依頼」などに現れることがあると考えられる。ある「依頼」の行為があり、そこに「頼む側」と「頼まれる側」があるとしよう。両者の「上下関係」が年齢や社会的地位などの「固定的な上下関係」の面では同等であるとしても、「依頼」とそれに伴う「恩恵」の面では、「利益・恩恵」を受ける側になる「頼む側」が「上下関係」においてはどちらかというと「下」の位置に、「利益・恩恵」を与える側になる「頼まれる側」が「上下関係」においてどちらかというと「上」

の位置になると思われる[105]。友達や後輩に何かを頼む場合、特にそれが「利益・恩恵」と（深い）関係のある「題材・内容」である場合に「頼ム」や普段使っていた「普通体」でなく、「オ願イスル」という「敬語表現」や「デス・マス」などの文末敬語を用いて「敬語表現化」を行うことがその例のひとつであろう[106]。

【用例 20】「手紙文」
「表現主体」：一般成人
「表現意図」：知人の母親の病気を見舞う。お見舞いの品を送る。
「相手」：知人の母親

お母上様には、昨年以来のご病気のため、ご起居もままならぬと承りました。まったく存じませず、お見舞いにもあがりませんで失礼いたしました。
ご容体はいかがでいらっしゃいましょうか。以前から血圧がお高いとうかがっておりましたが、そちらのほうのご病気なのでしょうか。お気の強く、ご丈夫そうなお母上様のこと、ご平癒も間近いものとは存じますが、くれぐれもお大事になされますようお祈りいたしております。
別便にて、心ばかりのお見舞いの品をお送りいたしました。お納めいただければ幸いです。まずは略儀ながら、一筆お見舞い申し上げます。
（「そのまま」、pp123～124）

用例 20 は知人の母親を「相手」とした「手紙文」である。比較的に短い「手紙文」であるにも関らず、多くの「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」が確認できる。知人の母親という「相手」は「敬語表現化」における「上下関係」の面から考えると年齢だけでなく、立場においても「自分」より明らかに「上」の「相手」である。いわゆる、上で述べた「固定的な上下関係」の面における「上」の関係にあたるのである。したがって、「オ・ゴ」を用いた「敬意度」の高い「敬語表現」を用いて「敬語表現化」を行っているのではないかと考えられる。特に、「オ・ゴ」を用いた「直接尊重表現」「間接尊重表現」だけではなく、

[105] 蒲谷・川口・坂本（1998）
[106] もちろん、それには「上下関係」だけではなくて「題材・内容」における「用件レベル」などの様々な「敬語表現化」における要素が絡んでいると考えられるが、まず、本節ではそういう場合において生じる「上下関係」に焦点を当てている。

「尊重丁重表現」の形式である「オ・ゴ～イタス」も使われていることが確認できる[107]。全体的には「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」だけではなく、他の「敬語表現」―たとえば、「イラッシャル」「ウカガウ」のような「敬語専用動詞」や「レル・ラレル」のような敬語形式を用いた「敬語表現化」も確認できる。

【用例 21】「手紙文」
「表現主体」：マンションを購入するにおいて保証人が必要になった東京在住の人物
「表現意図」：マンション購入のローンの保証人になってもらう。
「相手」：東京在住の普段、往来している親しい知人

拝啓

やっと梅雨が明けたかと思いきや突然の猛暑、皆様いかがおすごしでいらっしゃいますか。

三月にお邪魔したときはすごさせていただき、まことにありがとうございました。

さて、先日申し上げたマンション購入の件ですが、頭金もなんとかまとまり、あとは住宅ローンで返済できるあてもつきましたが、ローンには東京在住の保証人が二名必要ということで、いささか慌てております。

一人はご近所で親しくしているお方にお願いしましたか、急場のことでもあり、あと一人に思いあぐね、事情をご承知の貴兄にお願いの一筆を執りました次第です。

もちろん金銭上のご迷惑をおかけするようなことはぜったいございませんので、お聞き届けいただければ本当に助かるのでございますが。

ご承諾いただければ書類を持っておうかがいさせていただきます。

どうぞよろしくお願いいたします。

敬具

（「そのまま」、pp162～163）

用例 21 は住宅ローンの保証人を頼む「手紙文」である。普段、往来している（「三月にお邪魔したときはすごさせていただき、まことにありがとうございました。」の部分で確認

107 下線の「敬語表現」である。

できる）間柄の「人間関係」であると考えられる知人を「相手」として書かれた「手紙文」である。いわゆる「固定的な上下関係」の面では、「表現主体」「相手」とちらも「上」ではない関係であると推測できる。

しかし、保証人の依頼という「恩恵」や「利益」が関係して、「頼まれる側―上」「頼む側―下」という「人間関係」における「上下関係」が生じたと考えられる。もちろん、用例 21 における「敬語表現化」には、「用件レベル」も関係していると思われるが、「頼む」という「題材・内容」によって「擬似的な上下関係」（あるいは、「一時的な人間関係」）が生じたと見ることはできないだろうか。

用例 21 で確認できるように、「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」が数多く使われている。特に「間接尊重表現」の「オ・ゴ～イタダク」「オ・ゴ～サセテイタダク」などが「敬語表現化」において用いられていることが確認できる。

本節では、「手紙文」における「敬語表現化」の問題―「敬語表現化認識」の問題のなかでも「上下関係」の問題について分析・考察を行った。「手紙文」における「敬語表現化」は「人間関係」の「上下関係」に影響されるが、その人間関係には「題材・内容」や「利益・恩恵」による「固定されていない人間関係」と年齢や社会的地位などによる「固定されていない上下関係」が存在していることについて分析・考察を行った。

本節で言及した「題材・内容」により「敬語表現化」の問題については次の節で詳しくみていくことにする。

2.5.7「手紙文」における「敬語表現化」の問題―「敬語表現化認識」の問題３「題材・内容」

本節では「敬語表現化」の問題のなかでも「敬語表現化認識」の「題材・内容」の問題について分析・考察を行う。

しかし、「題材・内容」は、各「表現主体」における「個別性」の問題を考えなければならないが、本節では、そのような「個別性」に富んだ「題材・内容」のひとつひとつの

事例ではなく、「題材・内容」の「用件レベル」[108]の問題、つまり、「手紙文」における「題材・内容」の「用件レベル」と「敬語表現化」の様相について分析・考察を行う。

本節における「用件レベル」の述語・概念は、蒲谷・川口・坂本（1998）から取り入れたものである。蒲谷・川口・坂本（1998)、「用件レベル」について次のように記述している。

最初に「用件レベル」について説明しておきましょう。

まず、その「依頼内容」が「相手」にとって実行することの「当然性」の高い場合、たとえば、「ウエイトレス」に「コーヒーを注文する」、「改札にいる役員」に「乗り場を尋ねる」、「教師」に「授業でわからなかったことを質問する」など、その「相手」にとっては「義務・仕事」といえるような「依頼内容」を、用件レベル－１とします。この「用件レベル」は、それ自体は「相手レベル」の上下と関係なく、「相手」が＋１であっても、「用件レベル」は－１になる場合もあります。「用件レベル」は、あくまでもその「依頼内容」を「自分」と「相手」との関係に照らし合わせた「当然性」から決定されるレベルだと言えるわけです。

次にその「依頼内容」が「相手」にとって実行することの「当然性」のある場合、例えば、「ウエイトレス」に「お水のおかわりをする」、「改札にいる駅員」に「車内の忘れ物を探してもらう」、「教師」に「授業に関係するレポートのチェックを頼む」など、「義務」ではないが「広義には仕事」といえるような「依頼内容」を、用件レベル０とします。例えば、「デパートでトイレの位置を聞く」といった「依頼内容」の「用件レベル」は、「相手」が「入り口の案内係」であれば－１、「化粧品売場の店員」であれば０となるわけです。

次にその「依頼内容」が「相手」にとって実行することの「当然性」の低い場合、例えば、「ウエイトレス」に「両替を頼む」、「駅員」に「荷物番をしてもらう」、「教師」に「授業と関係のない本を借りる」など、「義務」でも「仕事」でもなく、それをしてもらうのはあくまでも好意からであるような「依頼内容」を用件レベル＋１とします。見知らぬ「通行人」に「駅の行き方を尋ねる」などというのも用件レベル＋１となります。

[108] 蒲谷・川口・坂本（1998）

最後に、その「依頼内容」が「相手」にとって実効することの「当然性」のない場合、例えば、「ウエイトレス」に「タバコを買ってきてもらう」、「駅員」に「タクシー乗り場まで荷物を運んでもらう」、「教師」に「借金の保証人になってもらう」など、もちろん「義務」でも「仕事」でもなく、しかも実行するための負担が重いような「依頼内容」を、用件レベル＋２とします。「（多額の）借金を依頼する」というのは、多くの場合、用件レベル＋２になるか、あるいは「依頼」できない「用件」であると言えるでしょう。

以上述べてきた「用件レベル」自体は「敬語」の程度とは直接関係がありません。

「手紙文」における「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」は「用件レベル」の高い「題材・内容」の「手紙文」によく使われる傾向があった。引用の最後の部分に記述されているように「用件レベル」は敬語の程度とは直接関係がないといえるが、「用件レベル」の高い―＋１以上―の「依頼」などの「題材・内容」に対して、「表現主体」がその「理解主体」に対してある程度「丁寧な表現」―「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」をよく使う（あるいは、よく使うようになる）という傾向はあるのではないかと思われる。

以下の用例で確認する。

【用例 22】「手紙文」
「表現主体」：〇〇工業株式会社に就職が決まった大学４年生
「表現意図」：身元保証人になってもらう。
「相手」：父親の友人（川田）

拝啓

寒さも日ごと加わってまいりましたが、皆様おかわりなくおすごしのこととお喜び申し上げます。当方も一同無事に暮らしております。

さて、私も大学四年となり、この秋は就職試験でひと苦労いたしました。それでもおかげさまで〇〇工業株式会社に採用が決定し、年末までに入社に必要な手続きをすることになっております。

つきましてははなはだ恐縮でございますが、父とも親交があり、在学中も何くれとなくお世話いただいた川田様に身元保証人になっていただきたく一筆差し上げた次第です。

なお、書類を十二月二十三日までに提出することになっておりますので、ご承諾いただけましたなら、さっそく身元保証契約書を持ち、お願いかたがたお宅におうかがいたく存じます。

遠地のため、まずは書中にてお願い申しあげます。

両親からもくれぐれもよろしくとのことでございます。

末筆ながら、年末ご多忙の毎日、どうぞお体　お大事に　おすごしくださいますようお祈り申し上げます。

敬具

（「そのまま」、pp163～164）

用例 22 は、身元保証人になってもらうという「用件レベル」の高い「題材・内容」の「手紙文」である。用例 22 の「手紙文」における「敬語表現化」と様相として、「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」が多く使われているのは、高い「用件レベル」という要因以外に、父親の友人という「人間関係」における「上下関係」の面では「上」だという「表現主体」の「敬語表現化」における認識も働いていると思われるが、そのような「敬語表現化」における様々な要因なかで本節で注目しているのは、「題材・内容」における「用件レベル」の面である。用例 22 の「手紙文」の内容から確認できるが、「自分の友人の息子」の身元保証人になるというのは「題材・内容」の面から考えると「仕事」でも「義務」でもないことであり、しかも、場合によってはリスクが伴い負担が大きいことである。

用例 22 における「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」の性質として、「お体」「おわかり」「お宅」などのような「直接尊重表現」を用いて「相手」の物事に対して「敬語表現化」を行っている点以外に、「ご承諾いただければ」のような「間接尊重表現」を用いて「敬語表現化」を行っている部分が多いということが確認できる。「ご承諾ください」のように「相手」に要求するような「直接尊重表現」を用いず、「自分側」の「恩恵・利益」として「敬語表現化」することによって「題材・内容」における（あるいは、「手紙文」における）「丁寧さ」を確保したいという「表現主体」の「敬語表現化」における意識が働いた結果ではないだろうか。「父親の友人」に「身元保証人になってもらう」という「用件レベル」の高い「題材・内容」であるという点からそのような「敬語表現化」が行われたのでないかと考えられる。

【用例 23】「手紙文」

「表現主体」：熊本県人会誌『阿蘇』の関係者

「表現意図」：雑誌（『阿蘇』）の原稿を依頼する

「相手」：随筆家一先生

拝啓

新秋の候、先生にますますご状健のことと拝察申し上げます。

さて、突然のお願いで恐縮でございますが、私どもが刊行しております熊本県人会誌『阿蘇』に巻頭随筆をご寄稿していただきたく、ここにお願い申し上げあげます。

先生の、『〇〇』や『△△新聞』などにしばしば発表なされた随筆は、私もその都度拝見させていただいておりました。承りますれば、この夏、一月あまりを熊本にあそばれたこと。その折の感想などを、十一月三十日までに四百字詰原稿用紙十枚前後におまとめいただければ幸いでございます。また、ご稿料は本誌規定により一枚五千円ということでお願い申し上げます。

お忙しい折とは存じますが、ご諾否のお返事を同封のはがきにてご一報いただければ幸いです。

見本誌を同封いたしましたので、よろしくご検討ください。

敬具

（「そのまま」、pp167～168）

用例 23 は一見、用例 22 ほどに「題材・内容」における「用件レベル」が高い「手紙文」には見えない部分もある。それは「文章」を書くことが「仕事」である「随筆家」に「原稿」を依頼するという、ある意味では「当たり前の題材・内容」、「用件レベル」の低い「題材・内容」の「手紙文」だからであろう。しかし、用例 23 の「手紙文」の場合は、原稿を依頼することにおいて「頼む側」が一方的に「締め切り」「分量」「稿料」を決めており、その上「返事」の要求もしている。これは「相手」に「負担のかかる題材・内容」になるとみることができる。そのような要因で、「題材・内容」における「用件レベル」が上がり、また、それに応じた「敬語表現化」が要求されるようになったのではないかと思われる。

用例 22 と用例 23 で確認したように「用件レベル」との関りが他の「手紙文」と比べて

比較的に強い「依頼」の「手紙文」においては「間接尊重表現」の「オ・ゴ～イタダク」が多用されている。以下の用例で確認する。

【用例 24】「手紙文」
「表現主体」：Ｂ商事株式会社に就職が決まった女性
「表現意図」：叔父に身元保証人になってもらう
「相手」：東京在住の叔父

拝啓
　春は名のみで、まだまだきびしい寒さがつづいておりますが、ご機嫌いかがですか、お伺い申し上げます。
　さて、このたびは私の就職につきまして、いろいろご心配をいただき、まことにありがとうございました。おかげさまでＢ商事株式会社に入社が決まり、四月一日付で出社の運びとなりました。
　つきましては、叔父さんに私の身元保証人をお引き受けいただきたいと存じ、お願い申し上げます。ご厄介なお願いで恐れ入りますが、会社の規定で、保証人は都内在住か在勤の方に限られているのです。
　入社後はまじめに仕事にうちこみ、決してご迷惑をおかけすることはいたしません。お誓いします。
　ご承知いただけるようでしたら、書類をとりそろえて、近近お伺いいたします。なにとぞよろしくお願いいたします。
　叔母さんにもよろしくお伝えください。
　時節柄、お体にお気をつけてください。
敬具
（「あいさつ」、p488）

　次は、「依頼」以外の「手紙文」の「題材・内容」における「用件レベル」の問題と「敬語表現化」の問題について考える。まずは、以下の用例から考える。

【用例 25】「手紙文」

「表現主体」：両親の金婚式を準備している男性

「表現意図」：両親の金婚式に来てもらう（招待する）。

「相手」：両親の（親しい）友人・知人

新緑の候、皆様にはご健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、来る五月二十日、私どもの両親が金婚式を迎えます。

つきましては、日ごろご親交いただいております方々をお招きしてささやかな祝宴を開きたいと存じます。

お招きいたしますのは、ごく内輪の懇意の方ばかりです。どうぞお気軽に　お越しいただき、ご歓談いただければ、両人にとってもこのうえない喜びとなることと存じます。ご多用中まことに恐れ入りますが、当日午後六時ごろ拙宅までお越しいただければ光栄です。

なお、改まってのお心づかいはご無用にお願い申しあげます。

（「あいさつ」、p481）

【用例 26】「手紙文」

「表現主体」：手作りクッキーとケーキの店「ハイジ」を開業する女性

「表現意図」：開店パーティーに来てもらう（招待する）。

「相手」：友人・知人

桜花らんまんの季節となりました。皆様にはお健やかに　お暮らしのこととお喜び申し上げます。

さて、私こと、このたび念願の手作りクッキーとケーキの店「ハイジ」を開店することになりました。これもひとえに皆様の温かいご支援のおかげと心から感謝いたしております。

つきましては、来る四月二十日（日曜日）午後二次より、当店喫茶室にてささやかな開店パーティーを開きたいと存じます。

お招きするのは皆様お知り合いの方たちばかりです。お忙しいこととは存じますが、ご家族　おそろいでお気軽に　お越しください。

楽しみにお待ちしております。
（「あいさつ」、p481）

用例 25 と用例 26 は「招く手紙文」、「招待状」である。一般的に「招く手紙」は、その「手紙文」における全体的な「敬意度」が比較的に高いという特徴がある。その理由のひとつとして考えられるのが、「招く」という「題材・内容」における「用件レベル」の問題である。「相手」を「招く」「招待する」という行為は「相手」の生活・私生活に関ることであって、「相手」に時間やお金などを使ってもらうことになる。しかも、そのような「招く」ということに対して「招かれる」側は、一般的に「招待」に応じることが期待される。時間と費用などを使って、「招き」に応じることが期待されるのである。

そのように「相手」が「自分」の「招待」に応じてくれるのは、普段の「親交」や「自分」への「好意」などが影響しているのであろう。そのような面から考えると「招待する」「招く」という行為は「相手」の私的な部分に関係する、しかも「相手」の時間、金銭などにも関係せざるを得ない、「用件レベル」の高い「題材・内容」であると言えるだろう。そのような「題材・内容」における高い「用件レベル」から「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」が多用されるのはないかと考えられる。

本節では、「手紙文」における「敬語表現化」の問題―「題材・内容」における「用件レベル」から見た「手紙文」における「敬語表現化」の問題について分析・考察を行った。「依頼」「招待」のような比較的「題材・内容」における「用件レベル」の高い「手紙文」では、「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」が「敬語表現化」において多く用いられていることが確認できた。

2.6 まとめ

以上、「手紙文」と「スピーチ」における「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」の問題―「敬語表現化」の様相について前半では、「直接尊重表現」と「間接尊重表現」といった敬語形式を中心に、後半では「手紙文」における「人間関係」や「題材・内容」などの「敬語表現化要素」を中心として分析・考察を行った。「手紙文」と「スピーチ」といった「改まった場面」における「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」や「敬語表現」の使用様相に関する

一部の分析、考察であるが、敬語接頭辞「オ・ゴ」の付け方の問題ではなく、「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」が「手紙文」「スピーチ」においてどのような使用様相を表しているのか、また、「オ・ゴ」を用いた「手紙文」「スピーチ」における「敬語表現化」には、どのような意識が働いているのかについて分析、考察を行なった点に、この節の意義を置きたいと思う。

また、本節は第Ⅰ章で確認した「敬語表現化」の概念とその過程、さらに「敬語表現化」という考え方や視点をどのように実際の研究（「敬語研究」「敬語表現研究」）に適用するかを考えるための試みとしての一面も持っている。第Ⅰ章の「理論」をどのように「実際の研究」に適用するかという面では、例を提示することができたのではないかと思う。「敬語」「敬語表現」といった研究対象を「文話」単位で捉え、その「敬語」「敬語表現」ができるまでの過程やその「敬語」「敬語表現」の使用様相を「敬語表現化」という大きな観点から考える。また、「敬語表現化」という大きな観点を具体的に適用するためには、「敬語表現化要素」―「敬語表現化意識」「敬語表現化認識」「敬語知識」を具体的な適用のポイントとして考える、といった点を提示した部分に本節の意義があるのではないかと考えている。

本節の分析・考察においては「文例集」「用例集」からの用例をテキストとし、主にその理想的使用実態や理想的な「敬語表現化」における問題について考えた。分析・考察を行った内容が実際の「敬語表現化」の場面―日本語使用者（母語話者だけでなく、日本語学習者）の実際の使用―においてはどのように現われるようになるのかという問題などが残っているが、それらは今後の課題としたいと思う。

３.「敬語表現化」から見た実際の表現行為における問題―「敬語表現化」における「オ願イシマス」に関する一考察

3.1　問題提起

学習者の日本語を用いる環境において「丁寧な」表現をする（また、理解する）―「敬語表現化」を行う―ということは、コミュニケーションに「適切さ」を与えるために必要な項目のひとつであることは、明確であり重要な項目である。

特にそのなかで重要な項目のひとつとしてあげられるのが、「文話」における「敬語」「敬語表現」と「敬語表現化」の問題である。「文話」レベルの「敬語」「敬語表現」は上述した通り、語・文レベルの「敬語形式」の面だけでは、表現・理解が困難である点があり、今後その実態に関する研究は必要になると考えられる。

そこで、本節では、前節に引き続き、実際の使用場面、「文話」における使用という面で、「語・文」単位としての性質とは異なる性質、使用様相を持っていると考えられる「オ願イシマス」について「敬語表現化」の観点から考察する。「オ願イシマス」が実際の「文話」において見せている性質、実態について考えることによって、「文話」における「敬語表現化」の問題と「敬語表現」の使用の問題に接近したいと思う。さらに、本節には、前節と同様、第Ⅰ章で確認した「敬語表現化」の問題を実際の「敬語表現」の研究にどのように適用するかといった点における試みのひとつとしての意味を持たせたいと思う。

3.2「敬語表現化」から見た「オ願イシマス」の使用様相

3.2.1「オ願イシマス」の構造

「オ願イシマス」は「願ウ」という動詞に「間接尊重語」[109]を作る「オ―スル」を適用させ、さらに「マス」という「丁寧表現」を作る敬語形式を付加した表現である。

109　蒲谷・川口・坂本（1998）。いわゆる「謙譲語」にあたる。「概念」の部分に直接関る動作主体は「高くしないで」、その動作に間接的に関る人物を「高くする」という「敬語的性質」や「敬語的機能」がある表現を「間接尊重語」としている。

「オ願イシ」(「オ」は「尊重」の接頭辞、「オ―スル」で動詞の「間接尊重語」を作る)＋「マス」(「丁寧表現」を作る敬語形式。「文体」を「丁寧」にする)

語・文レベルにおける意味、機能は、「自分」が「相手」に何かを「願う」「頼む」という意味で、それを「丁寧」に表現するという機能を持つ。

実際の「文話」における使用の面では、「オ願イシマス」の形で使われる場合が多い。

3.2.2「オ願イシマス」の使用様相１―「願ウ」の「間接尊重語」としての「敬語表現化」の面

「オ願イシマス」の使用様相のひとつとして、まず、動詞「願ウ」の「間接尊重語」としての使用があげられる。文字通り、何かを「願う」「頼む」という動作に関する「間接尊重語」としての機能を持つ。

例文 60）私と高橋君は神社の前の箱にお金を入れて、いろいろお願いしました。(「みんなⅠ」20 課)

例文 61）あなたのことを信じればこそ、この仕事をお願いしましたのです。(「中級Ⅱ」12 課)

例文 60）は私（と高橋という人物）が、神社へ行き、「神」にいろいろなことを「願った」「頼んだ」という事柄を表している。「自分」の「願う」という行為に関る「神」に対して「尊重」の意識を表現するために「願ウ」に「オ―スル」という「間接尊重語」を作る敬語形式を適用して「敬語表現化」を完遂させているのであろう。「通常表現」として「私と高橋君は神社の前の箱にお金を入れて、いろいろ神に願いことをした」のようなことが存在し、その「内言」としての表現に「敬語表現化要素」としての「敬語表現意識」「敬語表現認識」「敬語知識」を適用して「外言化」させた結果であると考えられる。「神」への願いことという事柄に対する「敬語表現意識」、「神」と自分との関係や願いことに対する「敬語表現認識」、「オ～スル」の「間接尊重語」を用いた「敬語表現」に対する「敬語知識」などが「敬語表現化要素」として働いていて１）のような表現になったと思われる。

例文 61）も同様である。「あなた」に（この）仕事をしてもらうことを「願った」「頼んだ」という事柄を表現している。例文 60）と同様、「自分」の「願う」という行為に関る「あなた」に対して「尊重」の意識を表明するために「オ願イシマス」を用いていると考えられる。つまり、「あなたを信じたから、この仕事をあなたに頼んだ」「あなたにこの仕事を頼んだのは、あなたを信じたからである」のような「内言」としての「通常表現」に、相手（「あなた」）との「人間関係」「場」「題材・内容」などの「敬語表現認識」、「オ～スル」の「間接尊重語」における「敬語知識」などを働かせた結果であると思われる。

何かを「願う」「頼む」という意味、つまり語レベルの動詞の意味に重点が置かれた「オ願イシマス」の使用―「敬語表現化」である。

3.2.3「オ願イシマス」の使用様相 2―「指示表現」と「依頼表現」の中間的性質を持った「敬語表現化」の面

「オ願イシマス」の「敬語表現化」のひとつとして「指示表現」と「依頼表現」[110]の中間的性質があげられる。「指示」をするには「強すぎる」感覚があり、「依頼」をするには「丁寧過ぎる」感覚がある事柄に対して「オ願イシマス」を用いて「敬語表現化」するということである[111]。「敬語表現化」の観点から考えたこの場合の「オ願イシマス」は、「指示」の場合は「指示」を「やわらげる」、「依頼」の場合は「依頼」を「ぼかす」働きを成していると考えられる。「敬語表現化要素」における「敬語表現意識」「敬語表現認識」を複合的に働かせた結果であると思われる。

蒲谷・川口・坂本（1998）によると、「指示」と「依頼」は「行動展開表現」に属し、次のような構造を持っているとしている。

110　蒲谷・川口・坂本（1998）「指示表現」は「指示」を「意図」とする表現、「依頼表現」は「依頼」を「意図」とする表現である。

111　「強すぎる」表現だけでなく、「丁寧過ぎる」表現も「敬語表現化」の観点からは「適切」ではないと考える。その「文話」に相応しい、程好い「敬語表現化」が「適切」であると考える。

○「指示（命令）表現」

・構造

「行動」:「相手」、「決定権」:「自分」、「利益」:「自分」、「相手」、あるいは「利益無し」

・典型的な表現

「～シテクダサイ」「～シナサイ」など

○「依頼表現」

・構造

「行動」:「相手」、「決定権」:「相手」、「利益」:「自分」

・典型的な表現

「～シテモラエマスカ」「～シテクレマスカ」

「指示（命令）表現」と「依頼表現」は、「相手」が「行動」する、つまり、「相手」を動かし、「自分」（必ず「自分」だけだとは限らないが）が「利益」を得るという構造上の共通点を持っている。

「指示」「依頼」という両面の性質を持っている「オ願イシマス」は、このように「相手」を動かし、「自分」に「利益」がある構造を持つ表現であり、働きかけの性質を持っている表現であると言えよう。

次の例から「オ願イシマス」の「敬語表現化」における性質および使用の様相について考える。

【用例 27】[112]

【「主体」Ａの場合】

・「主体」Ａ：喫茶店に来た人物―中田。

112　例文 60）61）と用例 27）～32)、用例 35）～36）は日本語教科書からの例であるが、日本語教科書の内容をもとに筆者が必要であると判断した部分を加えて再構成した例もある。日本語教科書をテキストとして用いた理由は、日本語教科書が持っている日本語の模範としての性質と本稿における待遇表現教育からの観点を重視した点にある。さらに、「意図」などの記述は用例における筆者の設定であり、実際のコミュニケーションを類型化したのもではない。分析・考察のための設定としての意味がある。用例 27）は、財団法人海外技術者研修協会（1990）『新日本語の基礎Ｉ』12 課

・言語行為における「意図」：オレンジジュースを注文する。

・「敬語表現化」における「敬語表現意識」：注文という場面においては適切な表現をする―あるいは、適切な「敬語表現化」を行う必要がある。

・「敬語表現化」における「敬語表現認識」：「人間関係」の面では、「疎」として[113]、また、「客」としての「役割・立場」にあると認識する。

【「主体Ｂ」の場合】

・「主体」Ｂ：注文を受ける店員。

・言語行為における「意図」：客（の要求）に対応する。

【「場」】

喫茶店

中田：（喫茶店に入る）[114]

店員：いらっしゃいませ。

中田：（席に座る）

店員：（メニューを持ってくる）ご注文は？

中田：オレンジジュースお願いします。

店員：はい、かしこまりました。

【用例 28】[115]

【主体Ａの場合】

・「主体」Ａ：美容院に来た人物（リー）

・言語行為における「意図」：髪を切ってもらう

・「敬語表現化」における「敬語表現意識」：髪を切ってもらうことについて適切な表現をする―あるいは、「敬語表現化」を行う必要がある。

---

113 実際の「人間関係」の面から考えると、様々なケースがあると思われる。喫茶店を訪れた客と知り合いの関係にある、あるいは常連である場合もあるだろう。このような場合は客との「人間関係」は「親疎」の軸から考えた場合、「親」として認識される（する）はずである。しかし、本用例においては初対面の「人間関係」を想定している。したがって、「人間関係」の「親疎」の軸から考えた場合、「疎」の関係にあると想定できる。

114 （　）は行動。言語行為（「敬語表現」など）と区別するため、（　）で行動を表している。以下、同様。

115 田中よね他（1998）『みんなの日本語　初級Ⅱ』44 課

・「敬語表現化」における「敬語表現認識」：「人間関係」の面では、客としての「立場・役割」にあると認識する。

【主体Ｂの場合】

・「主体」Ｂ：美容師

・言語行為における「意図」：客（の要求）に対応する

【「場」】

美容院

リー：（美容院に入る）

美容師：いらっしゃいませ。こちらへどうぞ。

リー：（イスに座る）

美容師：今日はどうなさいますか。

リー：カット、お願いします。

美容師：はい、わかりました。じゃ、シャンプーをしますから、こちらへどうぞ。

用例 27 と用例 28 は、「オレンジジュースお願いします」「カット、お願いします」の例である。

喫茶店での注文という場面における「オレンジジュースお願いします」は、オレンジジュースを注文するという「行動展開表現」における「オレンジジュースをください（あるいは、オレンジジュースをくれ)」のような「指示表現」、「オレンジジュースをいただけますか（あるいは、オレンジジュースにしてもらえますか)」のような「依頼表現」の代わりに使われていると言えよう。意思の伝達としての面と「敬語表現化」としての面を考えると、「指示表現」「依頼表現」の両方どちらを用いてもかまわないが、「オ願イシマス」を用いて「敬語表現化」をしているのである。

「オレンジジュースをください（オレンジジュースをくれ)」という「指示表現」を用いて「オレンジジュースを頼む（注文する)」「オレンジジュースをくれ」といった主体Ａの「内言」を具現化した場合、客として店員に要求する、あるいは「指示」するという点からは「適切」であると言える。しかし、例えば、店員が「表現主体Ａ」の客より明らかに年上である場合や初対面の場合という店員との「敬語表現認識」における「人間関係」

の観点、また、「文話」における「丁寧なことば遣い」の必要性といった「敬語表現認識」における「人間関係」や「尊重」「ストラテジー」などの観点から考えると、「指示表現」は、その感覚を「強い（あるいは、強すぎる）」（特に、オレンジジュースをくれの場合）と感じられる場合があり、諸状況から考えた際、適切な「敬語表現化」が行われたと判断できないこともある。したがって、「指示」を「やわらげる」表現として、「敬語表現化」の方法として「オ願イシマス」が選ばれたのではないかと思われる。

一方、「オレンジジュースをいただけますか（あるいは、オレンジジュースにしてもらえますか）」を用いて表現した場合、上の「指示表現」とは逆に、客として店員に要求（注文）することは「当然性」が高いにもかかわらず、「決定権」が「相手」にある「依頼表現」を用いて表現するということになるので、「適切な敬語表現化」ではない部分があると言えよう。「自分」が要求（注文）することに「当然性」がある（高い）ことに対して、「依頼表現」を使うということは「丁寧過ぎる」と感じられるようになるのであろう。したがって、「依頼」を「ぼかす」表現として、「敬語表現化」の方法として「オ願イシマス」が使用されると思われる。

以上のような「内言」を具現化する過程に関する意識、つまり、「指示」を「やわらげる」、「依頼」を「ぼかす」ことによって「適切な敬語表現化」を達成するといった意識をもとにした表現行為における調整のひとつ、つまり「敬語表現化」の手段のひとつとして「依頼表現」と「命令表現」の中間的性質を持っている「オ願イシマス」を使っているのではないだろうか。

意味の伝達の面から考えると「指示」「依頼」の両方どちらを選択してもかまわないが、「文話」における「丁寧さ」や「人間関係」「当然性」などを顧慮した「敬語表現化」の手段のひとつとして、「指示」でも、「依頼」でもない中間的性質を持っている「オ願イシマス」を選択し、「文話」（コミュニケーション）における「適切さ」を確保していると考えられる。

ただし、「人間関係」「場面」「当然性」「題材・内容」の面から考えると、用例 27 の「オ願イシマス」は「依頼」よりは「指示」に近い、「指示」寄りの性質を持った表現として存在していると言えよう。

用例 28 の「カット、お願します」の場合も用例 27 の場合と同様の分析が可能であると考えられる。「指示」の場合、「題材・内容」の「当然性」の面においては「適切」になるが、「人間関係」や「丁寧なことば遣い」などの面においては「強い」表現として感じられる可能性があり、一方、「依頼」の場合は事柄の「当然性」との関りで「丁寧過ぎる」表現として感じられる可能性がある。したがって、「敬語表現化」における調整として「オ願イシマス」を用いて表現していると言えよう。

用例 27 と用例 28 の場合は「指示」と「依頼」の両面から考えると、「指示」のほうに近い「指示」寄りの「オ願イシマス」の「敬語表現」としての働きであったが、次の用例 29 と用例 30 は「指示」よりは「依頼」のほうに近い「依頼」寄りの「オ願イシマス」の働きが確認できる部分である。

【用例 29】[116]

【主体Ａの場合】

・「主体」Ａ：林宅に電話をした人物。田中。

・表現行為における「意図」：林一郎と電話で話す。

・「敬語表現化」における「敬語表現意識」：林一郎に電話を代ってもらうことに対して「適切な」表現をする必要がある。林一郎の自宅という面を考慮し、林一郎の家族に対して「適切な敬語表現」を用いる必要がある。

・「敬語表現化」における「敬語表現認識」：会社の同僚としての「人間関係」、「時空」および「電話」といった「場」に対して認識する。

【主体Ｂ】の場合

・「主体」Ｂ：田中からの電話を受けた人物。林一郎の弟。

・表現行為における「意図」：電話に対応する。電話をかけてきた人物の話しを聞く。

【「場」】

電話（での会話）

田中：もしもし、林一郎さんのお宅でしょうか。

林一郎の弟：はい、そうですが。

116　日米会話学院編（1987）『日本語でビジネス会話』3 課

田中：会社の同僚の田中と申しますが、一郎さんをお願いします。
林一郎の弟：はい、ちょっと待ってください。

【用例 30】[117]
【主体Ａの場合】
・「主体」Ａ：送別会の司会者。加藤。
・表現行為における「意図」：送別会の司会、進行を務める、ラオにあいさつをさせる。
・「敬語表現化」における「敬語表現意識」：ラオと送別会の参加者に対して「適切な敬語表現」を用いる必要がある。
・「敬語表現化」における「敬語表現認識」：司会者としての「立場・役割」、送別会といった「場」の性質などについて認識する
・「敬語知識」：送別会の進行における「適切な敬語表現」を用いる。
【主体Ｂの場合】
・「主体」Ｂ：国に帰るようになった実習生。ラオ。
・表現行為における「意図」：送別会であいさつをする。
【場】
送別会の会場

加藤：それでは、これからラオさんの送別会を始めたいと思います。皆様、お忙しいところ、ご出席くださいまして、ありがとうございます。では、まず始めにラオさんにごあいさつをお願いします。
ラオ：皆さん、こんばんは。私は去年の 4 月に日本に参りましたが、おかげさまで無事に実習ができました。とてもいい勉強になりました。国へ帰っても、この経験を生かして、頑張りたいと思います。皆様のご親切は忘れません。ほんとうにどうもありがとうございました。

用例 29 の「一郎さんをお願いします」は、「内言」の具現化の面では、「一郎さんを出してください（出してくれ）」「一郎さんに代わってください（代わってくれ）」のような「指示表現」でも、「一郎さんを出していただけますか（出してもらえますか）」「一郎さんに代

117　財団法人海外技術者研修協会（1993）『新日本語の基礎Ⅱ』50 課

わっていただけますか（代わってもらえますか）」のような「依頼表現」を用いた「敬語表現」でもかまわない。しかし、用例 29 のような、電話をし、目的の人物に代わってもらうという「題材・内容」においては、「指示表現」は「自分」の都合や意思だけを優先するような「強い表現」になる可能性があり、一方、「依頼表現」は「依頼」をするほどの「題材・内容」でもないので（一般的に、電話の用件で「相手」を呼んでもらうことは「当然性」が高いと言える）、「丁寧過ぎる」感覚を与えてしまう可能性がある。両方、「敬語表現化」の面から考えた場合、「適切でない」ものになる可能性がある。それで、「指示」を「やわらげる」表現として、また「依頼」を「ぼかす」表現として「指示」と「依頼」の中間的性質を持つ「オ願イシマス」を「敬語表現化」におけるひとつの手段として用いていると思われる。

用例 30 の「ごあいさつをお願いします」も用例３）と同様の観点で分析できる。

ただし、用例 29 と用例 30 の「オ願イシマス」場合は、用例 27 と用例 28 と比べてみると「人間関係」「場面」「当然性」「題材・内容」の面で「指示」よりは「依頼」のほうに比較的近い「依頼」寄りの表現であると言えよう。

以上、「オ願イシマス」が持っている「敬語表現化」における「指示表現」と「依頼表現」の中間的性質やその使用の様相について分析した。「オ願イシマス」は「文話」において「強く」感じられる「指示表現」を「やわらげる」、「丁寧過ぎる」と感じられる「依頼表現」を「ぼかす」機能と、「働きかけ」の機能を持つ「敬語表現化」のひとつの手段としての性質があることが確認できたと思われる。また、「オ願イシマス」は「指示」と「依頼」の中間的性質を持っているが、場合によっては「指示」寄りの「オ願イシマス」と「依頼」寄りの「オ願イシマス」が「文話」における「敬語表現」として存在していることが確認できた。

3.2.4「オ願イシマス」の使用様相 3―「当然性」の高い場合、共通の認識の「確認」としての「敬語表現化」の面

「オ願イシマス」は、「文話」における主体同士の共通の認識をもとにした「確認」の性質を持った「敬語表現」として用いられる場合がある。

【用例 31】[118]

【主体Ａの場合】

・「主体」Ａ：病院に来た人物、患者。

・表現行為における「意図」：診察してもらう。自分が診察に来たことを知らせる。

・「敬語表現化」における「敬語表現意識」：診察に対する病院側と自分との共通の認識について確認する。その際、「敬語表現化」を行う。

・「敬語表現化」における「敬語表現認識」：患者としての「立場・役割」や診察を頼むといった「題材・内容」などについて認識する。

【主体Ｂの場合】

・「主体」Ｂ：病院の受付の人物。

・表現行為における「意図」：客（患者の要求）に対応する。

【「場」】

病院の受付

Ａ：（受付の窓口に診察券を出しながら）お願いします。

Ｂ：はい。すぐお呼びしますので、しばらくお待ちください。

【用例 32】[119]

【主体Ａの場合】

・「主体」Ａ：図書館に来た人物、利用者。

・表現行為における「意図」：本の貸出手続きをしてもらう。本の貸出の希望を知らせる。

・「敬語表現」における「敬語表現意識」：本の貸出に対する自分と図書館（の職員）と共通の認識について確認する。その際、「敬語表現化」を行う。

・「敬語表現化」における「敬語表現認識」：図書館の利用者としての「立場・役割」や本の貸出を頼むといった「題材・内容」などについて認識する。

【主体Ｂの場合】

・「主体」Ｂ：図書館の職員―貸出の係員。

118　筆者の実際の経験を再構成した。

119　筆者の実際の経験を再構成した。

・表現行為におけ「意図」：利用者（の要求＝本の貸出）に対応する

【「場」】

図書館

A：（係員に本を出しながら）お願いします。

B：はい。（貸出の手続きをする）○月○日までです。

用例 31 の「オ願イシマス」の場合も、上で確認した例と同様に「指示表現」を用いても、「依頼表現」を用いても、「内言」の具現化という面においては成立すると言えよう。しかし、病院の受付窓口という「文話」における「場」や「題材・内容」の「当然性」などの「敬語表現化」の面から考えると、「指示表現」や「依頼表現」を用いた「敬語表現化」は必ずしも適切なものになるとは言えない部分があるだろう[120]。病院に来た患者が診察券を出し、診察を受けるということや受付窓口の人物がそれに対応するということは、「当然性」が高く、共通の認識―病院は診察を受ける所であり、病院の受付に診察券を出すという行為は診察を受ける意思（希望）があることであるという認識―のもとに行なわれる「行為（コミュニケーション）」だからである。

患者としては、「病院の窓口に診察券を出すという行為は、診察を受ける意思（希望）があることだ」という認識が、受付の人物としては、「病院に来て診察券を出すということは、診察を受けるという意思（希望）があることだ」という認識がある。このような「診察を受ける」という「当然性」の高い「題材・内容」について、共通の認識を持っている場合、共通の認識の確認し、「相手」に働きかける「敬語表現化」のひとつの手段として「オ願イシマス」が用いられるのではないだろうか。

用例 31 の診察券を出す場合、用例 32 の貸出希望の本を出す場合、両方とも、無言（「…」）で出しても、「はい」と言いながら出しても、つまり、「敬語表現化」を回避しても、「相手」に働きをかけるという機能には変わらない。要するに、「敬語表現化」を回避するといった

120　上で確認した用例 27～用例 30 の場合も、ある程度「文話」における「当然性」を有しているが、用例 31 と用例 32 の場合は用例 27～用例 30 に比べ、当然の業務といった面で比較的「当然性」が高いと思われる。さらに、用例 31 と用例 32 は、「オ願イシマス」の代わりに「指示表現」「依頼表現」を用いて「敬語表現化」を行った場合、用例 27～用例 30 に比べ、あまり「適切」でないと感じられるのではないだろうか。「当然性」と表現の置換という点において用例 31・用例 32 と用例 27～用例 30 とでは違いがあると思われる。

ストラテジーも有効になり、意思の伝達という面においては成立するのである。しかし、無言で出したり、「はい」と言いながら出したりするよりは、「オ願イシマス」を用いた「敬語表現化」を選択することによって、主体の「意図」を達成する（「適切な」）ひとつの手段としての役割を果たしているのではないだろうか。

用例 32 は図書館におけるやりとりであるが、用例 31 の同様の観点で分析できる。

用例 31 と用例 32 のような「文話」の場合、特徴としては用例 27～用例 30 とは違って、「オ願イシマス」が単独で使われる傾向がある。それは、上記で確認したように「文話」における「当然性」がきわめて高く、主体同士が事柄に関する共通の認識を持っているからであろう。具体的な表現、あるいは、他の「敬語表現」[121]を用いなくても、「相手」に働きかけたり、「相手」との共通の認識の確認ができたりする点に対して「敬語表現化」を達成するといった点から用例 27～用例 30 との相違点があると言えよう。

「オ願イシマス」は、「文話」の事柄における「当然性」が高く、「当然性」について「主体」同士が共通の認識を持っている場合、共通の認識を確認し、「相手」に働きかける「敬語表現化」のひとつの手段として用いられることがある。

3.2.5「オ願イシマス」の使用様相 4―「あいさつ」としての性質を持った「敬語表現化」の面

「オ願イシマス」は、上で確認した「願ウ」の「間接尊重語」としての「敬語表現化」、「指示表現」と「依頼表現」の中間的性質を持つ表現としての「敬語表現化」、「当然性」の高い場合、共通の認識の「確認」としての「敬語表現化」のような実質的意味を持つ表現として用いられるだけでなく、「人間関係」における「あいさつ」表現として使われる場合がある[122]。

---

121 たとえば、「診察に参りました。これ（診察券）をご確認ください。」など。

122 あいさつも「敬語表現」の一種として考える。この考え方は、「敬語表現」および「敬語表現化」の範囲を広くとらえた考え方であり、本稿における概念でもある。

【用例 33】[123]

【主体Ａの場合】

・「主体」Ａ：新しく引越ししてきた人物。サントス。

・表現行為における「意図」：引っ越しのあいさつをする

・「敬語表現化」における「敬語表現意識」：近所に対する「丁寧な」気持ちを表すあいさつをする必要がある。対面することが多くなる隣人に対する尊重の気持ちを表すあいさつをする必要がある。

・「敬語表現化」における「敬語表現認識」：隣人との「人間関係」、引越しのあいさつといった「題材・内容」などについて認識する。

【主体Ｂの場合】

・「主体」Ｂ：サントスが引っ越ししてきたアパートの住民。山田。

・表現行為における「意図」：訪問者（サントス）に対応する。

【「場」】

山田の部屋の玄関

サントス：（山田の玄関のベルを鳴らす）

山田：はい。どなたですか。

サントス：408 のサントスと申しますが…

山田：（ドアを開けて出る）あ、はい。

サントス：こんにちは。サントスと申します。引越ししてきました。これからお世話になります。どうぞよろしくお願いします。

山田：こちらこそよろしく。

サントス：（持っていたものを出しながら）あのう、これ、ほんの気持ちです。

山田：あ、どうも…。何ですか。

サントス：コーヒーです。どうぞ。

山田：どうもありがとうございます。

【用例 34】[124]

---

[123] 田中よね他（1998）『みんなの日本語　初級Ⅰ』2 課

[124] 田中よね他（1998）『みんなの日本語　初級Ⅱ』40 課

【主体Ａの場合】

・「主体」Ａ：ハンスの母親。クララ。

・表現行為における「意図」：ハンスの学校での生活について聞く、ハンスの担任教師にあいさつをする。

・「敬語表現化」における「敬語表現意識」：担任講師に対するあいさつでは丁寧な気持ち、「尊重」の意識を表す必要がある。

・「敬語表現化」における「敬語表現認識」：担任講師と父兄といった「人間関係」、職員室のいった「場」、面談の内容といった「題材・内容」について認識する。

【主体Ｂの場合】

・「主体」Ｂ：ハンスが通っている小学校の担任教師。伊藤。

・表現行為における「意図」：ハンスの父兄（クララ）に対応する。ハンスの学校生活について話す。

【「場」】

ハンスの小学校、職員室。

クララ：先生、ハンスは学校でどうでしょうか。友達ができたかどうか、心配なんですが…

伊藤：大丈夫ですよ。ハンス君はクラスでとても人気があります。

クララ：そうですか。安心しました。勉強のほうはどうですか。漢字が大変だと言っていますが…

伊藤：毎日漢字のテストをしていますが、ハンス君はいい成績ですよ。

クララ：そうですか。ありがとうございます。

伊藤：ところで、もうすぐ運動会ですが、お父さんもいらっしゃいますか。

クララ：ええ。

伊藤：ハンス君が学校でどんな様子か、ぜひ見てください。

クララ：わかりました。これからもよろしくお願いします。

用例 33 と用例 34 は、「あいさつ」における「敬語表現」として「オ願イシマス」が使われる例である。用例 33 と用例 34 のような「人間関係」における「あいさつ」として使われる「オ願イシマス」は、実際の「文話」では、「ヨロシク」や「ドウゾヨロシク」など

と一緒に「敬語表現化」される場合が多い。

このような「オ願イシマス」の「あいさつ」表現における「敬語表現化」としての使用は、上で確認した例文 50）51）と用例 27～用例 32 とは違って、「内言」の具現化の面から見ると、実質的な意味や機能、すなわち、何かを「願う」「頼む」、「相手」に働きかける、事柄の確認などの意味や機能を持たない、実質的な働きを期待する「敬語表現化」の手段ではなく、固定的、習慣的「あいさつ」表現における「敬語表現化」としての性質を持っていると思われる。

もちろん、このような「あいさつ」に実質的意味がほとんどなくなっている「オハヨウゴザイマス」「コンニチハ」などのあいさつ[125]とは、「敬語表現化」における面だけでなく、表現自体の性質や機能という面において差があると思われるが、上の項目において確認した「オ願イシマス」の「敬語表現化」の面と比べてみると、その実質的意味が比較的少ない性質―つまり、固定的、習慣的性質を持った「敬語表現化」のひとつであると言えよう。

3.3「オ願イシマス」の「敬語表現化」における性質考察

本節では、「オ願イシマス」の性質―特に、「オ願イシマス」の「敬語表現」としての性質について論ずる。どのような理由で「オ願イシマス」は「文話」（コミュニケーション）における「敬語表現」になるのか、「敬語表現化」においてはどのような位置を占めているのかなどの問題についての考察である。「オ願イシマス」の「敬語知識」としての意味、機能をもとに、「敬語表現化」における意識を探る。

3.3.1「オ願イシマス」の「人間関係」に関する意識

何かを「願う」「頼む」ということは、基本的に「相手」の能力を評価―「自分」より

125 本節においては、「オハヨウゴザイマス」は「オハヨウ」「オス」などに対する「敬語表現」として、「コンイチハ」は、「ヨウ」「チワッス！」などに対する「敬語表現」として認識している。

高く評価―することにつながると言える。「自分」より優れている「能力」あるいは「力」があるので、「自分」はその「能力」あるいは「力」に頼って「願う」「頼む」ことができるということになる。「相手」の能力を評価し、あるいは拡大して解釈することは「相手」を高くすることになる。また、そのように表現するということが「丁寧」であるという「敬語的性質」―「敬語」における基本的な概念から考えると、「オ願イシマス」は「文話」における「敬語表現」としての性質を持っていることになると言えよう。つまり、「相手」の能力に対して評価するといった「敬語表現化」における意識を表すことによって「敬語表現化」を実現させているのではないだろうか。

このような「敬語表現意識」における「尊重」[126]の意識と「人間関係」における「相手」の能力を評価するという点で、「オ願イシマス」は「文話」における「敬語表現化」のひとつの手段としての意味を持つようになると思われる。

3.3.2「オ願イシマス」の「恩恵」に関する意識

何かを「願って」、それを聞いてもらう、かなえてもらうということは「自分」にとって「ありがたい」「うれしい」ことである。その「ありがたい」「うれしい」ことを、「自分」に対する「相手」からの「恩恵」であると考えると[127]、「自分」が「願う」ことを「相手」が聞いて、かなえてくれるという期待、あるいは前提（あるいは認識、「敬語表現化」における認識を含めて）[128]が働いている「オ願イシマス」には、「敬語表現化」における「相手」からの「恩恵」に関する認識が存在していると言えるのではないだろうか。「相手」からの「恩恵」を期待する理由は、3.3.1 で述べたように「相手」は「自分」より「能力」「力」があるので、「自分」の「願う」ことがかなえられるという「敬語表現化」における認識があるからであろう。

---

126 この場合は「尊敬」に近い意識としても考えられるが、実質的に「尊敬」の意識があるとは断言できない。

127 蒲谷・川口・坂本（1998）

128 「前提」と表現した理由は、本節の用例と例文における「オ願イシマス」の場合、一般的な認識として、「自分」の「願い」を「相手」が聞いてくれる、かなえてくれることがそれほど困難ではないと考えられるからである。ただし、これは、本節の例においての前提で、実際、他の「文話」（コミュニケーション）においては困難な場合もあり得るだろう。

「相手」からの「恩恵」がある、言いかえると、「自分」に「利益」があるように表現するのが「丁寧」であるという「敬語的性質」から考えると[129]、「オ願イシマス」は「敬語表現化」におけるひとつの手段として意味を持つようになると思われる。

「主体」と「主体」との関係における「恩恵」を表現するという点で、「オ願イシマス」は「文話」における「敬語表現化」を達成していると言えよう。

3.3.3「オ願イシマス」の「敬語形式」における「丁寧な」表現としての意識

「願ウ」に「オ―スル」という「間接尊重語」を作る形式を用いた「オ願イシマス」は、非敬語表現としての「願ウ」ではなく「オ」や「マス」という敬語形式を用いた「敬語表現」として存在しているため、「文話」における「敬語表現」としての機能があると考えられる。

「オ」は尊敬、謙譲、美化の接頭辞[130]で、物事に対する「尊重」の意識を表す敬語形式であり、「マス」は「文話」を「丁寧に」する機能を持つ「敬語」である。[131]また、主体は「敬語表現化」においてそのような「敬語知識」を「敬語表現化」におけるひとつの指標として認識していると思われる。「文話」における「オ願イシマス」は、その意味・機能だけでなく、使われている「敬語形式」―「オ」「マス」の持っている「丁寧な」感覚、機能によって、「敬語表現」としての性質を表すようになると思われる。

3.3.4「オ願イシマス」と他の表現との関係における意識

前節で確認したが、「オ願イシマス」は「内言」の具現化という面では、また、「敬語表現化」の面では、他の表現―「指示表現」「依頼表現」などとの交換、あるいは、置換ができると考えられる。

129　蒲谷・川口・坂本（1998）「行動展開表現」においての「丁寧さ」の原理
130　辻村（1991）
131　蒲谷・川口・坂本（1998）

特に、「指示表現」「依頼表現」以外の表現との関係を考えると、「文話」における「敬語表現」「丁寧な」表現としての性質が明らかになる。

用例 27 から、

オレンジジュースお願いします　→オレンジジュースください。

用例 28 から、

カット、お願いします　→カットしてください。

用例 29 から、

一郎さんをお願いします　→一郎さんを呼んでください、一郎さんいますか。

用例 31 から、

（受付の窓口に診察券を出しながら）お願いします　→（受付の窓口に診察券を出しながら）はい、（受付の窓口に診察券を出しながら）…（無言）

上の例の通り、他の表現および「敬語表現」とも交換、置換はできるが、「オ願イシマス」と比較してみると、「オ願イシマス」を用いたほうが「丁寧な」感覚の表現になる、あるいは、「敬語表現」として「丁寧さ」が感じられると言えよう[132]。

他の表現および「敬語表現」と比べ、比較的「丁寧な」感覚があるという点で「オ願イシマス」は「文話」における「敬語表現化」におけるひとつの手段として意味を持つようになるのではないだろうか。

3.3.5「オ願イシマス」の間接的表現としての意識

「オ願イシマス」は実質的な意味をもつ「頼む」や授受動詞の「ください」「もらう（いただく）」を用いた「敬語表現化」のように、ある事柄について「直接」に働きかけるのではなく、「願ウ」という形で比較的「間接的」に働きかけるという点があると思われる。

132　「オ願イシマス」が最も「適切な敬語表現化」の手段であるという意味ではない。「場」「人間関係」「内容・題材」などの諸「敬語表現化要素」によって「オ願イシマス」より「適切な敬語表現」はあり得ると思われる。しかし、本節においては、提示した他の表現と比べると比較的「適切」で、「丁寧さ」を感じられるものとして考えている。

働きかける行為[133]ということについて「直接」表現するのでなく、「―（ヲ）オ願イシマス」という形を使うことによって、「自分」の要求、希望を「相手」に「直接」差し出すことなく、「間接的」に（よりスムーズに）提示するという性質があると思われる。これは、「敬語表現化認識」におけるストラテジーに関する問題であって、「敬語表現化」を行う際、どのような方法を用いるかということである。回避、省略などの様々な方法があるが、（比較的）「間接的」に「敬語表現化」を行う手段のひとつとして「オ願イシマス」が用いられているのではないかと思われる。

「相手」に対して「直接」差し出し、働きかける（あるいは、要求する）ことより、「間接的」に働きかける（要求する）ことが「敬語表現化」における「丁寧さ」を確保するひとつの手段であると考えると、「オ願イシマス」は「文話」における「主体」と「主体」との摩擦などを減らすような「敬語表現化」としての意味を持つ部分もあると言えるのではないだろうか。

3.4 まとめ―「オ願イシマス」の「敬語表現化」における意義

以上、「文話」における「オ願イシマス」の使用様相や「敬語表現化」における性質、意識などについて分析、考察を行った。

ある表現の「文話」レベルにおける使用様相や「敬語表現化」における性質、意識は、語・文レベルでの分析、考察だけでは、確認できない部分があると思われる。それは「文話」における使用や「敬語表現化」には「人間間系」「場面」「題材・内容」などの複雑な要素が関っているからであろう。「敬語表現」の使用様相の問題に接近するためには、単なる語・文レベルの性質・意味だけでなく、その「敬語表現」ができるまでの過程―「敬語表現化」の過程を考える必要があると思われる。しかし、ある「敬語表現」における「表現主体」の「敬語表現化」における意識や「敬語表現化」の過程は、「表現主体」の「頭のなか」で行われることであり、場合によっては、その過程を自覚していないこともある。より厳密な研究のためには、実際の「敬語表現」における「表現主体」に「敬語表現化」における過程や「敬語表現化」における認識・意識などについて「直接に聞かなければな

133 蒲谷・川口・坂本（1998）「行動展開表現」

らない」が、実際の研究には困難な点が多いと思われる。したがって、本節では、日本語における模範例、日本語教育における模範例としての性質があると考えられる日本語教科書や筆者の実際の経験を再構成したものをテキストとして用いている。限られた範囲における分析・考察であったが、第Ⅰ章で確認した「敬語表現化」の問題や考え方をどのように実際の「敬語表現」の研究に適用するかという点に本稿における本節の意味をおきたいと思う。

「願ウ」に「オ～スル」の「間接尊重表現」の敬語形式を適用させた「オ願イシマス」ではなく、「文話」のなかで様々な意味や役割を持つ「オ願イシマス」という観点から接近した本節は、語用論的な手法を取り入れ、「敬語表現化」の問題について論じた。特に「文話」の「題材・内容」によって「敬語表現」としての微妙なバリエーションを見せるという点を提示することによって、「敬語表現」の研究におけるひとつの指標を提示することができたのではないかと考えている。

さらに、本節では「オ願イシマス」の「表現主体」における「表現行為」―「敬語表現化」の問題に注目している。どのような意識で「オ願イシマス」という「敬語表現」を使っているのか、その「敬語表現化」の過程にはどのようなものが考えられるのかにポイントを置いて分析・考察を行っている。前節と同様、実際のコミュニケーションという面を考える場合、表現と理解の両面を考えなければならないが、本節では、「オ願イシマス」という「敬語表現」における「表現主体」の意識や認識などの面に注目しているため、「表現」のみに注目している。さらに前に進んだ研究としては、表現と理解の両面からみた、「敬語表現化」の問題について考える必要があると思われるが、それらは今後の課題としたいと思う。

本節では、「オ願イシマス」という一部の「敬語表現」に対する分析、考察であったが、使用頻度が高く、様々な使用の様相を見せている「敬語表現」に対する分析、考察であったため、「文話」における「敬語表現」と「敬語表現化」の実態の一部を覗くことができたと思われる。

4．まとめ

第Ⅱ章では、第Ⅰ章の「待遇コミュニケーション」における「敬語表現化」の問題に対する考え方をもとに、待遇表現教育における「敬語表現化」の考え方の適用の問題と「文話」における「敬語表現化」の諸相について述べた。

第Ⅱ章は、第Ⅰ章で確認した「敬語表現化」の概念とその過程、さらに「敬語表現化」という考え方や視点をどのように実際の日本語授業や研究（「敬語研究」「敬語表現研究」）に適用するかを考えるための試みとしての一面を持っている。第Ⅰ章の「理論」をどのように「実際の日本語授業」と「実際の日本語（「敬語表現」）の研究」に適用するかという問題については、ひとつの例を提示することができたのではないかと思われる。

第Ⅱ章では、まず、第Ⅰ章で確認した「敬語表現化」の考え方を実際の授業にどのように適用させるかという点について考えた。川口（2003）の「チャンピオンスピーチ」における実際の授業の様々な設定や活動の内容について「敬語表現化」の観点から分析・考察をし、さらに、筆者が実施した日本語クラスの「発表会」における「敬語表現化」の考え方の適用について報告とともに「敬語表現化」の観点から分析・考察を行った。特に、実際の授業における「敬語表現」や「敬語表現化」に対する意識を高める方法について考えた。「敬語表現化」の概念・理論をどのように実際の授業に適用するかという面におけるひとつの例を提示することができたという点に第Ⅱ章の１節の意味をおきたいと思う。

さらに、２節、３節では、敬語接頭辞「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」を中心に実際の「敬語表現」の研究に第Ⅰ章で確認した「敬語表現化」の概念・理論をどのように適用させるかという面について述べた。２節では、「手紙文」と「スピーチ」における敬語接頭辞「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」とその「敬語表現」について、３節では「オ願イシマス」の「文話」における「敬語表現」としての使用様相について分析・考察を行った。「敬語」や「敬語表現」といった研究対象を「文話」単位で捉え、その「敬語」「敬語表現」ができるまでの過程やその「敬語」「敬語表現」の使用様相を「敬語表現化」という大きな観点から考えたのである。また、「敬語表現化」という大きな観点を具体的に適用するためには、「敬語表現化要素」―「敬語表現化意識」「敬語表現化認識」「敬語知識」を具体的な適

用のポイントとして考えた点を提示したところに２節と３節の本稿における意義があるのではないかと考えている。

2 節と３節は、主に「表現主体」の「表現行為」に注目した分析・考察になっている。「待遇コミュニケーション」という観点から考えれば表現と理解の両面から考える必要があるが、第Ⅰ章で述べたように、本稿は、「言語行為」を行う「表現主体」の「表現行為」、その中でも「敬語表現」を生成させる「敬語表現化」の問題に注目しているため、分析・考察の対象や観点は「表現行為」―「敬語表現化」の問題に限定させた。コミュニケーションの観点からみると一部に対する分析・考察になるが、従来の語・文単位で捉える「敬語」「敬語表現」の観点ではなく、「表現主体」の「表現行為」という観点、特に「敬語表現」を行うために意識・認識しなければならない諸項目について考えることによって、「敬語表現」研究におけるひとつの考え方―指標を提示することができたのではないかと考えている。

本章における分析・記述は、実際の教室活動の側面でも、実際の「文話」における「敬語表現化」の側面でも、不足している部分が多いと思われるが、Ⅰ章で分析・考察した「敬語表現化」の概念、および「敬語表現化過程」の概念を実際の教室活動や実際の研究に適用させるひとつの試みとして意義を持っていると考えている。

今後は、Ⅰ章における「敬語表現化」と「敬語表現化過程」の概念をどのように待遇表現教育―「敬語表現」教育に適用させるかといった点、またどのように待遇表現研究―「敬語表現」の研究に適用させるかといった点についてさらに資料を収集し、分析・考察を行いたい。また、表現だけでなく理解の側面からみた「敬語表現」への接近も課題として残っているが、それらの問題についても今後の課題として考えていきたい。

【参考文献】

石田敏子（2000）『日本語教授法』大修館書店

意図研究会（2001）「『意図』とは何か―『意図』はどのように捉えられてきたかー」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』14

ＮＨＫことば調査グループ（1980）『日本人と話しことば』日本放送出版協会

大石初太郎・林四郎編（2000）『敬語の使い方』明治書院

奥山益郎（1986）『敬語用法辞典』東京堂出版

蒲谷宏（1997）「「〈言語＝行為〉観」に基づく日本語教育における「文型」の位置づけ」『講座日本語教育』32 早稲田大学日本語研究教育センター

蒲谷宏・川口義一・坂本恵（1998）『敬語表現』大修館書店

蒲谷宏（1999）「「〈言語＝行為〉観」に基づく日本語研究の構想―序論―」『森田良行教授古希記念論文集　日本語研究と日本語教育』明治書院

―――（2000）「「〈言語＝行為〉観」に基づく日本語研究の構想」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』13

―――（2002）「『意図』とは何か―『意図』をどのように捉えるか―」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』15

―――（2003）「「待遇コミュニケーション教育」の構想」『講座日本語教育』39 早稲田大学日本語研究教育センター

―――（2004）「「日本語教育」における「文法」の教育の問題を問い直す―「〈言語＝行為〉観」に基づく「日本語教育」の立場から―」『早稲田大学国語教育研究』24 早稲田大学国語教育学会

川口義一（1979）「敬語の周辺」『講座日本語教育　第１５分冊』早稲田大学語学教育研究所

――――（1987）「日本語初級教科書における敬語の使われかた」『日本語教育６１号』日本語教育学会

――――（2002 a）「海外における待遇表現教育の問題点―台湾での研修会における「事前課題」の分析（１）」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要 15 号』早稲田大学日本語教育センター

――――（2002 b）「海外における待遇表現教育の問題点―台湾での研修会における「事

前課題」の分析（２）」『講座日本語教育第 38 分冊』早稲田大学日本語研究教育センター
――――（2003）「海外における待遇表現教育の問題点―台湾での研修会における「事前課題」の分析（３）」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要 16 号』早稲田大学日本語研究教育センター
――――（2005）「中級会話練習の落とし穴―談話記述の精緻化に向けて―」『ヨーロッパ日本語教育９　2004 日本語教育シンポジウム報告発表論文集』ヨーロッパ日本語教師会
川瀬生郎他（1996）『日本語中級Ⅱ』国際交流基金
菊地康人（1994）『敬語』角川書店
――――（1996）『敬語再入門』丸善
――――（2003）「敬語とその主なテーマの概観」『朝倉日本語講座８　敬語』朝倉書店
金田一春彦・林大・柴田武編（1988）『日本語百科大事典』大修館書店
金東奎（2003a）「敬語接頭辞「お・ご」を用いた敬語化とその敬語表現に関する一考察」早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文
―――（2003b）「オ願イシマスに関する一考察」『待遇コミュニケーション研究　創刊号』早稲田大学待遇コミュニケーション研究会
―――（2004）「「手紙文」と「スピーチ」から見た敬語接頭辞「お・ご」を用いた敬語表現の使用様相」『早稲田大学日本語教育研究　第 4 号』早稲田大学大学院日本語教育研究科
―――（2005）「「待遇コミュニケーション」における「敬語表現化」に関する考察―待遇表現教育のあり方への視座―」『早稲田大学日本語教育研究　第７号』早稲田大学大学院日本語教育研究科
窪田富男・池尾スミ（1971）『日本語教育指導参考書２　待遇表現』文化庁
窪田富男（1990）『日本語教育指導参考書 17　敬語教育の基本問題（上）』国立国語研究所
――――（1992）『日本語教育指導参考書 18　敬語教育の基本問題（下）』国立国語研究所
熊井浩子（2003）「「待遇表現」の諸側面と、その広がり―狭くとらえた敬語、広くとらえた敬語―」『朝倉日本語講座８　敬語』朝倉書店
小池清治・小林賢次・細川秀雄・犬飼隆編（1997）『日本語学キーワード事典』朝倉書店

財団法人海外技術者研修協会（1993）『新日本語の基礎Ⅱ』スリーエーネットワーク
柴田武（1957）「『お』が付く語・付かない語」『言語生活』7 月号
清水康行（1995）「動詞の敬語法―動詞を敬語化する三つの方式―」『国文学　解釈と教材の研究（12 月号）』学灯社
杉戸清樹（1999）「変わりゆく敬語意識―敬語の役割を考えるために」『月刊言語』1 月号
杉山アイシェヌール「外国人から見た敬語」『朝倉日本語講座８　敬語』朝倉書店
田中章夫（1969）「敬語論議はなぜ起こる」『言語生活　213』筑摩書房
――――（1972）『現代の敬語とマナー』至文堂
田中よね他（1998）『みんなの日本語　初級Ⅰ』スリーエーネットワーク
――――――（1998）『みんなの日本語　初級Ⅱ』スリーエーネットワーク
辻村敏樹（1981）「敬語はどう変わりつつあるか―日本語教育の立場で考える―」『講座　日本語教育　第 17 分冊』早稲田大学語学教育研究所
――――（1991）『敬語の用法　角川小辞典 6』角川書店
土屋信一（1987）「話す敬語と書く敬語」『国文学　解釈と教材の研究―11 月臨時増刊号』学灯社
時枝誠記（1941）『国語学言論』岩波書店
――――（1955）『国語学言論　続編』岩波書店
日米会話学院編（1987）『日本語でビジネス会話』日米会話学院
林四郎（1999）「敬語の役目はなくならない」『月刊言語』11 月号
バルバラ・ピッツィコーニ（1997）『待遇表現から見た日本語教科書：初級教科書５種の分析と批判』くろしお出版
白同善（1996）「日韓敬語動詞発達の要因に関する一考察」『日本語学』7 月号
細川英雄（2004）「日本語教育は何をめざすか―言語文化活動の理論と実践―オンデマンド版」明石書店
松島純子（1999）「動詞の敬語法の実態調査―特に特定語形と成分付加形について―」『福岡 YMCA 日本語教育論文集』9 号
水谷修・水谷信子（1988～1991）『外国人の疑問に答える日本語ノート　１～４』ジャパン・タイムズ
益岡隆志（1987）『命題の文法』くろしお出版
吉沢典男（1973）「職場の敬語」『敬語講座⑥　現代の敬語』明治書院

【「手紙文文例集」「スピーチ用例集」】

片岡智志（1996）『事例別・すぐ使える　手紙・はがき文例事典』小学館
現代文書研究会編（1990）『そのまま使える手紙の書き方全書』池田書店
講談社編（2001）『あいさつ・スピーチと手紙の事典』講談社
木庭久美子（1999）『すぐ書ける　お礼の手紙・はがきの手帳』小学館
主婦と生活社（1993）『すぐ役立つ若い女性の手紙　実例集』主婦と生活社
主婦の友社編（2001）『ＣＤ－ＲＯＭ付　手紙・はがき・文書文例大事典』主婦の友社
成美堂編集部（2001）『短いスピーチ大事典 1000』成美社
中川越（1988）『目上の人への手紙文』永岡書店
永田書店編集部（1995）『すぐに使える　式辞・あいさつ実例百科』永田書店
ひろば制作室編（1998）『てがみ広場　女たちのおしゃべりネットワーク』青樹社
藤村英和（1998）『葬儀・法要のあいさつ』西東社
ブライダルスピーチ研究会（1998）『新郎・新婦のスピーチ実例集』日本文芸社
松平泰臣（1998）『新・実用手紙百科』有紀書房
輪辻潔（1997）『すぐに役立つ大活字 BOOK’ｓ　わかっているようでわからない手紙の書き方』三省堂出版社

早稲田大学 博士（日本語教育学） 学位申請 研究業績書

［学位論文・学術論文・著書・その他（学会発表等）の順に記入してください］

氏　　名　　**金　　東奎**

（２００５年　１２月　２０日　現在）

学位論文

１．敬語接頭辞「お・ご」を用いた敬語化とその敬語表現に関する一考察　2003　早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文

学術論文

１．蒲谷宏，待遇表現研究室（金東奎）　：　2003　「待遇コミュニケーション」とは何か．早稲田大学日本語教育研究，第2号，55-76項
２．金東奎　：　2003　「オ願イシマス」に関する一考察．待遇コミュニケーション研究，創刊号，23-36項.
３．金東奎　：　2004　「手紙文」と「スピーチ」から見た敬語接頭辞「お・ご」を用いた敬語表現の使用様相．早稲田大学日本語教育研究，第4号，83-102項.
４．金東奎　：　2005　「待遇コミュニケーション」における「敬語表現化」に関する考察―待遇表現教育のあり方への視座―．早稲田大学日本語教育研究，第7号，67-80項.
５．田中奈央，金東奎，高木美嘉，田中奈央，田中美樹，蒲谷宏　：　2005　コミュニケーション活動型授業に関する考察―日本語５Ｂ・６Ｂにおける実践から―．講座日本語教育，第41分冊，採用決定.

著書

１．待遇コミュニケーション研究室，金東奎（「敬語」共同データ作成委員代表）　：　2005　敬語化事典―試作版―2004年度版．早稲田大学大学院日本語教育研究科待遇コミュニケーション研究室（蒲谷　宏）

その他

＜学会発表＞

１．金東奎　：　2003　「手紙文」における敬語接頭辞「お・ご」を用いた「敬語表現」の様相―「直接尊重表現」と「間接尊重表現」を中心に―．早稲田大学日本語研究第12号，50-51項.
２．金東奎　：　2004　敬語接頭辞「お・ご」を用いた「敬語表現」の諸相―「手紙文」「スピーチ」を中心にした使用意識の問題について―．社会言語科学会第14回大会発表論文集，184-187項.
３．金東奎　：　2005　「待遇コミュニケーション」の観点から見た「敬語表現化」の問題に関する考察．早稲田大学待遇コミュニケーション研究会.
４．金東奎　：　2005　「敬語表現化」の観点から見た待遇表現教育の問題―「敬語表現化要素」の問題を中心に―．早稲田大学日本語教育学会2005年春季大会第5回研究発表会資料集，36-39項.
５．田中奈央，金東奎，高木美嘉，田中奈央，田中美樹，蒲谷宏　：　2005　コミュニケーション活動型授業に関する考察―日本語５Ｂ・６Ｂにおける実践から―．早稲田大学日本語教育学会2005年度春季大会第5回研究発表会資料集，16-19項.
６．須賀和香子，金東奎，高木美嘉，田中奈央，田中美樹，蒲谷宏　：　2005　「待遇コミュニケーション教育」としての「コミュニケーション活動型授業」に関する考察―早稲田大学日本語研究教育センター「日本語５β・６β」クラスの実践から―．早稲田大学待遇コミュニケーション研究会.